NEPAL HIMALAYA EXPEDITION 1978

SHINSHU UNIVERSITY

ネパール・ヒマラヤ

1978年・信州大学遠征隊の記録

プレモンスーン　ナンパ東南峰（シェティ・バフラニ）

ポストモンスーン　ニルギリ南峰

信州大学山岳会
信州大学学士山岳会

序文

前信州大学長　加藤　静一

信州大学山岳会と学士山岳会が協同してヒマラヤへ遠征することになったと当時の学長室へ山田哲雄助教授などが挨拶に来られたとき私は正直なところ信大としてはちと身分不相応な計画ではないかと考えて呉々も無理はしなさんなよ又資金面など大丈夫かねなどと言った記憶があり。その後岐阜県高山市で東海北陸地区国立大学長会議をやっていたとき信大隊が七千米の峻峰に無酸素で登頂に成功したという朗報が飛び来んで来た。立山登山五百回以上という有名な富山大学林勝次学長など大いに驚嘆して信大も中々やるもんだねと、わが医学部には順応医学研究施設あり、そこの検査では超人間的な適応能力を持った学生もいるからねと小生鼻を高くした一幕もあった。ついで山田助教授より逐次経過報告あり秋にまたニルギリ・ヒマールをやると、貧乏世帯のくせにあるいは貧乏なるが故に随分欲張った話しだな、いい加減にしとかんかいとも思ったが山田隊長のペナルティーなどの事故も克復して春秋二回ラッキーに最も効率的な成功を収めて全員無事に帰還されたことに心からの祝意を表したい。隊員の撮影されたジェティ・バフラニの雄姿は学長室に飾り来客などに自慢していたものである。

私の恩師眼科の庄司教授は記録マニアで北アルプスの山々を初めとして北海道東北さらに海外の十六ミリフィルム、高山植物など三十年に亘っての山行の記行文と共に集積されているがこのような記録は自ら体験した者でないと充分その滋味を解し難い憾みがあるにしても後に続く同志たちを益するもの少しとしないと信じて信大山岳会ならびに関係諸氏の労を多としたいものである。

発刊にあたって

信州大学学士山岳会長　堀　勝彦

かつて山々は、神々の住む世界であった。特にユーラシア大陸を、延々と東西に走る世界の屋根と呼ばれるヒマラヤは、温帯アジアと熱帯アジアを分けて聳え、人々は山を神とみたてて、拝みこそすれ登るということには考えも及ばなかった。

やがて小さな船を浮かべて大洋を横ぎり、寒暑の砂漠を越えて、未知を探ぐり新天地を求めて、男たちは探検という過酷な行為に熱中しはじめて、水平の広がりと垂直の高まりとが、次々と発見され踏破されていったが、それでもなお、ヒマラヤはより遠くより高い存在であった。

永く重苦しい大戦のあと、信州大学は松本高等学校の変身として誕生した。先輩たちは戦後の貧困の中で、山岳部を結成して青春を山に渓に、登山という形でぶつけたのであった。地の理が良いために、北アルプスが中心となって、数々の苦難な行為が完成されていったが、いつとはなしに誰れの心にも、ヒマラヤにたいする憧憬が、芽生えて炎となりつつあった。

信大山岳会のヒマラヤ行は、一九六七年に始まる。この隊が発端となって、一九七一年のアンナプルナII峰へ遠征隊がくまれ、本格的な登山が行われた。一九七八年には、日本における気の合った仲間が、気に入った山に登るという気軽な形を、ヒマラヤで実行しようと、モンスーンの前後に、ナンパ山群とアンナプルナ山群に、二つの軽装備の登山隊が向って、シェルパを使わないで、二つの未踏峯の上に立ったのであった。

山に登るということに、ひたすらに情熱を注いだ仲間たちが、一人ずつ個性的な感激をあじわって、ひとつの区切りをもって帰ってきた。その後の人生に大きな影響を及ぼしていることであろう。まず経験することを、それがなによりの哲学であろうと思う。仲間として、二つの登山隊にエールを贈ろう。

「アラヨー」。

一九七八年 信州大学山岳会・同学士山岳会

ヒマラヤ登山をふりかえって

山田　和彦

信州大学山岳会・同学士山岳会にとって一九七八年は、春期にジェティ・バフラニ（六八五〇メートル）、秋期にニルギリ南峰（六八三九メートル）と標高は低いものの、ネパール・ヒマラヤの二峰に初登頂することができ、海外遠征の面では画期的な年となった。

それぞれの登山活動についてはあとの報告に詳しく述べてあるので、ここではこれらの登山についての総括をしてみたい。

両隊についていえることは――

一、ライトエクスペディションであったこと

計画の段階から実行委員会組織なども隊員中心に簡素化をはかって行動しやすくし、メンバーの時間的あるいはその他の面での生活へのしわよせを極力少なくした。

二、金をかけない登山隊であったこと

装備、その他全ての面で必要最少限におさえることにより安上りの遠征となった。

三、　ベースキャンプ以上の登山活動は高所ポーターの助けをかりず、自分達のみで行ったこと。

標高が低いということもあったが、登山は自分達だけで行うという方針を両隊ともつらぬいた。

これらは、いかにも信大隊らしい登山となったと考えており、今後の当会での七〇〇〇メートル級の登山は特殊な場合を除いて、同じような形態をとるものと思われる。

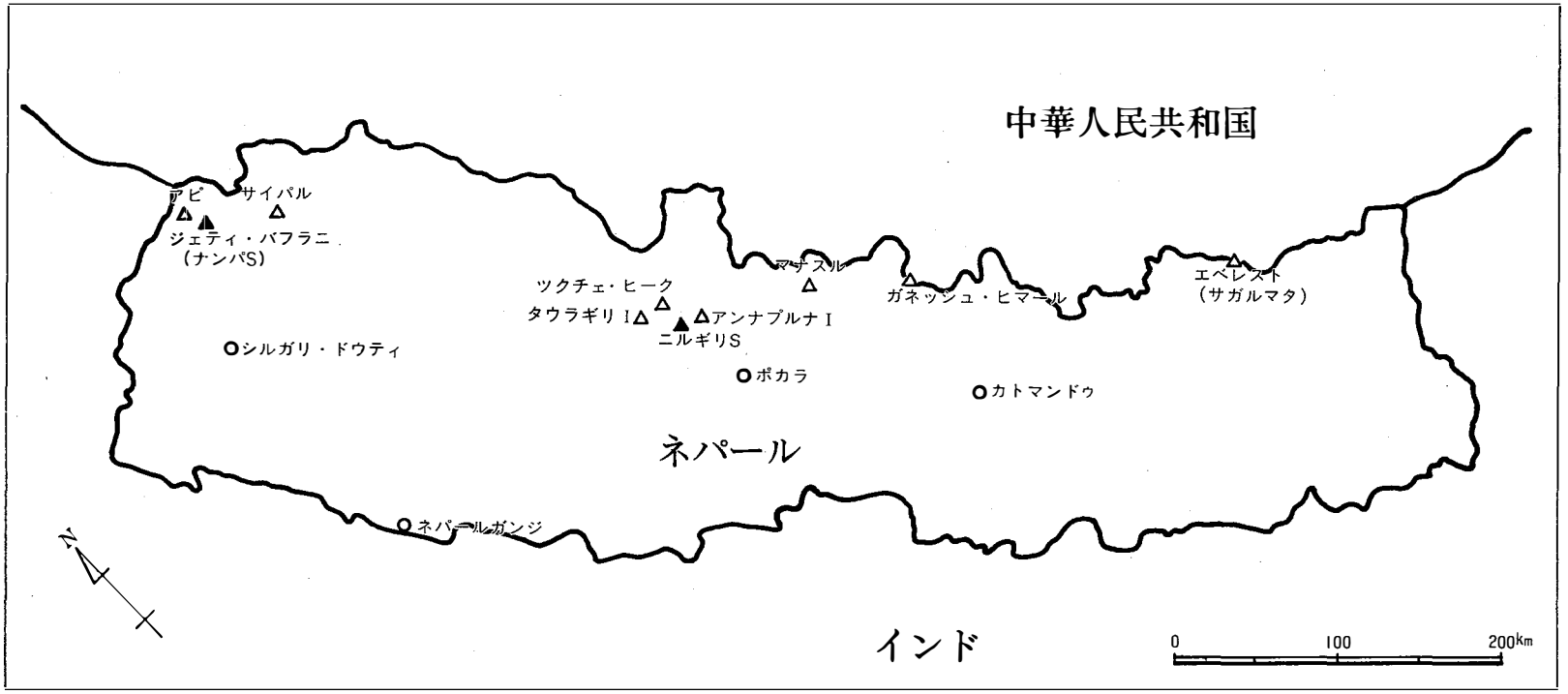
ジェティ・バフラニ登山についていえば、サリモア・コーラのルートが未知であり、ベースキャンプ設営までが勝負であった。ポーターと食糧不足には泣かされたが、なんとかベースキャンプへたどり着くことができた。なかなか行くことのできない西ネパール（ネパール人に言わせれば西ネパールの西とのことであるが）を歩き、貴重な経験となった。

ニルギリ南峰登山は、当会の一九六七　小川、望月らの偵察行以来申請を続けていた山であり、ヒョ

ンなことから許可がおりていて(この経緯は報告に詳しい)念願をはたすことができた。春のジェティ・バフラニ隊の三井、吉田、師田が帰国することなく参加し、藤松らを加えて、問題のアイスフォール帯も突破、全員登頂に成功した。両隊共に登山でのアクシデントは全くなかったといえる。

両峰の初登頂は本当に幸運であったが、一九七一年の当会のアンナプルナII峰遠征以後の努力(会として、個人として)の積重ねの一つの成果と考えたい。この実績を今後の会の活動に生かし、次のステップに進みたいと考えている。

ネパール王国概略図


中華人民共和国
アピ
サイパル
ジェティ・バフラニ
(ナンバS)
ツクチェ・ヒーク
タウラギリ I
アンナプルナ I
ニルギリS
マナスル
ガネッシュ・ヒマール
エベレスト
(サガルマタ)
シルガリ・ドウティ
ポカラ
カトマンドゥ
ネパール
ネパールガンジ
N
インド
0
100
200km

目次

序文　前信州大学長　加藤　静一……3
発刊にあたって　信州大学学士山岳会長　堀　勝彦……4
一九七八年信州大学山岳会・同学士山岳会
ヒマラヤ登山をふりかえって　山田　和彦……5

第一部　JETHI　BAHURANI
——プレモンスーン期——……17
なぜ、ジェティ・バフラニへ……18
遠征隊の概要……21
カトマンドゥ……22
シルガリ・ドウティ……29
キャラバン……33
シルガリ・ドウティからチャインプールまで……33
ドウリへ……39
ベースキャンプへ……43
ジェティ・バフラニの頂を目指して……51
BCからC1……52

C1からC2……54
C2からC3……55
ジェティ・バフラニの頂へ……58
BCへ下山……63
サリモア・コーラ源流へ……65
帰路のキャラバン　再びチャインプールへ……67
BCを後に……67
バジャン飛行場（フライト待ちの日々）……70
隊員、シェルパの横顔Ⅰ……76
雑人雑感Ⅰ……84
各係報告……94

第二部　NILGIRI　SOUTH

——ポストモンースーン期——……119

ニルギリ南峰登山実行までのいきさつ……120
遠征隊の概要……124
カトマンドゥ、ポカラ……128
キャラバン……131
ポカラからチョーヤ……131
チョーヤからBC（ベースキャンプ）……133

ニルギリ南峰の頂を目指して……140
BCからC1……142
C1からC2……143
C2からC3……146
ニルギリ南峰の頂へ……152
再びカトマンドゥへ……160
隊員、シェルパの横顔II……162
雑人雑感II……167
各係報告……181
遠征隊に後援・援助をいただいた方々……194
編集後記……196

ナンパ東南峰・ジェティ・パフラニ（6850m）

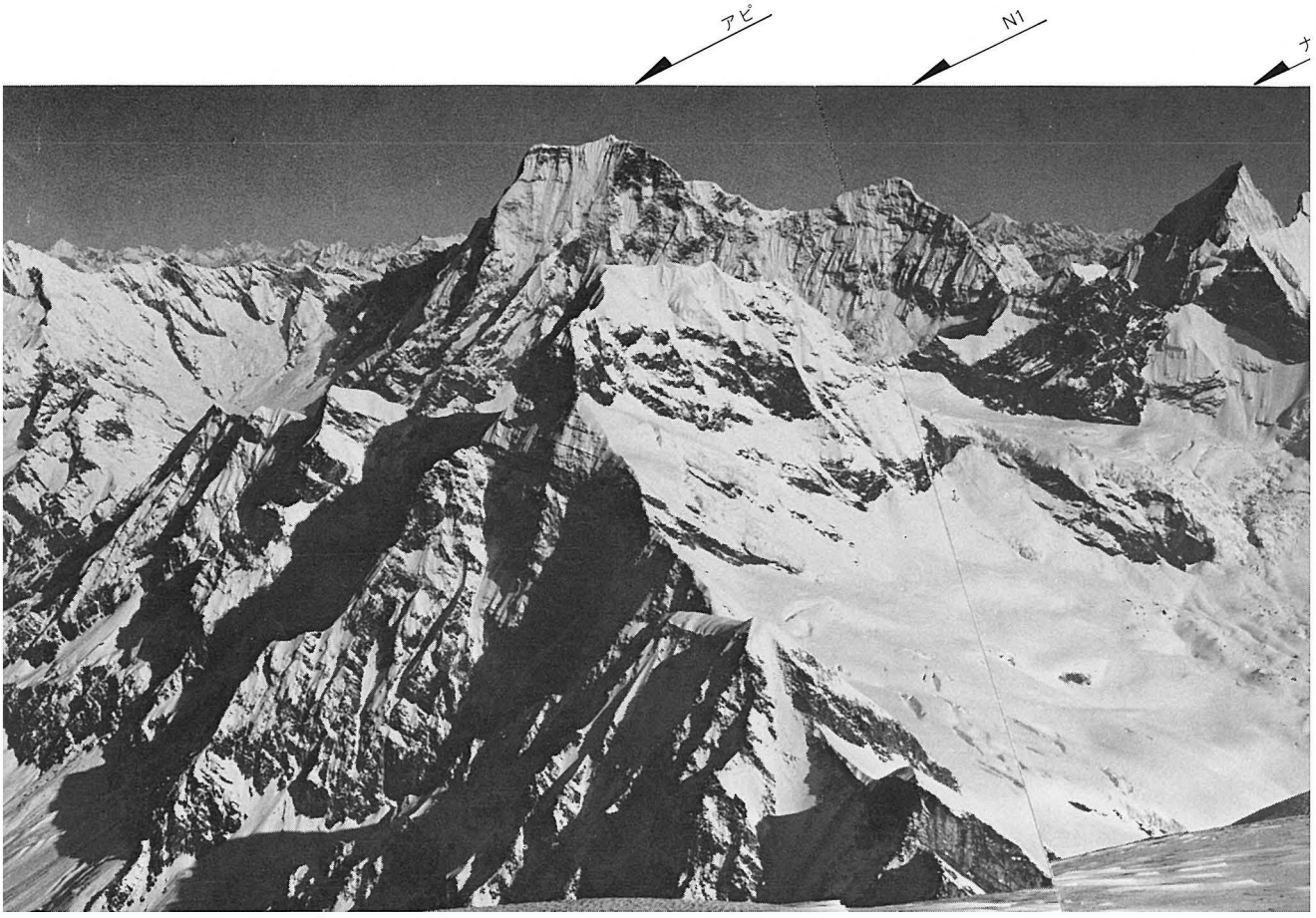
I部 ジェティ・バフラニ
プレモンスーン期

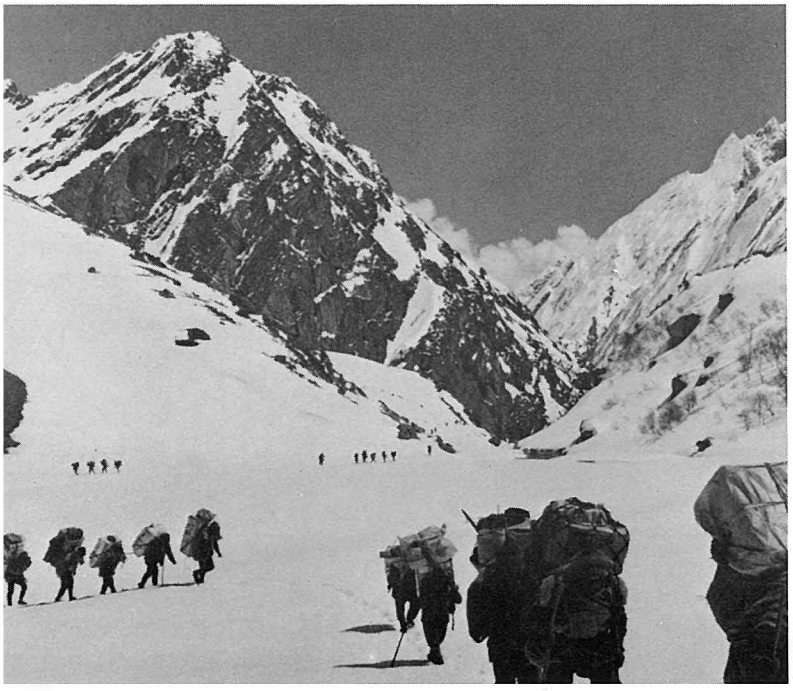
登頂を終えて肩に登り返す　師田、吉田（三井撮影）

ジェティ・バフラニ頂上で　三井、師田（吉田撮影）

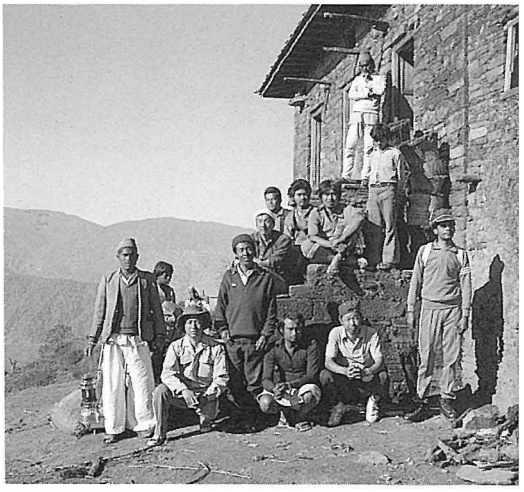
C3より見たアピ・ナンパ山群

登頂を終えてC1にて（左から井関、山田、三井、師田、吉田）　ジェティ・バフラニ合宿五人だけの世界だ

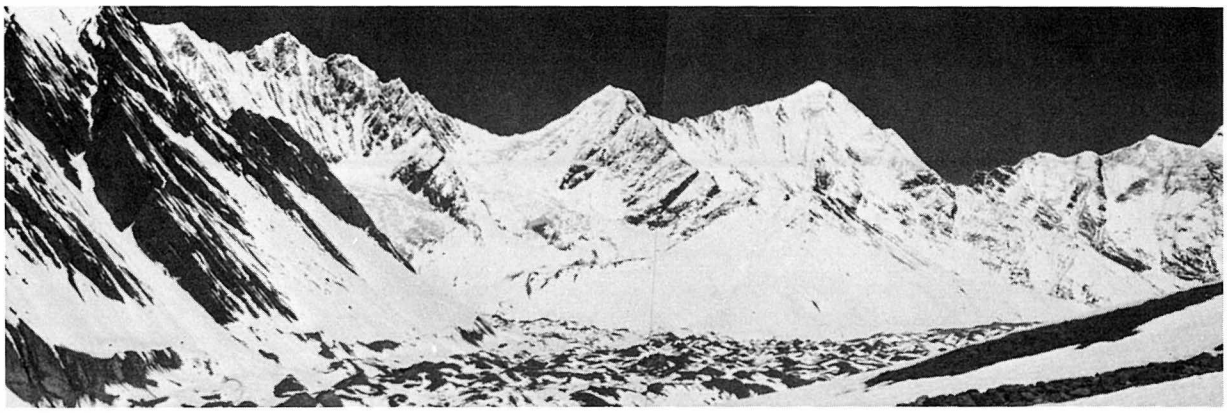




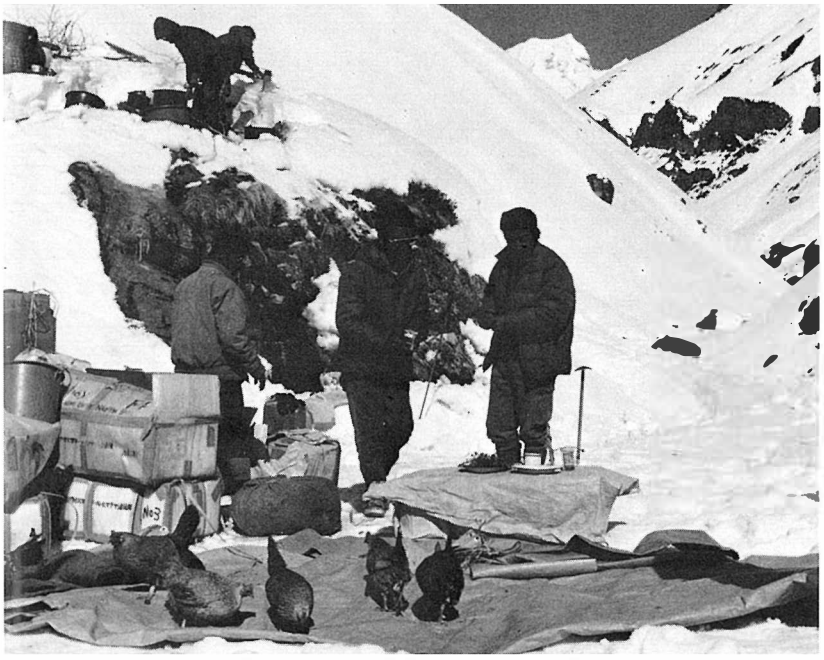
ゴルジュ帯を抜けてもうすぐベースキャンプ
ポーター達もはりきっている



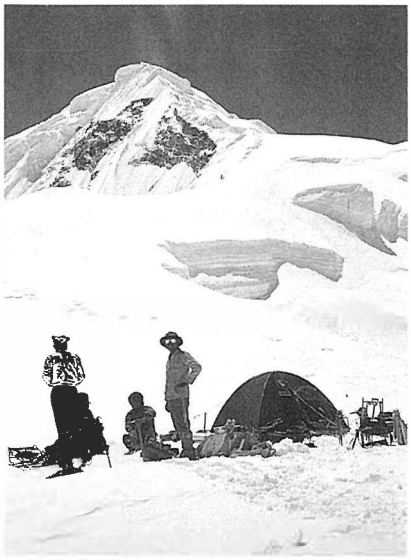
キャラバン出発の朝ドウティの宿泊所前で



サリモア・コーラ源流部



ベースキャンプ設営　お祈りの準備をするシェルパ達



C2　ジェティ・バフラニの肩をバックに

やっとチャーター機が来た。荷物の積込みを終わり、カトマンドウへ出発

第Ⅰ部　JETHI BAHURANI

(6850 m)

——プレモンスーン期——

なぜ、ジェティ・バフラニへ

山田　和彦

今回、私達がなぜジェティ・バフラニを目標の山に選んだかについては、信州大学山岳会・同学士山岳会が今まで、どのように海外登山にとり組んできたかを述べなくてはならない。

信大山岳会・同学士山岳会が海外の山に登るべく行動をおこしたのは一九六七年に佐藤邦彦（信大学士山岳会）、小川勝、望月映洲、米倉幸夫（信大山岳会）によるネパール・ヒマラヤ偵察行が最初であった。彼らは船でスリランカへ渡り、汽車とバスでインド大陸を縦断してネパールに入った。初めての海外旅行であり、すべてが初体験ということで苦労が多かったが、日本人としては初めてミリスティ・コーラに入ってニルギリ東面をさぐり、またガネッシュ・ヒマール南面に奥深く入って、ガネッシュⅣ峰（パビル）への登路を発見、その他多くの情報や貴重な体験を持ち帰って会に活を入れた。

会はネパール・ヒマラヤ遠征実行委員会を作って目標の山を㈠ガネッシュⅣ峰、㈡ニルギリ南峰に決め準備にかかったが、当時、ネパール政府はヒマラヤ登山を禁止しており、一九六九年には三十八のピークを解禁したものの、その中にはガネッシュⅣ峰は含まれておらず、リストアップされていたニルギリ南峰に許可申請を行った。しかし、ネパール政府より同峰への申請を却下（理由は不明）されたため、アンナプルナII峰に変更して許可を得、一九七一年春、会の総力をあげて遠征を行ったが、頂上直下に至るも佐藤正敏隊員の遭難死亡という遺憾な結果となった（このことは報告書「アンナプルナII」に詳しく報告されている）。しかし永続性のある海外登山とそれに伴う学術調査を願っていた我々は、ヒマラヤ遠征実行委員会解散後も海外登山研究会を発足させ、広く海外の山に関する情報の収集や海外登山に関する研究を行うとともに、ガネッシュⅣ峰、ニルギリ南峰の偵察とネパール政府への交渉を行ってきた（この努力が無駄ではなかったことが、今回、ネパール政府観光省登山課での話の中で分かった。このことについては後記する）。一九七五年頃から、ガネッシュやニルギリが近く解禁されるだろうとの情報が入り、他隊に先がけて許可を得るためにはどうすれば良いか（両峰共に多くの他隊がねらっていた）苦心したが、適切な方法は分からず、それまで通り登山課の担当官へ私的な計画書を送ったり、ネパー

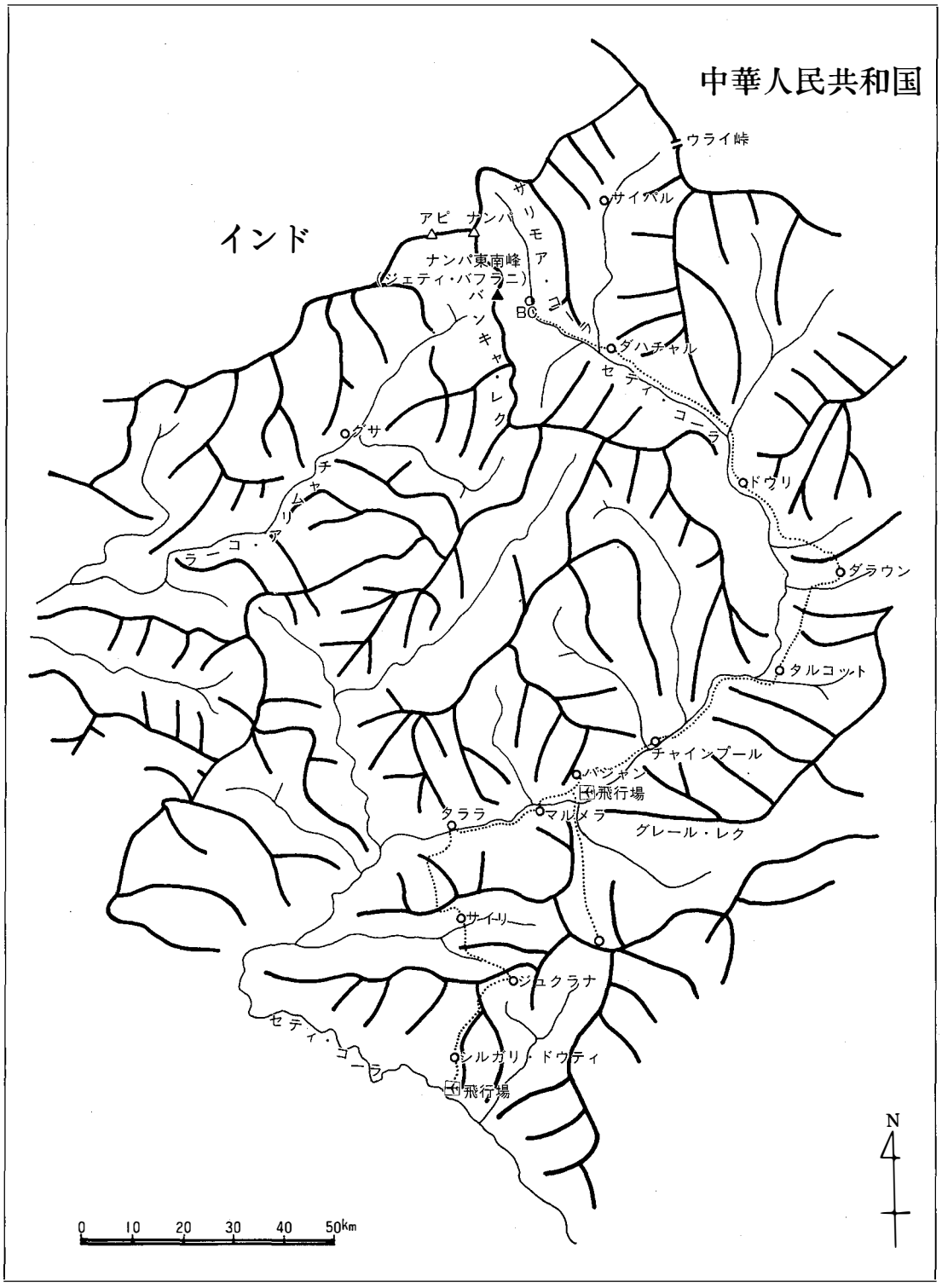
ルへ出かけた者が直接、担当官に会って話をしたりするだけであった。

一九七七年二月、ネパール政府の登山規則が変り、この文面から我々は「全ての山に対して申請が可能」と解釈してガネッシュⅣ峰の登山申請をしたが、日本山岳協会よりの推薦状が得られず、再度ニルギリ南峰へ変換して申請した。しかしネパール政府からの返事は不許可であった。これらガネッシュⅣ峰やニルギリ南峰の計画は、海外登山研究会の会長をしていた山田が中心になって行っていたが、アンナプルナⅡ峰遠征から六年たち、ガネッシュなどの解禁もはっきりしない当時、ともかく一九七八年には確実に許可が得られる山に隊を出し、その過程でガネッシュの許可が得られれば、そちらへ変更して行こうということで、ガネッシュⅣ峰とニルギリ南峰に替る山を具体的に捜しだした。少人数で登れる七〇〇〇メートル前後の未踏峰が条件であったが、信大としては東部―中部ネパールは誰かしら歩いており、西部ネパールだけが未知の地域として残されていた。これらのことより西部ネパールで最も高い処女峰ジェティ・バフラニが目標の山と決定された。

この山はネパールの西端、ナンパ山群の南のバンキャ・レクにあり、この地域ではアピ、サイパルに次いで第三の高峰（六八五〇メートル）でありながらほとんど注目されず、一九七二年名古屋大学隊が初めて西側のロカピ・コーラから北稜の肩に登ったが、その後この山を目指した隊はない。とくに東面サリモア・コーラには一九七一年松本登高会の新井、渡辺両氏が入った記録があるのみであった。我々は名大堀田氏、松本登高会渡辺氏からの話や写真から東面（東稜または北稜）からの登頂は可能と判断した。かくして一九七七年八月登山申請を行い、同年十月許可の連絡を受けて登山の具体的準備に入った。

※ジェティ・バフラニ(Jethi bahurani)とは、今回同行したリエゾン・オフィサーやシェルパによれば、ヒンディ語で「兄嫁」または「一番上のお姉さん」という意味とのことである。東面からはサリモア・コーラ深く入らないと、その姿をみることができないので、この地域の住民は誰もその山の存在を知らない。

ナンパ東南峰（ジェティ・バフラニ）キャラバンルート概念図



遠征隊の概要

隊の名称

一九七八年信州大学ネパール・ヒマラヤ遠征隊

THE NEPAL HIMALAYA EXPEDITION OF SHINSHU UNIVERSITY 1978

遠征隊の目的

西部ネパール　ジェティ・バフラニ峰《ナンパ東南峰》（六八五〇メートル）の登頂

遠征の期間　一九七八年二月二一日～一九七八年六日九日

隊員の構成

隊　長　山田和彦（40）丸子中央病院勤務

隊　員　井関芳郎（30）松本鑿泉工業㈱勤務

三井和夫（26）農業

吉田秀樹（24）信大人文学部学生

師田信人（23）信大医学部学生

シェルパの構成

サーダー　アン・テンバ（ナムチェ）

コック　パサン・ニマ（ジュンベシ）

キッチン・ボーイ　キパ（パーレ）

メイル・ランナー　クリシュナ・バハドール（タマン）

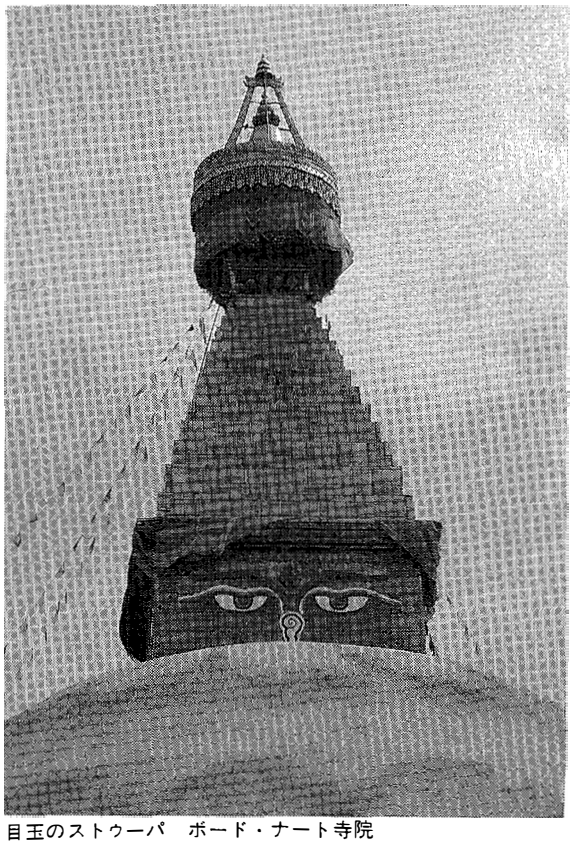
〃　カンチャマン・ラマ（タマン）

リエゾン・オフィサー　ウペンドラ・アディカリー

カトマンドゥ

行動概要

二月二二日　三井、師田カトマンドゥ着
二月二六日　山田カトマンドゥ着
二月二七日　シェルパ（五名）と契約
三月　一日　井関、吉田、井上夫人、大二郎カトマンドゥ着
三月　六日　リエゾン・オフィサー（ウペンドウ・アディカリー氏）決定し、会う。
登山許可証受領



目玉のストゥーパ　ボード・ナート寺院

カトマンドウで

師田　信人

三月二二日、三井さんと二人、カトマンドゥ空港に降り立つ。暑かった。冗談かと思ってたのにとうとう来ちゃったか、という感じだった。すぐランジャンさんのところへ行って、今後の事を話し合う。とにかくネパールは初めてで、見るもの聞くものすごく新鮮だ。三井さんにいろいろネパール語や買い物のコツを教わりながら、地図を片手に暇な時は街中をうろついていた。先発隊はやることがいっぱいある。シェルパ達と会ったり、通関のため空港まで足を運んだり……。

そんな合い間に時間を作って、パタンの岩村先生のところへ行ってくる。毎日夜は冷えこむが、日中は汗ばむ程だ。ツクチェ・ピーク・レスト・ハウスにデポしておいた荷を運び、点検する。七年前のアンナプルナII峰の時のものだ。いろいろな難問が山積みで頭が痛かった。二六日、山田隊長が到着してほっとする。どういうわけか俺がドクター・サーブをやらされることになった。こんなことならもっと勉強しとくんだったと思いながら、もはや後の祭り、開き直るしかない。

時期が時期だったので、他の遠征隊もいろいろ来てた。ダウラギリI峰を目指す都岳連隊。II峰に向かう名古屋山岳会の人達。JACの小牧さんetc……。宿舎は別だったけど同じ長野県の長山協中信支部の人達もチューレン・ヒマールを目指して来ていた。

三月一日には井関さん、吉田さん、それにOBの井上さんの奥さんと息子の大二郎君が到着し、やっと全員そろう。買い出しなどもほとんど終え、後はチャーター・フライトがいつ出るかだけだ。小牧さんあたりが中心になってスキヤキ・パーティーをやったりしたけど、とにかくオーストラリアからの輸入牛肉が安くてびっくり。なんで日本はあんなに高いんだろう。頭にくるなあ。ネパールでは牛は神聖な動物なのに、他所で殺した牛を他所の国の者が食うのは問題ないらしい。非常に理解に苦しむけれど、これがネパールという国なんでしょう。それにしても、神聖な子牛に関しての法律ってのがあって、牛とSexすると……なんて項目まであって愕然というか呆然というか、よう考えてくれるわ、と呆気にとられた。

やる事がなくなるとあっちこっち飛び回る。同じところでも、何回行ってもなにか新しい発見があって面白い。ヒッピー・ストリートを歩けば、たかってくるハッシッシ売りや闇ドル屋をからかって遊んだり、スワヤンブ・ナートへ行って仲良くなった子供達の家まで遊びに行ったりしていた。そのうち山田さんが登山課にガネッシュ・ヒマールのことで行った際、どういうわけか今回一度却下されていたニルギリ南峰への計画が許可になっていることを知って大騒ぎになった。冗談みたいに、タナからボタモチって感じだ。いろいろ秋の予定はあったけれど、せっかくのチャンスなのでシーズンを変更して、今年の秋に狙ってみようということにする。翌日、三井さん、吉田さんと三人で登山課へ行き、和英辞書片手に大奮戦。とにかくこれがきっかけで秋の遠征が実現。そしてニルギリ南峰初登頂につながったんだからまったくどこで何が起こるかわかったもんじゃない。俺達にとっては本当にラッキーだった。

フライト待ちの間に日だけは経って行く。名古屋山岳会の人と一緒に、ネパールの子供達相手にサッカーの試合をやったり、どういう行きがかりからか、山田さんの不要になったシャツなどの衣類を売り払う役をおおせつかって、必死の思いでねばって少しでも高く売りつけようとし、やっと売り払ったのに、山田さんはその金を全部カジノですってしまった。その頃俺はココナッツを食い過ぎて、腹痛を起こしベッドの上でうなっていた。自分でも一体俺は何やってたんだろうって気がする。アッサンの近くにあるマウンテン・ショップのニンマの店にも、みんなでよく遊びに行っていた。いつ行っても大体小牧さんが先にいた。彼女の店でお客との応対を見てると飽きない。ぶっ壊れているカートリッジ・ランプを、平然と売りに来たフランス人のアベックもいたし、トレッキングに行くだけなのにオーバー・シューズを買っていこうとしたアメリカ人。まぁどこもさまざまだなぁって思って見ていた。

そうこうしているうちに九日に、チャーター・フライトの第一便が飛んだ。俺と井関さんは後発なので、若干ふてくされる。第一便が出た後は天気も崩れ、第二便のメドがなかなかつかない。井関さんと二人でバンバンの高久さんのとこへ行ったり、ニンマのところへお茶を飲みに行ったり、それでも一度、ドクターになりすまして、名古屋山岳会隊について行くことになった小牧さんを送りに空港まで行ったら、エベレストの初登頂者のテンジン・ノゲル氏に偶然出会ったこともあった。日本では御法度になってることも退屈まぎれにいろいろと……!

やっとの思いで第二便が出たのは一四日だった。ガネッシュ・ヒマール、アンナプルナII峰が印象的だった。

カトマンドゥの音

三井　和夫

到着した夜は、ちょうど満月で、宿舎のエキスプレス・ハウス東隣りのチベッタンの住宅からは、大型のシンバルの音が力強く響いてきた。ジャーンジャーンジャーンと次第に速く鳴って、夕暮れのプジャ（お祈り）が始まる。満月には、宗教の別なく、感謝のお祈りがあるようだ。この日は、結婚式も街のあちこちから行列を繰り出して、ブラスバンドを先頭に、歩きまわる。浮かれた気分で街に出ると、寺院の塔は豆電球で飾られ、灯火がともり、入口の鐘はカーンと鳴る。僕も鐘つき棒を振ってみる。乾いた音が春の空にすがすがしい。小さな鈴もあり、チリーンチリーンと風鈴のようだ。カトマンドゥは夜になると、活気がでる。バザールでは憩の一刻に、家の前の道端に座って語り合っている。ラジオからはネパール音楽と、ヒンディ・シネマの音楽が、思い切り大きな音でバザールをつつんでいる。夕闇に包まれた一ときは、人の声が妙にはっきりと、なつかしく聞える。ほっとした安堵感に包まれて、一日のうちで一番落ち着いている。

アッサン・バザールは、いつも盛況のネパール一のバザールだ。道は、寺院を中心に放射状にのびて、木造や煉瓦建ての三～四階建ての家並が、道の上をおおっている。ベランダや窓からは、通りを歩く人を見ている人が多い。彼等にも興味は尽きないのだろう。車が一台通ると道幅一杯になるのに、タクシーは果敢に突っ込んでくる。けたたましいクラクションを鳴らして、自己主張する。通行人が道いっぱいに歩いているところへきて、人が道を開けてくれるのを待っていたら、かえって邪魔なのだろう。後ろからクラクションが鳴っていても人々はあわてない。そして自動車も不満は言わない。自転車は貸し自転車屋があり、一日5ルピーで貸りられる。ベルなしの自転車は、バザール内では動けない。ベルを鳴らしてやっと、通行人が道をあけてくれるのだから。リキシャはカトマンドゥの乗り物の中で最も楽しい。プカープカーと拍子の抜けた豆腐屋のラッパのようにホーンを鳴らして、バザールの中を走る。大人二人乗りで、料金は交渉しだい。のんびり乗っていられるのがよい。殆んどの車夫が短パンで、彼等の鍛えられた脚は見事なものだ。寺院の鐘がなり、笛売りの笛の音、そういった一大交響楽が聴けるの

も、バザールならではの興味深いものだ。

カトマンドゥにて

吉田　秀樹

ネパールの飛行場はやはりネパールらしい国際空港だった。それまでの台北、香港、バンコクに比べればそまつなものだが緊張感を感じさせない雰囲気を持っている。簡単に通関を済ませると先発した三井さん、師田そして山田さんが迎えに来てくれていた。タクシー料金の事で運転手とワイワイ交渉している師田がおかしいやらたのもしいやらで……さすが師田君。日本的な田園地帯を抜けてランジャン氏の経営するエキスプレス・ハウスについた。皆で買ってきた昼メシのパン、ジャム、コーヒー等を食べていると外国にいるという実感がわいてこない。実際そうであった事もあるが、今考えてみると意識的に日本と変わらないじゃないかという事を考えて、外国にいるという不安を紛らわしていたんじゃないかとも思う。

チャーター便の都合でカトマンドゥ発が三月一四日になり、それまでの一週間はパッキングも先発隊がほとんどやっていてくれたのでのんびりしたものだった。パシュパティ・ナートやスワヤンブ・ナート等へも出かけたが正直な所はあまり興味がなかった。僕の性格からして、一人でどこかにおき去りにされない限りなかなか自分からやろうとしないのだから、まぁこの登山が終ったらそれなりに楽しもうと思っていた。それでも日本とはちがったおもしろい事が多かった。こちらへ来ている日本人の多くは「会社をやめて来た」を筆頭にやっぱり大きな決断をして来ている事、そうかと思うと何ヵ月も海外をウロウロしている人。ホッとするような、帰ってから大変だろうなと複雑な気持。

味は落ちるが牛肉の安さ。醤油さえあれば現地調達でスキヤキが出来るとは思わなかった。外人さんはああいう物を食っているのか(西洋料理店にて)。朝はパン、昼晩も安い西洋料理店やチベット料理店があるのでなかなかネパール食―いわゆるカレーにスープに御飯―を食べられない。三日もするとどうしてもたべたくて三井さん師田と三人でとあるきたない店へ入ってみる。ここなら充分ネパールの雰囲気である。やがてでて来たその御飯の量の多さと強烈な米袋のニオイ。結局三人共食べ残し、そのまま

ツクチェ・ピーク・レスト・ハウスにて　トラチャン氏一家と井上夫人、大二郎君

店を出たんじゃ店の主人に悪いと思い、片言のネパール語で『デレイ』が多いだから多すぎるは二つくっつければいいんじゃないか。と『デレイ、デレイ（多すぎるのつもり）』と言って店を出た。今振り返ってもここのは飛び抜けてまずかったようでした。

早く山に登りたいなと思いつつも、町をブラブラしたりして過ごし、いよいよ出発の日。通関がないので国内便であることを思い出し、高度計の針を合せて自分たちのチャーターした飛行機に乗り込んだのでした。

ネパールの想い出

井上　直美

海外へ行くならネパールに行きたいと思っていた時、信大の人たちが山へ行くとの事。いっしょに連れて行ってもらおうと急に決めた旅立ち。息子と二人の珍道中、金魚のうんこのようにどこまでも、いつまでも、山の人たちにくっついて歩いていました。

日本しか知らなかった私にとってカトマンドゥの町の息づかいに窒息しそうで、ついていけない感じ。不潔ぽくって、こわくって、近よれないというのが正直な印象でした。

街に人、人があふれているんです。子供も大人も青年も道路にあふれている。日本ではみんな学校や会社に行っている時間なのに。なぜか、やたらと街にあふれている。日本の中で見る目で、カトマンドゥを見るから。日本の中で感じる感じ方で、カトマンドゥを感じるから、それは大変なものでした。

でも、だんだんに慣れてきて、バザールなどを見てまわるのは楽しかった。女はどこにいてもショッピングは好きらしいです。いくらでもほしくって、財布と相談しながらでしたが……。乗り物はタクシーと人力車(リキシャ)。小さな子が、足がやっととどくくらいの自転車をこいで、人力車をひっぱっている。タクシーは日本の中古車が多く、それもエンコ寸前の車ばかり……。生活はいたって貧しく、下着をつけていない小さな女の子。サリー姿も、庶民は何日も洗濯していないような、地味で丈夫な布地のものを着ている。

ポカラでは、わずかな水で頭を洗ってもらっていた子がいた。あの子は何日ぶりで洗ってもらってい

たのだろうか？

そうポカラへは金魚のうんこではなくて、息子と二人で行って来た。雄大な山々のふところで、夕日と朝日をこころゆくまで味わった。草原に飛行機がおりるところなどロマンチックそのもの。歩いていける所を、だまされて五倍くらいの料金を払ってタクシーに乗ったり、でっかい菩提樹の下で日射をさけながら休んで食べたオレンジのおいしかった事。紅茶にカレーもおいしかった。女の人が、サリーを着て大きな水がめを頭にのせて川から上がってくる姿など、この世とも思えぬ美しさに見とれていました。

言葉が全然話せないのでハチャメチャの旅でしたが……、息子は活発ですぐだれとも友だちになり旅を十分楽しんでいたようでした。

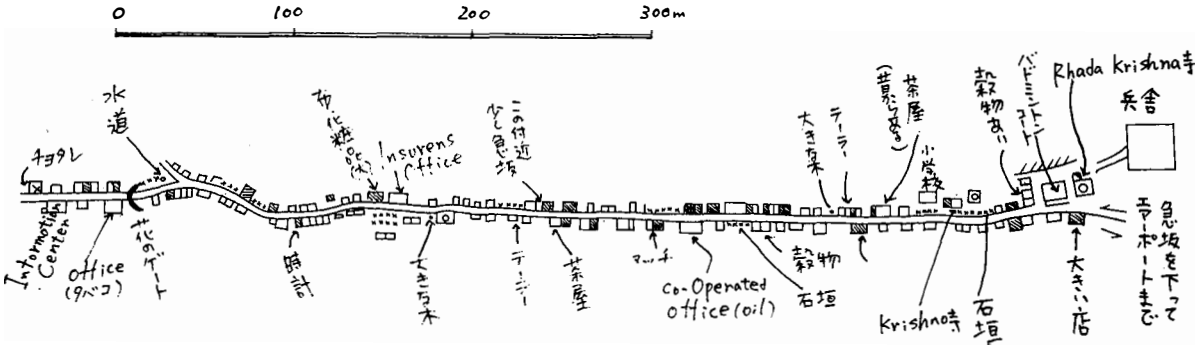
行動概要

三月　八日　井上夫人、大二郎、離ネ
三月　九日　山田、三井、吉田、リエゾン・オフィサー、シェルパ三名チャーター便でシルガリ・ドウティへ
三月一四日　井関、師田、シェルパ二名来る。
三月一八日　シルガリ・ドウティではポーター集まらず、師田、クリシュナ二名をポーター集めのため、タララ方面へ出発させる。
三月一九日　夕方、師田らがサエリでアレンジした四〇名のポーターとシルガリ・ドウティ近郊の村からのポーター十名が集まる。

シルガリ・ドウティで

三井　和夫

ドウティの飛行場は、急に眼下にグリーンのカーペットのように拡がった。降り立つと、カトマンドゥより蒸し暑い。セティ・コーラ（川）に架った橋のたもとに、小学校と、数軒の店がある。セティ・コーラの岸では、丸太をくりぬいて、舟を作っている。とうとうと流れる水は、澄んでいて、泳ぐ魚が、吊り橋の高い所からもよく見える。ランジャン氏の弟タマルさんは、薬草局の役人で精悍な人だ。同行は、タマルさんの友人が数名、一行は茶店で茶を飲む。ここはもう砂糖も精製されていない。昼飯になる。我々がついてから、火をつけて、御飯を煮て、魚のタルカリを作る。茶店の中にゴザが敷かれて、我々は、あぐらをかいて、皿に飯を盛ってもらう。カトマンドゥで食べ慣れた飯に比べて、ひどく味がおちる。それでもみな当然のように手でタルカリをまぜて食べ出す。食生活がまるっきり違うのに、待ってましたとばかりに食べはじめる隊員達に、僕自身そうして食べながら、あきれてしまった。なんという適応力のすばらしさか。たらふく食べた。土壁をレンガ色にぬった草屋根の民家が小麦の田園地帯にぴったり合っている。タマル氏は我々のために馬を用意してくれた。ありがたいのだが乗れない。少し行



くと急登に次ぐ急登で振り落とされそうになる。シルガリ・ドウティの街は、二時間登った一〇〇〇メートルも上にあるのだ。天気はよく菩提樹の下の休憩所は汗がすっと引いて気持ちよい。

ポーター集めはなすすべなく、タマルさんもリエゾン・オフィサーのアディカリーさんもお手上げだ。彼等はカードをしたり、軍の駐留所に行って時を過ごし、我々もめいっていた。そんな時、ドウティ・ハイスクールから茶会の招待状が届いた。読みにくい英語だが格式にのっとった名文だった。僕等は時間があるが、返事が書けない。僕は一言オーケー・サンキューと書いて返した。軽い気持ちで学校に行った。こういう場に不慣れな僕等はとまどう。テーブルの上の菓子皿に盛られている甘い菓子はここでは貴重品だ。ドウティの名士ジョシー氏は、流暢な英語で話しかけてくる。答えるのはもっぱら隊長だ。

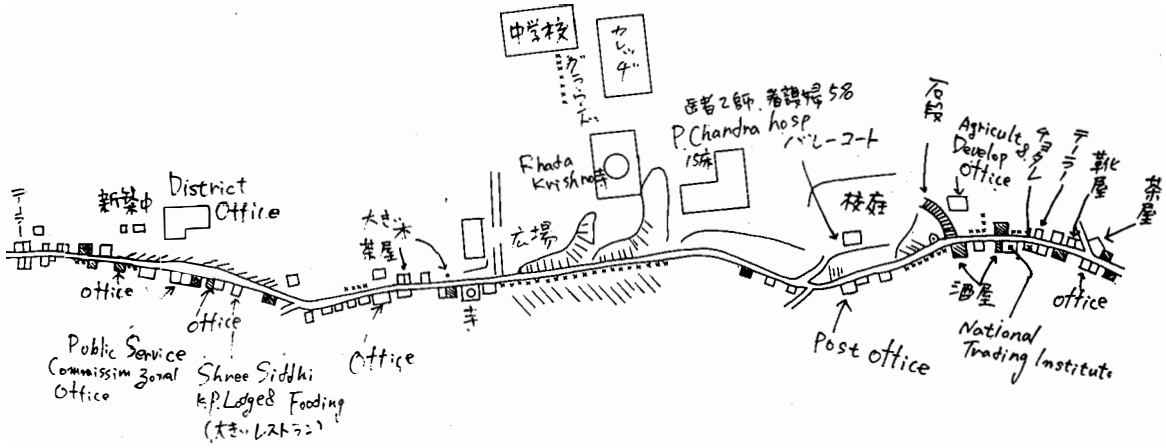
そして、入口は学生の人だかりで後から押されているようだ。ピース・コープのパトリシアはここで英語を教えている。ネパール語も相当なものだ。他英人ボランティアーが一人少し話して歌をうたいだす。我々は『雲にうそぶく』を歌う。英米の歌もでたが、やっぱり極めつけはネパールの歌だ。次から次に歌がつづき楽しく過ごした。子供達とサッカーに興じ、一ときポーター集めの困難さも忘れた。

この時期のポーター集めは、極めて困難である。その理由として以下のように考えられる。専門のポーターがいないこと、チェットリー階級が多くプライドが高く荷を担がない。そのうえ若い働き手はカルカッタ、ボンベイ、ダンガリなどに出かせぎに出ていってしまい村に残っている若者は、家の改築や畑仕事に追われ、食糧のない時期のキャラバンは常に食事の心配がつきまとうという。パトリシアにポーターがいない事を話すと、私が使っているポーターがいるから紹介しましょうかといってくれた。しかし、五〇人必要だと聞いて溜息をついてしまった。二人しか知らないのだから。

サエリへのポーター集め

師田　信人

三月一四日、後発隊としてやっとの思いで着いたシルガリ・ドウティの街だったけれど、俺等はそこで早くもポーター集めという難問にぶちあたった。カトマンドゥにいた時から西部はポーターが集まりに

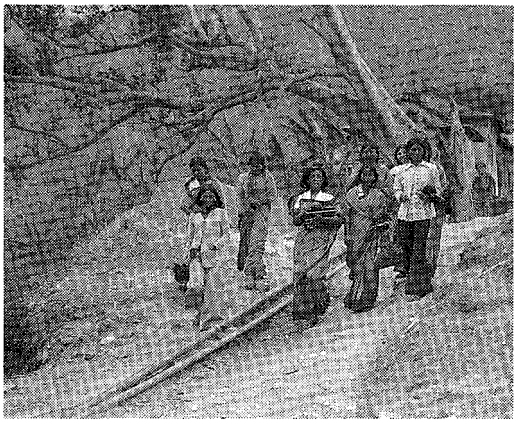


くい。シルガリ・ドウティでは特に、というような話は聞いていたけれど、毎日待てど暮らせど、とにかくポーターが集まらない。役所をあてにしていたんじゃだめだ、とにかく自分達で動いて集めてこようということになり、俺とメイル・ランナーのクリシュナがバジャン、チャインプールまで行くことになった。

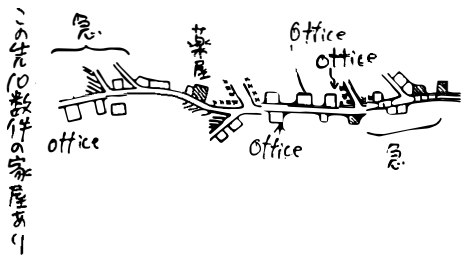
一八日、今日も雨が朝から冷たく降りしきる。六時四十分、シルガリ・ドウティ出発。体中びしょ濡れになり嫌になる。ひどい天気だ。ヒョウ、アラレ、ミゾレと目まぐるしく変わる。寒くて休む気にもなれない。四時間以上、ぶっ通しで歩いて、峠の上にあるカルカにもぐりこみ、初めて一休みする。クリシュナが道をたずね、俺はとにかく歩くだけ。まったくクリシュナだけが頼りだった。自分でもどこをどう歩いているのかわからない。時々何軒か固まった部落がでてくる。そのうちクリシュナが、この尾根を越えるとサエリという部落があってそこから今日の目的地、タララまで三時間くらいだと聞きだしてくれた。道に迷い荒地をすべったり転んだり、尾根を越えやっとの思いで下るとサエリの部落だった。雨は上がったみたいで薄日も射してくる。俺は何か非常にぐったりして、部落の中の石棚で居眠りしていたら、物珍らし気に集まってきた部落の連中にクリシュナが何か話をしてる。ポーターをアレンジできそうだという。最初は二〇人でもいいから集められたら……と思っていたら、すぐ希望者がでて二〇人くらいになった。それでひょっとして、ここで頑張れば四〇人なんとかならないかって気になってきて、クリシュナに話をする。彼が村の顔役みたいなオッサンに話して、ちょっと時間がかかるかもしれないが集まりそうだ、ということになった。まったく、ついこのあいだまでと違って、話がうまくいく時は、えらく調子よく決まるもんだなァって感心する。後のアレンジはやり手のおっちゃんにまかせ、クリシュナと二人で、近くの家でダルと飯を食う。いつの間にか天気はすっかりよくなってきた。対岸の部落の家に泊まることになる。夕方までに四〇人、何とかアレンジでき、あしたシルガリ・ドウティに帰れることになった。何だか信じられない気持ちだ。

俺の泊まったのは土壁の家の屋根裏、夕飯はチャパティだった。日が沈み暗くなると共に何の疑いも持たず眠った俺は、夜中、かゆさで気が狂いそうになった。何かがいるのだ。でもクリシュナは気持ちよさそうに寝ている。「くそっ」、何で俺だけ虫にたかられんのか、ともかく朝までひたすら耐える。おかげで俺の背中は、一九日の朝、ボコボコにふくれあがっていた。その後、俺の体や洋服、髪の毛などからみつけたのからして、ノミ、シラミ、ダニ、南京虫、みんないたみたいだ。そして俺はそれから毎晩、この虫どもと共存共栄していかなければならなくなった。今になってみれば、いい憶い出なんてこ

シルガリ・ドゥティの街並



ピクニック帰りの女学生　シャクナゲ・ギャルズ



とを言っていられるけれど、かゆいし、かけば傷はうむし、で泣きたいような毎日だった。あの頃は…。

そして一九日、朝早く一人だけ先に、連絡文とポーターのリストを持ってシルガリ・ドウティに向かわせる。他の者は朝七時集合ということにしておいたけれど、はたしてみんなに時間の観念なんてあるのかなァ、って疑問は当然のごとく適中して、みんなが集まったのは十一時近くだった。その間、俺は川にはまるし、いいことない。きのうとは別の近道を通ってシルガリ・ドウティへ向かう。天気はすごくいい。

このあたりの子供は、裸足で急な崖のヤギを追い回している。強いはずだと思った。連中が険しい道をスタスタ行くのもあたりまえだと悟る。

ドウティへは五時半ごろ着いた。これでやっと明日、キャラバン出発だ。キャラバンもできず、BC（ベース・キャンプ）も作れなかったら、日本に居る連中に会わす顔もない、と思っていただけに、まずはホッとする。シルガリ・ドウティでは、山田さんの松本の家を売り払ってでも金を作り、カトマンドゥからヘリコプターをチャーターして荷物を運ぼうか（もちろん奥さんとは離婚ってことになるんだろうけど……）って話が真剣に話されていたらしい。まぁ冗談ですんでよかったですよ。

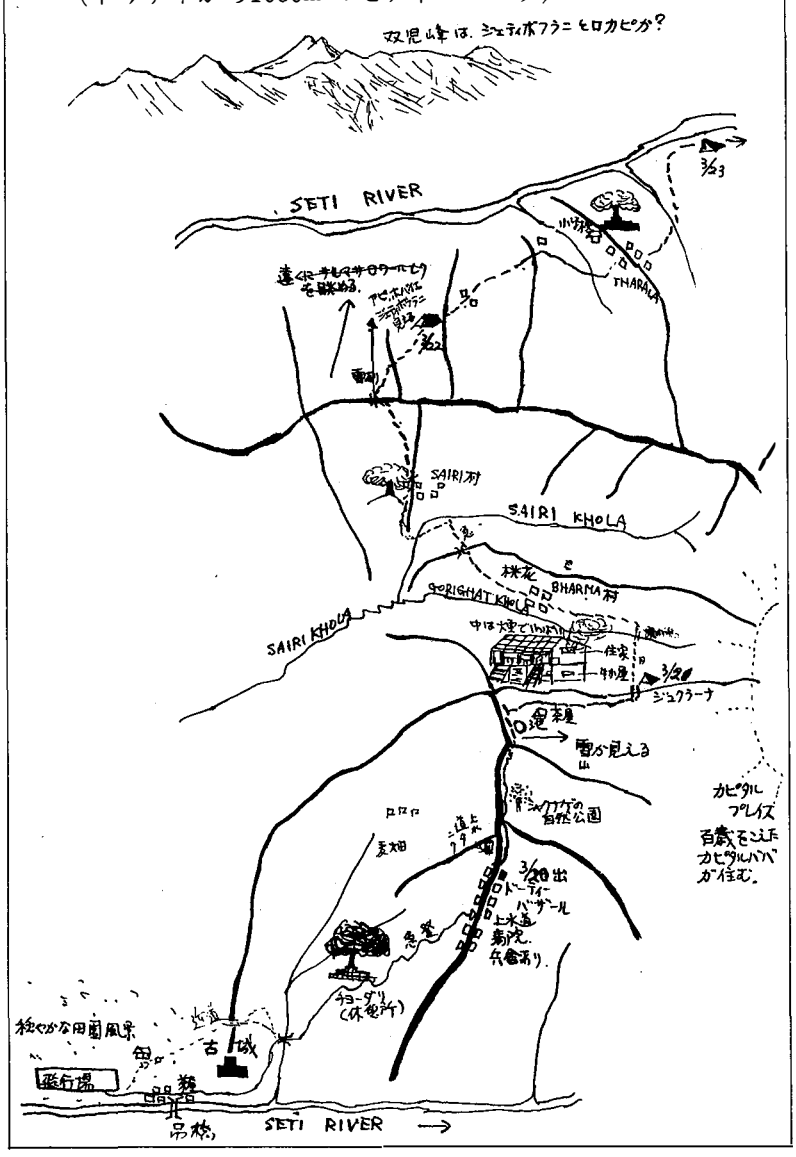
シルガリ・ドウティからチャインプールまで

吉田　秀樹

行動概要

三月二〇日　キャラバン開始、ジュクラナ泊。

ジェティ・バフラニキャラバンルート図
（ドウティから1060mのセティ・コーラ）



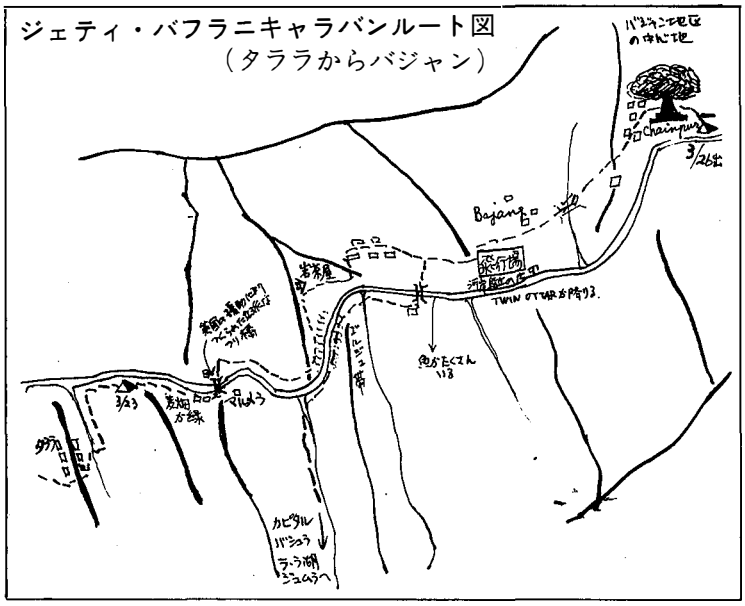
三月二一日　サエリへ。
三月二二日　吉田、クリシュナをタララへポーターのアレンジのため先発させる。本隊はタララの手前で泊まる。
三月二三日　タララへ。ポーターを変える。
三月二四日　山田はリエゾン・オフィサー、クリシュナとチャインプールへ先発し、ポーター・アレンジと食料購入についてチーフ・ディストリクト・オフィサーに依頼。
　井関、師田と三名のポーターはチャインプールに着くも、他はチャインプール手前の小屋に泊まる。
三月二五日　全員チャインプール着。
　キパ（キッチン・ボーイ）の誕生祝を行う。

三月二〇日　シルガリ・ドウティ→ジュクラナ（二一二〇メートル）
いよいよキャラバン出発の日だ。六時すぎよりポーターに荷を分け始めるが最後のポーターが出たのは八時半頃になってしまう。長らくお世話になったタマル氏に別れを告げる。ここからチャインプールまでは三つのルートがある。一つはセティ川沿いに大回りしていくもので、馬なども使える平坦なものだが日数もかかる。一つは最短距離を通るものだが高い所を通るため、現在は雪で通れない。結局我々がとったのはその中間を通っていくいくつかの小さな尾根を越えていく道だった。尾根づたいに上っていくとラリグラス（しゃくなげ）の花が咲いている。峠の茶屋でランチをとる。初めてのキャラバンに緊張しながらも楽しい。昼過ぎよりポーターの歩みは非常にのろくなる。ネパール中・東部のキャラバンを知っているバラサーブ（隊長）は特に頭にきていたようだ。泊場のコル到着には二〜三時間の差があるようで暗くなった後、最後のポーターが来た。

三月二一日　ジュクラナ→サエリ（一六七〇メートル）
朝は冷え込み激しく一面に霜が下りている。道はここから谷沿いに下り、途中より山の中腹をトラバースしていく。山側の斜面が低くなった所で尾根を越しサエリの部落へ下っていく。今日は村はずれの広場で泊まる。ポーターのほとんどはここの部落の者で四〇名のポーターはそれぞれの家で泊まったようだ。

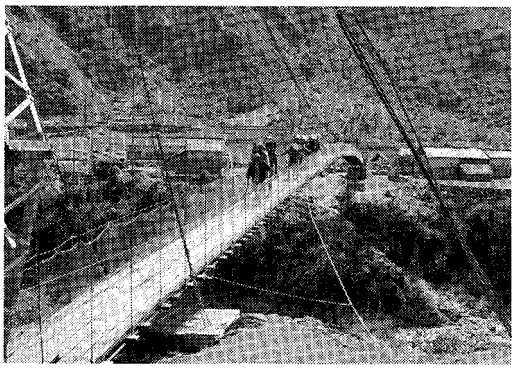
先発隊、三月二二日　サエリ→タララ

なるべく遠くまで行き、かつもう少しましなポーターであることを期待して吉田、クリシュナがタララへポーターアレンジに先発する。昨日までのドッ快晴とちがって今朝は少し雲が多い。一時間程の急登を終え左へトラバースしていくとセティ・コーラへの最後のコルへ出た。クリシュナの『ナマステ・ヒマール』の声に目をやると遠くに雪山が見える。よく見ると、それはアピ・ナンパ山群ではないか。ナンパ主峰は見えないもののアピ、ボバイにロカピそして我々の目指すジェティ・バフラニが見える。しばし感慨にふける。なごりを惜しんで一気に下りだす。ここは北側の斜面で雪が所々残っておりほとんどはだしのポーターが心配だ。クリシュナは「ノープロブレム」と言うが、ひたすら下っていくといつしか部落もちらほら現われてきて十二時少し前にタララにつく。ここも川の合流する間の尾根上の所に村がある。古くからの村は皆このような地形の所にあるようだ。



早速シルガリ・ドウティのタマル氏よりあずかったポーターアレンジの依頼の手紙を役人のダハン・バードル氏にわたす。ドウリまで行ってほしい事、一日二〇ルピー（四〇〇円）である事を何度も確認する。ひとまず返事まちでおちつく。ここにもネパール語ペラペラのピース・コープのアメリカ人がいた。二年間ネパールにいるとの事、こんな奥地までくる活動の強さに感心した。昼ナイケ（人夫頭）が決まり明日四〇人のポーターが決まるとの事で安心する。夜メイル・ランナーのカンチャマンが来て結果を明朝知らせに戻るとの事。

本隊はタララの手前二時間くらいのところで泊まる。



マルメラでセティ・コーラを渡る　立派な吊り橋がかかっていた

三月二三日　タララ→一〇六〇メートルのセティ・コーラほとり

一〇時半コック達と合流、一一時半頃皆と合流した。昨日依頼した四〇人のポーター、一日二〇ルピーでドウリまで行くという話であったが、ほとんどの者がチャインプールまでしかいかないとの事、それに人数も半分も集まっていない。話が違い、がくぜんとする。この事態の変化を理解したのかしないのか、リエゾン・オフィサーが勝手に今までのポーターを解雇し、事態はますます複雑になる。結局集まったポーター二二名と隊員が先発し、サーダー、カンチャマン、ナイケが残り、ポーターが集まり次第後続する事となる。

タララを出たのが四時すぎですぐ近くの川のほとりで天幕をはる。隊員それぞれ気分を害しているが満月の夜空の下でシェルパ、隊員共に夕食をとったのがせめてものなぐさめだった。チャインプールではどうしてもまともなポーターを必要数集めなければならない。バラサーブ、リエゾン・オフィサー、クリシュナの精鋭部隊がチャインプールへ先発することになった。

三月二四日　一〇六〇メートルのセティ・コーラほとり→パジャン手前

タララでのポーター確保が一日で出来ず、この日は山田バラサーブ、リエゾン・オフィサーのアディカリー氏、クリシュナの三名は、チャインプールでポーター支給用食糧の調達と、BCまでのポーターを集めに早立ちした。一方、サーダーとカンチャマンはタララで残りのポーターを集めて、後発の予定。本隊は三〇余名のポーターと共に、七時に出発した。セティ・コーラ沿いの牧草地から左岸に道を遡る。水は澄み激しく流れる。小麦畑が谷にへばりつくように続き、緑が美しい。師田と共に初めてお目にかかったアゲハチョウを追いかける。採れそうでとれない。崖に登ってもう一歩の所で下が崩れてすべり落ちた。師田は手に持った帽子を網のかわりに使って美しいチョウを追った。ヒラヒラとうまくかわされてしまう。こういう楽しみがある一方、ポーターは臨時雇いのせいか、二日間何も食べていない者もいた。五分おきに休み、チョウでも追いかけていないとやってられない。師田が耐えきれずに怒り出す。ポーターは一向気にするふうもない。マルメラで昼飯にする。セティ・コーラにはりっぱな吊橋が架っている。吊り橋を渡り終えたらもう休んでいる。呆れ果てる。頭にきて行くぞ！　とどなりちらして言い放して歩き出すしかない。投網で魚を漁っている人が遠くに見える。セティ・コーラの広い河原でポーターを待ちくたびれて眠ってしまった。風が出て雲が空をおおって来た。遠くにポーターが近づいてきた。ゴルジュを廻り込むと岸壁の下に茶屋がある。一日歩いてもめったに茶屋はないこの地方なのでう

チャインプールの踊り子の出現に皆大喜び

れしくなる。五〇パイサ（一〇円）の茶をのみポーターを待つ。段丘の上に登るとしっかりした家が並び、平地の向こうにバジャンの飛行場が見える。民家では一階が牛小屋で堆肥を作っている。二階に人が住むようになっている。板状の岩をうまく積み壁をつくる。僕はパサンとニワトリをなんとか手に入れようと交渉する。二羽を三五ルピーで手に入れ、建てなおしている家を見る。ポーターが追いつき、先行していった。一番後ろから行くと、ポーター全員集まっている。皆パサンに言う。パサンは顔色も変えずに「みんなこの先の小学校で泊まるといっている」と諦めたように言う。すでに井関さん、師田、キッチンポーターは、はるかに先行して予定通りチャインプールに到着する為に急いでいるだろう。夕闇が迫り、やむなく小学校に荷物を集める。残された吉田、パサンと僕は、今日食べる食糧もない。パサンはそんな中でロキシーを手に入れてきた。

近所の民家でジャガイモの煮たのを唐辛子塩で食べる。うまい。結局この夜は一皿のジャガイモというひもじさだった。荷物は外に積んでおいた。パサンは内で寝るようにすすめたのにシートをかけて荷物番をしている。夜半雷雨となる。パサンはそんな中でも笑って私はここで寝ると隊荷のシートの下にうずくまっていた。胃はひもじかったけど、心はじんと熱くなってきた。パサンについては気がつかないところで献身的にやってくれた。配給の少ない羊かんはパサンの口に入らない。すべて隊員と他のメンバーにやってしまうのだ。僕はみんな公平に分けろとパサンに言う。パサンは困ったような顔をして、オーケーと返事だけする。食糧の絶対量さえも少ないところで、不満もでなかったのはこうしたパサンの奉仕による所は大きい。

（三井　和夫）

三月二五日　バジャン手前↓チャインプール

バラサーブと合流、後続のサーダー達も昼すぎ合流する。二三日と今日の日当の額でいろいろもめたが結局妥協する事になった。

あとは荷物の整理と洗濯などをして過ごす。明日からのポーターの目途もつき、またポーター用の食糧も政府の米を特別分けてもらえる事で一段落する。ここはこの街道すじでは一番大きな町であったが普通には食糧は何も手に入れる事ができなかった。幸いここの警察署長のヤギンドラ・タパ氏のご好意により自家菜園の野菜を分けていただき、またBC（ベース・キャンプ）補給用の食糧も確保して下さりたいへんたすかった。

タパ氏、ロイヤル・ネパール・エアラインズのゴパール氏をテントに招き、夕食を共にする。コック

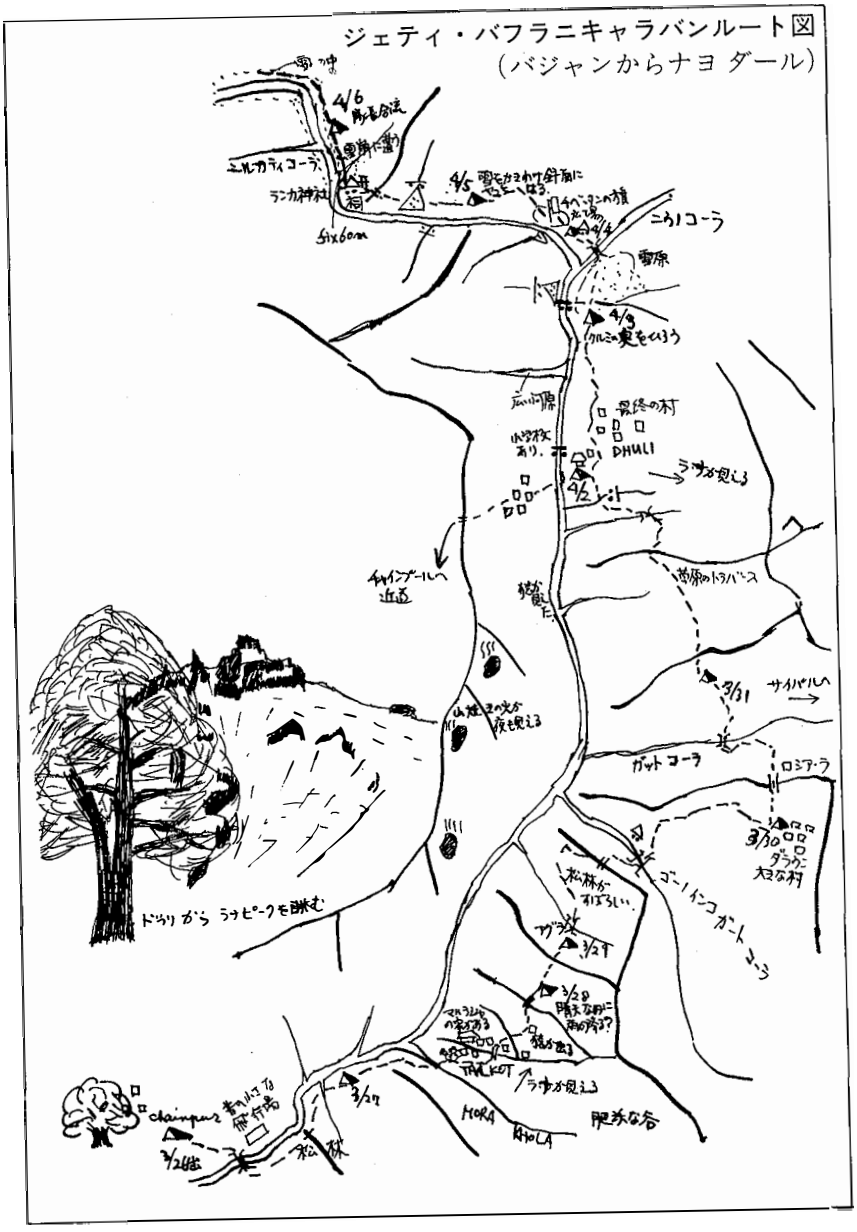
のパサン・ニマが腕をふるったククラタルカリ（チキンカレー）は格別美しかった。
夕食後、キパの誕生パーティを行う。手作りのケーキを食べ、茶を飲みながら遅くまで話に花が咲いた。

チャインプール・ホテル＆レストラン

山田　和彦

リエゾン・オフィサーと共にバジャン地区のチーフ・ディストリクト・オフィサーに会いに行った。彼は二～三日前にここに赴任したばかりだという。少し陰気くさい男だった。リエゾン・オフィサーは会う前にひげをそり、Yシャツに着がえて、直立不動で敬礼したところをみるとかなり偉いのだろう。小生は残念ながら汚れたトレシャツで髪はボーボーといった状態であった。米とポーター集めの件を依頼し、心よい返事をもらった。さて、昼めしを食べようということになって、ここの役人に聞くと、「ホテル＆レストラン」に行けという。腹がへっていたので期待して行くと、ここだといってついたところがおったまげた。名前からして少しはましな建物と思っていたが、ワラぶきのいまにもつぶれそうな掘っ立小屋で、まわりは南京袋やダンボールをうちつけてある。中では恰幅の良いおやじが店をとりしきり、二人のカンツア（小僧）が働いている。ここでは往きと帰りに泊まって飯を食った。めしとダルはおかわりありであったが、米の質はきわめて悪く、臭や味はひどかった。ダルも豆のあらびきのものが少量入ったすまし汁のようなもので、タルカリときたら小さなジャガイモのかけらが二～三コあるだけで、これはおかわりはなし。きわめて貧弱なものであった。夜になるとかなり多くの客（ほとんど単身赴任の役人）が飯を食いにくる。これだけ大きな街でありながらこの程度の食事ということはこの地方の食糧の乏しさを示唆しているのだろう。さて、飯の時間も終わって、地方からでてきた者やシェルパは奥のワラをひいてある寝室で横になる。我々がこんな所で寝たら、ダニ、シラミ、南京虫におそわれて、とても寝れたものではないので、食堂の土間に井関と師田が、長こしかけの上に山田が寝た。が、夜中にすごい雷雨となり、雨がザーザーもってきて、寝ている場所を移動する。そのうちに犬が二匹けんかを始めて、井関と師田の寝ている上をかけ廻り、なんともすさまじい夜だった。

ドウリへ


ジェティ・バフラニキャラバンルート図
(バジャンからナヨ ダール)
4/6
ランカ神社
5x60m
4/5
ニラ1コーラ
雪原
4/4
4/3
広い河原
景色の村
DHULI
4/2
チャインプールへ
近道
3/31
サイバルへ
ガットコーラ
ロシア・ラ
3/30
ゴーハンコ ガートコーラ
松林がすばらしい
3/29
3/28
TALKOT
KORA
KHOLA
肥沃な谷
3/27
3/26出
松林

井関 芳郎

キャラバン途中、ラリグラス（しゃくなげ）の群生する林の中で一休み　ポーター達も愛敬をふりまく

行動概要

三月二六日　チャインプール発。タルコット手前で泊まる。ポーター支給用食料（米六〇〇キロ）購入
二七日　タルコット先の草原泊　ポーターに米を支給する。
二八日　アグラ泊
二九日　ダラウン泊
三〇日　ラッシー泊　峠の下りは雪道であった。
三一日　ドゥリ着

三月二六日　チャインプール→タルコット手前の河原

ポーターの集まりが悪く、出発は遅くなる。井関、リエゾン・オフィサー、クリシュナの三名でバジャンの飛行場まで戻り、ポーターへの支給米（六〇〇キロ）を購入し、新たに雇ったポーター、二二名に担がせて本隊を追う。

チャインプールでゴパール氏に手紙を託した。また、リエゾン・オフィサーがカトマンズへ経過報告の電報をうった。

部落を出てしばらく行くとチェック・ポストがあり、チェックをうける。

大王松の美しい林の中の道を辿る。赤ん坊の頭ほどもある松ぼっくりが転っている。テント場に着いた時には周囲はもう暗くなっていた。ポーターが全員着いたのは六時をまわっていた。夜半、月が美しい。満月だ。

三月二七日　タルコット手前の河原→タルコット先の草原

出発前にポーターに米を支給する。ただでさえ出発前のテント場は慌しいのに、本日は米の支給と解雇する米担ぎのポーターへの支払で大忙しであった。結局、出発は九時をまわってしまった。ポーター出発の際、タバコを支給したところが、二、三分歩いたところで腰を下して休んでいる。その数ざっと四〇人くらいか。頭に来て「早よ、行かんかい」と怒鳴ってしまう。こんな事ならタバコなんかやるんではなかった。もう絶対にくれてやるものか！

川を渡り、尾根の上へ登ったところがタルコットであった。桃の花が美しく咲いている。北に雪をかぶった峰がみえる。ゆっくりと昼食をとる。

タルコットからはトラバース気味に登り下りの少ない道を辿る。山羊の放牧をしている尾根上の草原にテントを張る。一人のポーターが胃が痛んで荷を担げず。別のポーターが二人分の荷を背負って来た。

三月二八日　タルコット先の草原↓アグラ

昨日の胃が痛いと言っていたポーターは体調悪く、荷を担げそうにない。荷も減ったので解雇する。道は平坦で、登り下りも少なく、とても快適だ。おまけにシャクナゲの群落、そして、猿の群が姿をみせる。天気も良く、とても楽しいのんびりムードのキャラバンだ。キャラバン出発以来、最高の気分だ。

しかし、昼食後雨が降り出し、傘をさして歩く破目になってしまった。一時雨足は弱くなったが、また激しく降り出し、小さな部落（民家二軒しかない）の軒先で雨をしのぐ。

雨は相変らず止まず、益々激しくなってくるので午後二時、今日の行程を打ち切り、ここで泊まることにする。テントを張り終え、夕食の準備にかかる頃、やっと雨が上った。シャクナゲと大王松の林の向こうに雪をかぶった峰が顔をみせた。

師田体調悪く下痢。食事もほとんど喉を通らないようだ。皆、早々にシュラフにもぐりこんだ。

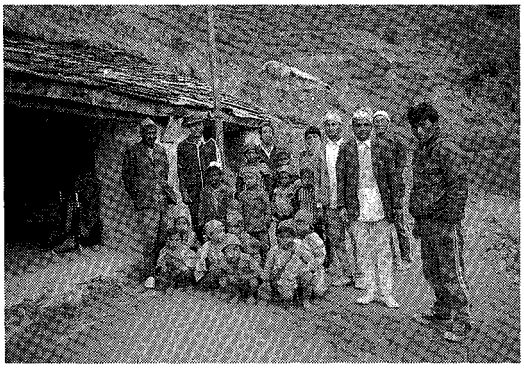
三月二九日　アグラ↓ダラウン

午前中、川を渡り、急坂を喘ぎ喘ぎ登る。やっと登りついた峠は見事なシャクナゲの群落があり、ポーター達は木に登りシャクナゲの花の蜜を吸っている。仲々旨いらしい。以前、農学部のキャンパスに咲いているレンゲツツジの蜜を吸った事を思い出した。

ポーターの足どりは相変わらず遅い。一時間以上遅れて出発しても二、三十分で追いついてしまう。これでBC迄行く事が出来るのかという思いと、なるようにしかならんさ、という思いが思考能力の極めて衰えた頭の中のどこかでぶつかりあっているが、結局は成るようにしか成らないのだというところに落着く。

午後、また雨降りとなる。ダラウンというかなり大きな部落に着いた。校長先生の厚意で学校に泊めてもらう。お礼に鉛筆をプレゼントした。ダラウンは人口約五〇〇人、学校の先生二名、生徒数七〇人との事。

パサンが部落中をかけまわって鶏を手に入れて来た。五羽で八四ルピー、安い。水も旨い。



ダラウンの学校に泊めてもらう
先生、生徒と共に記念撮影

三月三十日　ダラウン→ラッシー

本日も峠の登りで一日の行程が始まった。雪が舞って来た。峠からの下りは雪が残っていてポーター達は難儀であった。滑って転ぶ者、雪の中にずぼっと足を突っ込んで仲々抜けない者、かと思うと靴を脱いで手に持ち、裸足で雪の上を歩く者。靴を履いていると滑るそうだ。三井が靴を手に持って裸足で下って来た。やはり靴が滑るとの事。ポーター達もサーブ（隊員）が裸足で歩いているのを見て目を丸くしていた。やっと雪の切れたところで枯木を集め焚火をし、昼食をとる。熱いミルクティーが旨い。

ガット・コーラ迄下りさらにコーラに沿った道を下る。平坦な道で樹木におおわれ、上高地の梓川に沿った道を思い出す。橋を渡り、三〇分位歩いたラッシーの部落の学校に泊まる。部落でジャガイモを少量分けてもらった。小粒のイモだったが茹でて岩塩と唐辛子をまぶして食べるととても美味い。

三月三一日　ラッシー→ドウリ

七時に出発。今日はドウリ迄の予定だ。眺めが良く、カメラをのぞきながらのキャラバンであった。桜草の咲き乱れる草原を行く。

昼食の時、髭を剃っているとチャインプールで顔を合わせたドウリの男がおり、「髭を剃ってくれ」という。カミソリを貸してやった。しばらくしてカミソリを返しに来たが、顔をみると髭は剃られていたが、顔も剃ってしまい、数ヶ所切傷を作っていた。何とこの男が、ドウリからＢＣ迄のナイケとなったカティ・バードルという男だった。

午後、また雨が降り始めた。このところ、午後になると必ず雨が降る。傘をさして歩く。

途中キジを打った。何とパンツの中にかわいい居候がいた。虱が二匹。このような居候には即刻退去命令を下した。爪先であえなく昇天と相成った。

三時過ぎ、ドウリに到着。今日も学校に泊めてもらう。チャインプールのポーターはほとんどドウリから下るので支払を済ませる。

道中みつけたナズナのおひたしをコックに作らせる。好評であっという間に無くなった。

夜、空がきれいだ。星が降ってくるようだ。今日で三月も終り。日本を発って早くも一ヶ月が過ぎてしまった。

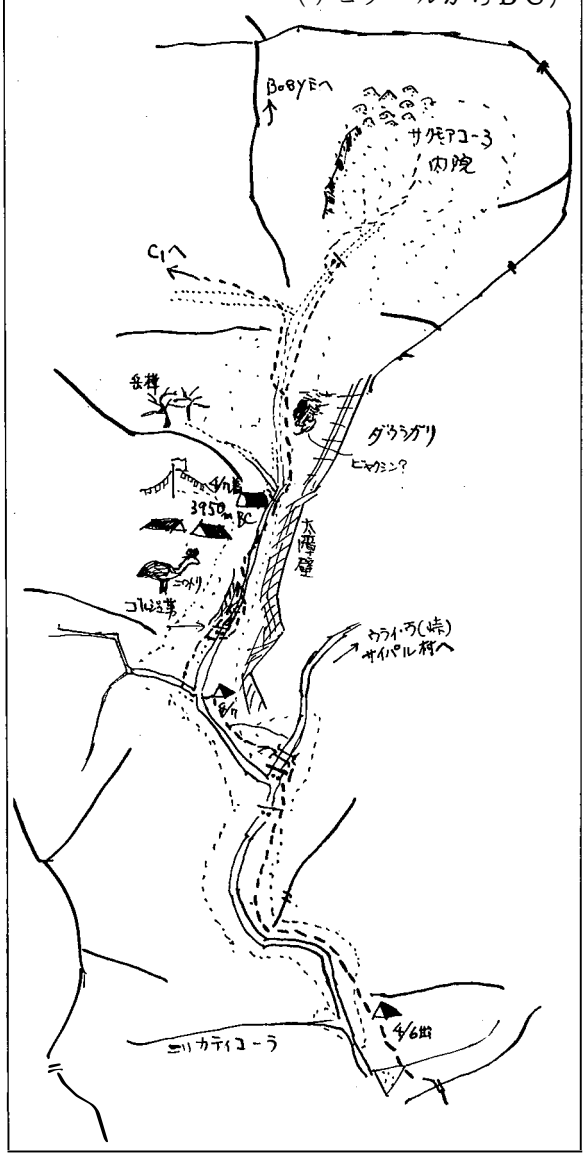
ベースキャンプへ

井関　芳郎

行動概要

四月一日　ドウリ滞在
二日　ドウリ発。
三日　山田、クリシュナ休養し、他は先行する。
五日　山田、クリシュナ本隊と合流する。
六日　サリモア・コーラに入る。
七日　ＢＣ予定地（三九五〇メートル）に到着。

ジェティ・バフラニキャラバンルート図
（ナヨダールからＢＣ）



最奥の村ドウリの小学校で　本日は休養日

四月一日　ドウリ滞在

朝、雲一つない快晴。セティ・コーラ上流の峰々にかぶった新雪が朝日に輝く。山田隊長、吉田身体の具合悪く、シュラフに入ったまま起きてこない。風邪のようだ。

午前中、ドウリのポーター達がやって来て、昨日分までの支払を済ませる。

あらたにドウリからBCまでのポーターをアレンジしたが金額的に折り合わず話はつかなかった。久しぶりに洗たくをしたり、虱をとったりして過ごす。トレーニングシャツの縫い目に生みつけられた虱の卵を発見。毛抜きで取り除く。

四月二日　ドウリ→ニウノ・コーラ出合手前の樹林帯

ポーターの賃金一日二九ルピー、と米五キロ(米一キロ七ルピーとする)を支給することで話はまとまる。しかしポーターの集まりは悪く、米の配給に手間どり、ポーター達が全員出発したのは一一時をまわってしまった。

郵便局のオフィサーの家に帰路の食糧をデポする。

山田隊長、本日も体調悪く、羽毛服を着て杖にすがって歩く姿が痛々しい。吉田は昨日一日休養したためか、回復したようだ。やはり、若い者は元気だ。

ルートはドウリからセティ・コーラの左岸を高く、広い河原をはるか下に見て山腹をまくように進む。川巾もせまくなったところで河原に沿った道を、セティ・コーラのせせらぎを聞きながらいく。左岸からの谷の出合にはデブリがたまっている。樹林帯にはクルミの木があり、クルミの実を拾う。しかし大部分リスにかじられた痕跡があり、仲々中味の入った実が拾えない。

本日のテントサイトは川原の林の中で、小さな流れがあり、キャラバン開始後、最高のところだ。テントを張る頃に雨が降って来た。

四月三日　ニウノ・コーラ手前の樹林帯→ニウノ・コーラ出合

ポーターの出発、本日も手間どる。食事をせずに出る者、ノンビリと食ってから出る者、最終が出発したのは一〇時だった。サーダーは最終のポーターにつき合う。

山田隊長は本日も体調悪く、テントにクリシュナと残る。食糧を三日分置いていく。三日くらい後には追いつく事であろう。テントサイトを出てしばらく行くと雪が出て来る。ポーター達は重荷のため、雪を踏みぬき、足が沈み難儀している。ドウリのポーター達は雪のないところでは裸足かズック靴を履

いて歩いているが、雪の上ではウールの厚い靴下を履き、皮製のワラジのようなスノーシューズを履いて歩いている。

ニウノ・コーラ出合付近は雪がふかくなり時々膝の上までもぐる。ニウノ・コーラを少し上流に辿り橋を渡ったところで昼食となる。火を焚き始めた頃から、ポツリポツリと雨が降り始めた。昼食後、吉田と二人で先行する。樹林帯をぬけ、雪の上にくっきりと残っている熊の足跡にヒヤヒヤしながら川原の雪の上をテントサイトを捜しながら行く。右岸からの大きなデブリを越え、広い川岸段丘の上に良好なテントサイトを見つけ、岩の下で強く降りしきる雨を避けていると、カンチャマン・ラマとキバがやって来た。ポーター達は出合付近の岩小屋にテントサイトを決めてこれ以上進まないと言う。仕方なく雨の中、今来た道を昼食を食べた付近まで戻る。サーダーが最後のポーターと共にテントに着いたのは三時過ぎだったとの事。それまで何も食えなかったようだ。雨は夕刻雪に変わった。

四月四日　ニウノ・コーラ出合→祠手前の斜面

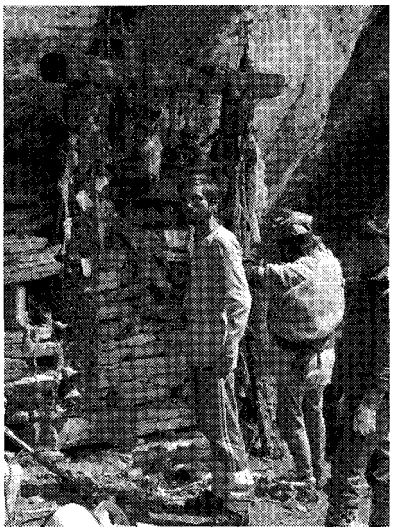
朝、雪は止んだ。昨夜は湿った雪が、かなり降ったため、雪の重みでテントが半分つぶれ、外へ出て雪を払った。

本日は、吉田、師田にトランシーバーを持たせて先行させ、ルートの偵察をしながら最後部と連絡をとりながら進むことにした。井関、三井は最後部にまわり、サーダーと共にポーターを追い上げる。

出発して三〇分ほどでポーター達、「カナ、カナ」と騒いでおり、火を焚き、湯を沸かしている。その数およそ三〇人。「メシはまだだ。歩け、歩け。」と火を消し、大声で怒鳴りながら追い上げる。ポーター達大いに不満そうにブツブツ言いながらも荷物をかついで出発する。

昨日来た段丘上で昼食にする。周辺にクルミの木があり、実がたくさん落ちている。石で叩いて割って食べるクルミの味に遠い信州を想い出す。午前中は天候良く、青空が拡がり、春の陽がさんさんと降り注ぐ。対岸の岸壁を雪崩が落ちる。ヒマラヤへ来た実感がひしひしと身にせまる。

道は川筋を離れ、山腹をまくようにいく。雪が深く、頭上をおおう木の枝に邪魔され、枝を払いながら道を作って進む。途中小さな雪の氷化したガリーのトラバースでポーターがスリップした。幸いポーターは三メートルほど下の岩のところで止まっているが、荷物は二〇メートルくらい下の小さな滝の下まで落ちている。ポーターの荷物はさらに下迄落ちてしまったようだ。ちょうど落ちた荷物にフィックス・ロープが入っており、三井が荷物のところまで下ってロープを出し、小生とサーダーでフィックス・ロ



ランカの神に道中の安全を祈る
リエゾン・オフィサー

ープを張り、立ち往生しているポーターに渡し、落ちたポーターにロープをつけて引っ張り上げた。ポーターに外傷はないが、落ちた時に荷物で首を引っ張られ、首が痛いという。サーダーの「ポーターが一人落ちた」という報告を聞いた時には、一瞬五万ルピー（一〇〇万円）という数字が頭の中に浮かんだ。しかし大事には至らずホッとした。先行パーティを出してルートを偵察していながらのポーターの滑落。判断が少々甘かったようだ。

テントサイトは良いところがなく、降り出した雪の中、樹林帯の雪の斜面をけづってどうにかテントを一張、張った。周辺はもう真暗だ。

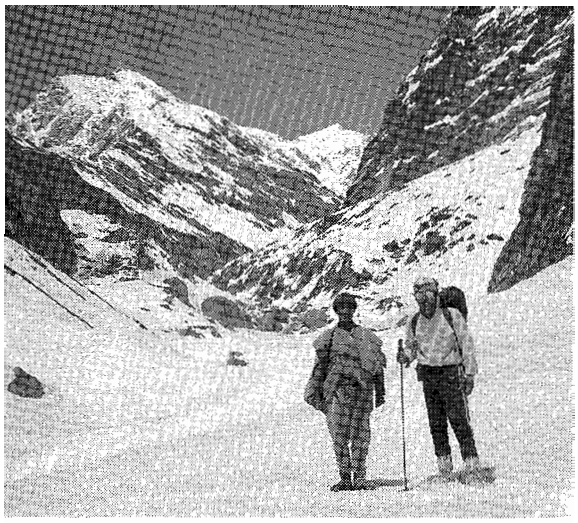
四月五日　祠手前の斜面→ナヨダール

本日もポーター達、ノンビリと朝食をとっていて動かず、ナイケのカティ・バードルもあちこちとびまわって出発を促している。数か所に分散して泊まっているので大変だ。小生もポーター達と睨み合い。こちらはお茶しか飲んでいないのにノンビリとチャパティを焼いて食べている。半分ど突くようにして追い出す。今日もまたポーターとの闘争の一日が始まる。

本日のルートは山腹の高巻きの後、一たん下って川原に出、谷を横断しすぐまた大高巻きとなる。大高巻の途中に祠がある。シェルパ達の話によると、この街道はインドとチベットを結ぶ交易ルートのひとつでランカ（神）の開いた街道で、その神をまつっているそうだ。カンチャマンとキパは手紙や写真を祠に張り付けている。見ると祠には古い紙幣やコインがいっぱい張り付けたり、くぎづけになっている。旅の安全祈願のお呪いだそうだ。

この大高巻の途中には所々雪がはりついていやらしいところがあり、フィックス工作をして通過した。最後の沢をわたるところに真新しいデブリがある。つい今しがた雪崩が落ち、先頭を歩いていたリエゾン・オフィサーとポーター三人が流されるところだったそうだ。リエゾン・オフィサーは先に逃げ、ポーターは中間の大岩の上に逃げて難をのがれた。

テントサイトは段丘上の樹林帯に設けた。雪の上にモミの枝を敷き、テントを張り終える頃、クリシュナが姿を見せた。三〇分くらい遅れて山田隊長がやって来た。重そうな足どりで到着。三日ぶりに全員揃った。



ドウリからＢＣまでのナイケ
カティ・バードルと山田隊長

四月六日　ナヨダール→ウライ峠分岐先の河原

先発隊

とりあえず、サリモア・コーラを目指し吉田、師田の二名先行する。雪崩の危険もなく、出合までは河原づたいに行け、意外に早く到着する。本隊は、ここまでだろうと思い、必要装備だけを持ち、他の荷物をデポするが、後で、さらに出合をつめた本隊に負担をかけてしまった。ゴルジュ帯を抜け、三八〇〇メートル地点のＢＣの見通しのたった所で引き返す。本隊は意外に近くまで来ており、ポーター達の頑張りにおどろいた。

（吉田　秀樹）

本隊

出発前、ポーター達、「食糧がないから支給せよ。それまで出発しない」と動く気配なし。ストライキである。昨日合流した山田隊長大いに怒り、「お前達はたらふく飯を食っているのに一体全体どのくらい歩いているのだ。お前達が三日もかけて来たところを、わしは三日間飲まず食わずの身体なのに、たった一日でやって来たのだ。お前達にはもうこれ以上食糧は支給できない。出発しろ」と一喝。怒髪天をつくとは正しくこのことか。ポーター達隊長の剣幕に一瞬たじろぐ。サーダーや、クリシュナもうまく通訳して聞かせ、結局ダハチャルより奥へ入った時点で食糧支給について考慮しようという事で話はまとまり、ポーター達出発準備をはじめる。この間、リエゾン・オフイサーが間に入ればまとまる話もこわれてしまうので井関が制止して一言も話させないようにした。吉田、師田は先発し、山田隊長と井関が残り、テントサイトのゴミを片付けて出発したのは一一時をまわっていた。しかし、チャインプールからのポーター三名が雪も深くなり、食糧もなくなったので戻りたいという。良く働いたポーターだったが、荷物も少なくなったので解雇した。

セティ・コーラはほぼ雪に埋まり、雪原を行く。川巾は一〇〇メートル以上はあろうか。傾斜も少なく雪も締まっておりほとんどもぐらない。雪崩のあともほとんどない。ダハチャルの少し手前でセティ・コーラが流れをのぞかせている。大きな岩の上で大休止の後、左岸をいく。

ダハチャルは広い川原となっている。ウライ峠からのセティ・コーラの本流が岩の間から滝になって落ちている。その手前のスノーブリッジを渡りサリモア・コーラに入る。再び雪原を行き、一時間三〇分ほど行ったところを本日のテントサイトとする。対岸には岳樺が茂る。カンチャマン、キパの二人が標識用の竹ポールをかついで到着した。ポーター到着後、食糧としてヌードルを支給した。

四月七日　ウライ峠分岐先の河原→ＢＣ

本日も例によって、ポーター達が仲々出発しない。昨日支給したヌードルを食べたら吐いてしまったとひともめする。仕方なく米を二〇キロ改めて支給する。また雪盲が続出。サングラスの予備はなく、苦肉の策で透明なビニール袋に黒のマジックインキを塗ったものを支給する。仲々具合が良さそうだ。結局ポーターが動き始めたのは一一時であった。雪の状態は良く、もぐっても足首までである。ガイシャール・コーラ出合を渡り、サリモア・コーラに入る。樺の林をぬけ、ゴルジュ帯に入るが雪ですっかり埋まっており、予想に反して難なく通過する。雪に埋まった谷を右へ、左へと奥に向かって進む。六四〇〇メートル峰から東北へ延びる尾根の末端と思われる所に着く。この先の谷がジェティ・バフラニとロカピの間の谷であろう。左岸に登り、偵察する。吉田、師田は右岸のコブに登っている。ピラミッド状のピークが目指すジェティ・バフラニだ。東に延びる尾根は鋭いナイフ・リッジになっている。ナイフ・リッジの末端にジャンクション・ピークがあり、そこまでは何とか行けそうだが、問題はナイフ・リッジと頂上直下の二〇〇メートルくらいの壁だ。少ないメンバーと乏しい装備で行けるだろうか？サリモア・コーラの奥にはボバイがそびえ立つ。堂々としたたたずまいは仲々立派だ。南にはヨーロッパ・アルプスを思わせる針峰群がそびえている。結局、この地点のサリモア・コーラより二〇メートルくらい高い、雪におおわれた段丘上をＢＣと決定する。付近に木も生えており、水はサリモア・コーラから取れる。

ポーターの行動も本日は比較的早く、続々と到着する。支払いでまた一もめする。第一、二日は半日しか行動していないから半額だと言ったら腹を立て、話は仲々進まない。あげくの果てにカゴを背負って帰るそぶりを見せる。「事故もなく雪盲になりながらも、とにかく無事荷物を運んだのだから六日分欲しい」と言う。長い日で四～五時間、普通二～三時間程度の実働であったが、とにかくＢＣが作れた事でもあり、我々が折れて六日分を支払う。もうドウリのポーターはこりごりだが、帰りにも使う事になるかも知れない。

とにかく、待望のＢＣはでき上った。テント二張の小さなＢＣだが、シルガリ・ドウティを出発して一九日目、予定より遅れること約二週間、ＢＣまでの道は遠かった。

旅に病んで……

山田　和彦

キャラバンでの最終部落ドウリへ着く前日から、体が寒く腰が痛くて、何か変だと思っていたが、ドウリで発熱し下痢気味となった。吉田もドウリに着いた頃から具合が悪くなったが、翌日（沈澱の日）一日中寝ていて回復し、一方私の方は悪くなるばかりで、年齢の差を感じてしまう。ドウリからの初日は羽毛服を着て、杖にすがりながらなんとか歩けた。この日ばかりは、ポーターの「ビスタリ、ビスタリ」（ゆっくり、ゆっくり）のペースがありがたかった。しかし、この日のテント地でついにダウン。翌日は立ちあがることもできず、クリシュナに残ってもらい、皆に先発してもらう。食欲まったくなく、全身の特に腰の痛みがひどく一分おきに寝返りをする。頭はガンガンし目もあけられない。アスピリンをのんで汗はかくがすっきりしないばかりか、寝袋の中がグショグショになって気持が悪い。何も考えることもできなかった。肉体的苦痛は耐えることはできても、精神的苦痛は耐えられない……なんて格好のよいことを言うが、少なくとも私にとってはうそだ。もしこの苦しさをとりのぞいてくれるなら、悪魔に魂を売っても良いと思うくらいだった。次の日は病気も峠を越えたのか少し良くなって、果物の罐詰を半分食べた。苦しかったが、いろいろ考えることができた。まず尿が昨日から全然でていないのが気になる。汗をかいたので脱水のためか、いやもしかして急性腎不全をおこしたのでは……そういえば少しむくんでいるみたい。もし腎不全から尿毒症になれば……透析するには日本まで帰らなくてはできない……日本に帰るにはここからチャインプールまで五日、いやポーターは遅いから七日はかかろう。あとはヘリコプターでカトマンドゥまで一日、カトマンドゥから日本まで二日、あわせて一〇日、そんなにもつ訳はない。……となればここで終りか！（ちなみに、小生は丸子中央病院で腎臓病を担当している）

しかし昼頃テントからはい出して待望のオシッコをすることができ、ホッとする。次は皆は今頃どの辺を歩いているか、どんな調子か気になる。こんなところで病気に罹るとどうしても弱気になってしまう。子供達のことを思い出しても、なんとなくしんみりしてしまう。山崎ハコの歌「あの海に」――あ

の海に舟を出せという声が聞こえてくるが、片手や片足のない私一人ぼっちで何ができるのか……――を思いうかべて、思わず涙ぐんでしまう。クリシュナにみられてははずかしいので、あわててシュラフにもぐり込んだ。翌日、熱も下がり気持もシャンとして、またファイトがわいてきた。クリシュナと共にとばしにとばす。体はまだふらついて、小石につまずいたりしたが、がんばって、その日に皆に合流することができた。

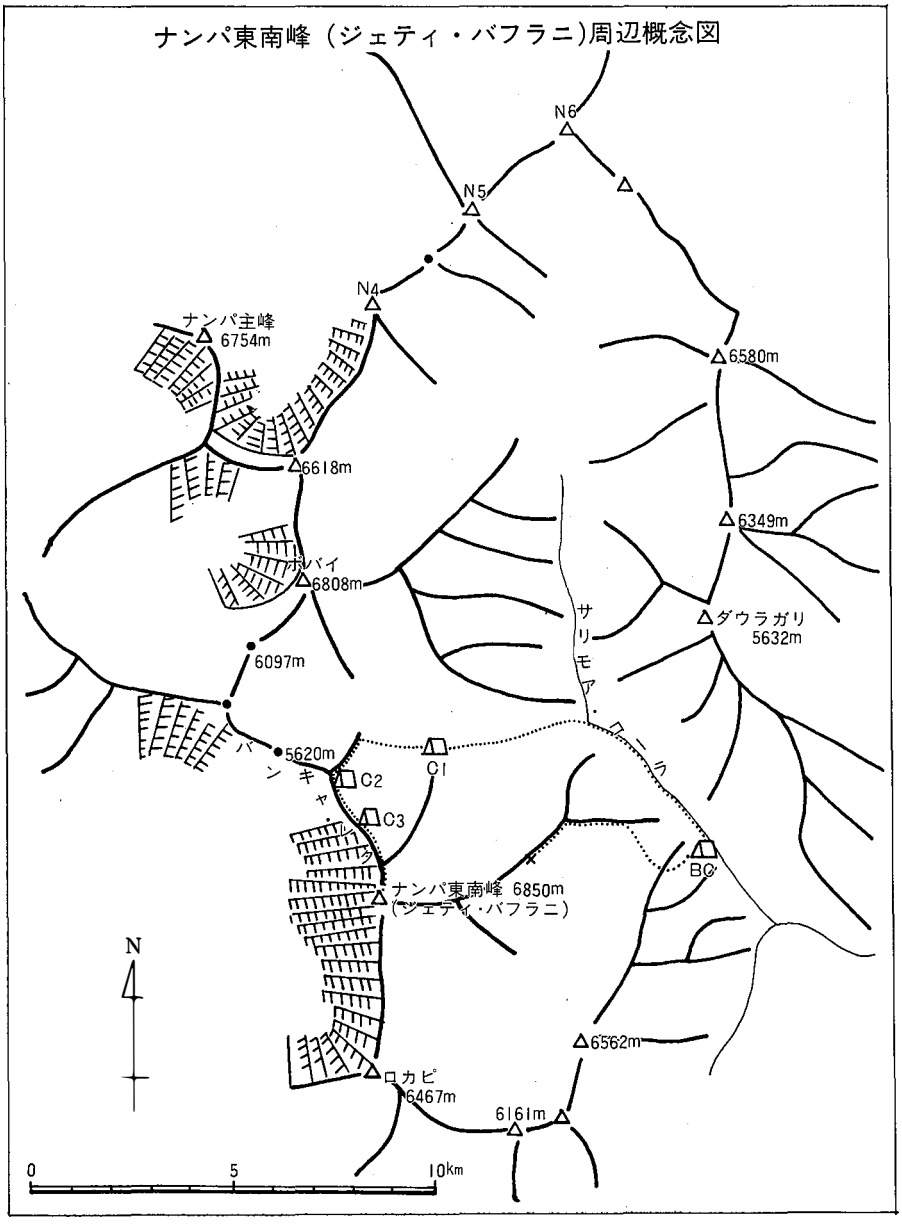
ジェティ・バフラニの頂を目指して

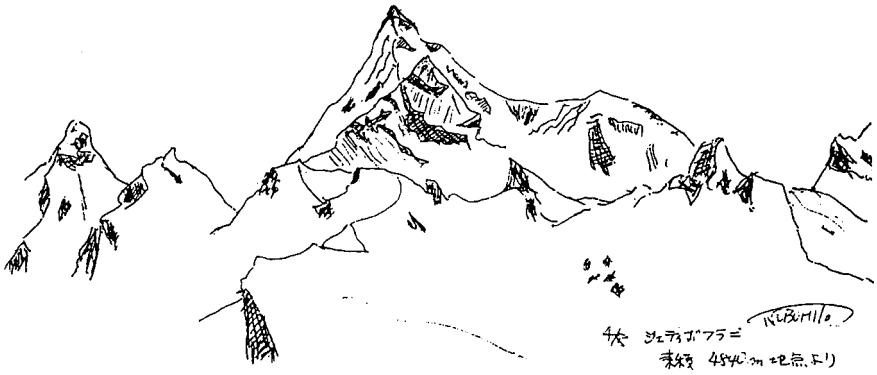
行動概要

四月八日　ジェティ・バフラニの東稜を、吉田、師田で偵察。他隊荷整理

九日　ジェティ・バフラニ内院へ山田、三井偵察に行き、アタックルートを北尾根と決定する。

一二日　全員C1入り（C1建設）。





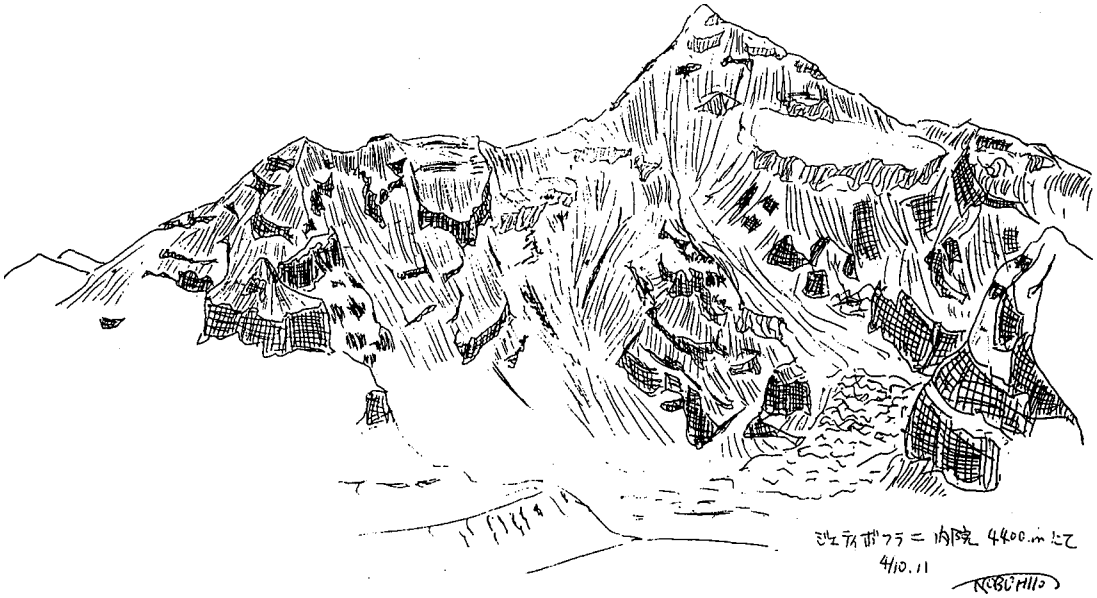
四月一四日　吉田、師田C2入り（C2建設）。
一六日　全員、C1集結。
二〇日　山田、吉田、師田C3入り（C3建設）。
二一日　全員、BCへ戻る。
二三日　三井、吉田、師田C1入り。
二五日　同三人、C2入り。他C1入り。
二六日　同三人、C3入り。
二七日　アタック。
二八日　全員C1集結。
二九日　全員BC集結。

BCからC1

吉田　秀樹

四月八日
BCでの朝はボバイの朝焼けで始まる。終日ドッ晴れ。いよいよ僕らだけの登山が始まる。サーダーが登山の安全を祈ってお経をあげてくれる。お祈りが終わるのをまって、吉田、師田はジェティ・バフラニの東稜の偵察に行く。四九〇〇メートルから先は起伏の多いナイフ・リッジとなっている。頂上へ抜ける所も難しそうだ。

四月九日
山田さん、三井さんがサリモア・コーラ沿いに辿りジェティ・バフラニ内院四三二〇メートル付近まで入り偵察する。結局、確実性の高い、北方稜線へ出て北からアタックする事に決定。



四月一〇日

今日から荷上げだ。若い三人は二五キロの荷を背負う。朝方のしまった雪面に距離をかせぐ。三ピッチ目からは傾斜も増し、空気の薄さを実感するようになる。最後の急登をバテバテになりながら越えると四五一〇メートルのモレーンの上のC1予定地に着く。正面には美しい形をしたジェティ・バフラニが、右手にはボバイが見える。眺めのよい場所だ。ここには僕たち五人だけしかいない。

四月一一日

今日も終日晴れだが、昨日までのようなキラキラしたまぶしさはない。昨日より早いペースで（四時間）荷上げを終わる。下りは、日差しでゆるんだ雪に足をとられ消耗する。まるで五月の北アのようだ。

四月一二日

全員C1入りの日だ。荷上げするものはもう少ないので三時間でC1につく。夕方はじめて自炊する。隊長の言った「ジェティ・バフラニ合宿」という言葉に皆うなづく。くれゆくジェティ・バフラニを見ていると何かホッとしたものが感じられ、力もわいてくるようだ。

ＣＩへの荷上げ　ジェティ・バフラニ内院の入口からピークを望む　右に長く北尾根が連なる

Ｃ１からＣ２

井関　芳郎

四月十三日

Ｃ１を出発し、ゆるやかな起伏をなすモレーン帯をぬうように、硬く締った雪を踏みしめ、三〇分ほどいくと、ジェティ・バフラニ東北面の氷河の末端部にたどり着く。雪におおわれてはいるものの、所々に青く、不気味な姿を見せている。我々はこの氷河に背をむけ、サイド・モレーンの標高差五〇メートルほどの急斜面にとりつく。

我々の目指すルートは、ジェティ・バフラニからボバイへ続く稜線から北東へ派生している尾根を辿る予定である。

日が高くなると締っていた雪もゆるみはじめ足首までもぐるようになる。三井、吉田、師田の三人は交替でラッセルしながら登る。岩も氷もなく、真白な雪と、吸い込まれるまでに青い空、聞こえるものは、登高の雪を蹴る音と喘ぐ息そして耳をよぎる風の音のみ。

五二〇〇メートル付近でやや平らな台地に出る。大休止の後、スカイラインをなす稜線へ出る最後の壁を登る。日もかなり高くなり、雪もやわらかくなり膝までもぐる。傾斜は最もきつい。一足毎に大きな息をし、二〇歩くらい登って立ち止まって一〇～二〇回ほど肩で息をし呼吸を整えた後、また登りだす。

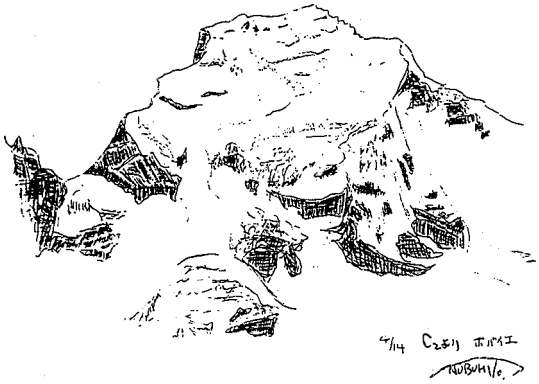
やっと辿りついた稜線はナイフリッジとなっている。主稜線とのジャンクションは、まだ上だ。アイゼンをきかしてナイフリッジの右側（西側）を辿る。ナイフリッジが切れ、やや広くなった尾根上の台地をＣ２と決める。標高、約五五〇〇メートル。アピ、ナンパ主峰、そしてチャムリア・コーラが望める。

途中師田のアイゼンのリングが破損したが事なきを得る。

荷物をデポし、雪の大斜面をシリセードで下る。標高差一〇〇〇メートルにも及ぶ豪快なシリセード。まさかヒマラヤに来てこんなシリセードをするとは思ってもみなかった。

五時間三〇分かかった登りも、下りはたったの一時間三〇分でＣ１に戻る。

ルートは総じて安定した雪の斜面であり、氷もなく、フィックス・ロープも必要なく、楽で安全なルートである。また我々の行動中においては雪崩の心配はなかった。



C2からC3

師田　信人

四月一四日

全員でC2に向う、吉田、師田はきょうC2に泊まるので個人装備をあげる。快晴。でもきのうのステップが残っているので楽だ。十一時過ぎ、C2に着く。井関さんが来るまでの間、四人でテントを張る。二人はテントに残るが、何もやることがなくて死にそうだ(退屈で)。高度の影響もでてきたのだろう、三井さんが写真を撮るのに息をこらえるのがつらいと言っていたのがよくわかる。

四月一五日

フィックス工作の装備を持って六時過ぎ、C2を出る。けれども天気が完全に崩れてきたので七時過ぎ、五六五〇メートルに達したところで行動打ち切り、C2へ戻る。一〇時のC1との交信で今日は休養、あした五時にC2でルート工作しながら行けるところまで行け、という指示を受ける。これはどう解釈すべきかしばし二人で頭を悩ませ、アタックしてもオーケーという結論になった。冗談がきつい、実際問題としては、肩のコルにC3予定地をみつけそこまでのルート工作をしっかりやり、さらに六五〇〇くらいまでアタックのルート工作ができれば上出来ってものだろう。

四月一六日

やっぱり甘くなかったのだ。六〇〇〇メートル付近でフィックス・ロープを使い果し、肩に出ることもできず引き返す。ルートはロカピ・コーラ側を巻くようにとったが……フィックスから下っていくと山田さんと三井さんが登ってきていた。C2で話し合ってもう一度態勢を整えるため今日は全員C1へ

Ｃ２にて　荷上げを終えて、背後は左から　アピ、ナンバ、ボバイ

下ることにする。Ｃ１では沈澱してた井関さんがいろんなメニューで夕食をつくってくれて満腹。

四月一七日

再びＣ２へ。天気は崩れ始め、さらにもう一張り張って五人全員Ｃ２入り、ホワイト・アウト・ブリザートがすさまじく午後は何もできない。

四月一八日

明け方、俺達の方のテントポールが折れ、惨々な目にあう。三井さん、吉田さんが苦労してアイスハーケンで応急修理する。今日は沈澱、風はまだまだ強くまったくいじける。Ｃ２へのボッカの時、思い出し笑いをしたら死にそうに苦しくなった。呼吸を整えるのにたいへん苦労した。笑うということは非常に酸素を消費するのだなァって実感する。

四月一九日

天気はよくなかったけれども三井、吉田、師田　フィックス工作にいく。一六日のところまでフィックスを掘り起こしながら登り、手強そうな小壁に六一〇〇メートルまでルートをのばし、肩へのメドをつける。

四月二〇日

三井さんが風邪と熱でダウン。山田隊長、吉田、師田の三人で六一五〇メートル地点にＣ３建設。天気が崩れてきたので山田さんもそのままＣ３に泊まる。Ｃ２に下る予定で個装を持ってきていない山田さんに二人で羽毛服を分けあって、間にはさまって寝てもらった。

C3で思ったこと

山田　和彦

C3のテントを張った頃は猛烈な風雪で、C2へ帰ることができず、吉田、師田と共に泊まることにした。彼らの羽毛服を借り、二人の間にはさまって横になる。寒いが0時頃までは寝ることができた。学生のころもそうだったが、ビバークしても初めに寝ることができるが夜半からまったく寝ることができない。風が吹くとテントがゆれ、霜のはったテントが顔に触れて冷めたい。体の芯から寒くなってきた。寝むれぬまま、いろいろなことを考える。こんなとき楽しい思い出が多くあればどんなにか良いのに。ときどき時計を見るがなかなか進まない。現役時代の山行を初めから思い出す。なつかしい山や友の顔が想い出される。中でも奥又白の思い出はなんといっても多いしなつかしい。そう、あれは昭和三四年一二月三一日、奥又白のテントを出た小林（喜）さん、小原さん、伊藤と本谷をラッセルし、B沢上部では胸につかえる雪を股の間に手でかきおろしながら、北壁基部に着いた。空はどんより曇って、東の空の朝焼けの色がすさまじく、その下に塩尻の灯（私の家は塩尻にあった）がみえた。このときの空の色は、心にのしかかるようないやな色であったが、今でもはっきり思いうかべることができる。スノーシャワーの中で一〇時間、北壁をぬけて第二テラスに小さな雪洞をほってビバーク、あのときも全身濡れて寒く、夜の長かったこと。

時計を見ると四時だ。もう我慢できない。二人を起こして朝食の準備にかかる。ガスコンロの小さな音が心をなごませる。

四月二一日

行きががり上三人でアタックに向かう。東側へすごい雪庇が張り出している。でも雪庇の上の方が雪がしまっていて歩きやすいので、そこを歩いていたら、もろに、踏み抜いて体半分が沈んだ。六二五〇メートル地点まで来て唖然とする。西側はロカピ・コーラまで二〇〇〇メートル以上すぱっと切れ落ちている。傾斜は緩いけれども壁をトラバースするような感じでないと進めない。一ピバークくらいすれば行けると思ったが山田さんに、きちんとフィックスしていかないと下降中に事故を起こすと言われ、今日はここまでで断念。一度ＢＣまで思い切って戻り、最初から出直すことにする。個人装備を持って下っていくとＣ2でＣ1へ下った井関さんを送ってきた三井さんと一緒になる。この日全員ＢＣへ戻る。

四月二二日

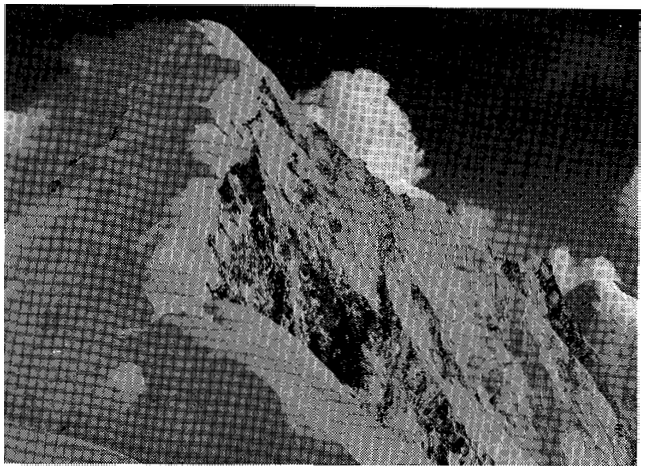
休養。ＢＣでの睡眠はこんなにも違うもんかと思う。これまで断片的にしか見れなかった夢が、久々に一続きのまとまった夢として見れて感激する。食って寝ての休養日。ここまできたら絶対ジェティ・バフラニのピーク目指すという気になってくる。

ジェティ・バフラニの頂へ

三井　和夫

四月二三日

ＢＣから三井、吉田、師田でＣ1入り、山田さんは途中までサポート、ＢＣで食いすぎていたため、とにかくしんどかった。ほんの数日の間に下の方はすっかり春めいてきている。岩肌が露われ、チョウが舞う。小川のせせらぎ、雪溶け水の冷たさにノドをうるおす。こんな春の世界から俺達はまた冬の世界へ戻るんだ。何かやるせなくなってくる。日本は今、春うらら、桜がいいだろうな。午後から雪、サーダーの言ってた満月から後は天気はよくなるって言葉に期待しよう。今度ＢＣへ戻る時は必ず登頂した時だ。



肩より望むジェティ・バフラニ

四月二四日
雪で沈澱。

四月二五日
猛吹雪の中、やっとの思いでC2入り、いつも夜だけまともな天気、これからは夜間行動を考えなければならないかなと思う。ジェティ・バフラニはまだまだ遠い。幾度求愛してもいつもすげなく拒絶する花嫁さんさ。

四月二六日
五時一五分、月明りの中をC2を後にする。夜明けと共に天気がおかしくなってC3に着いた時は完全なブリザード。C3は半分くらい雪に埋もれていたけれどよく耐えてくれてたものだ。午後、最低コルまでのフィックスを予定していたけれども動きがとれず後方にジェティ・バフラニのピークを望み、いよいよきたなとの思いを深くする。

四月二七日（登頂日）
地吹雪で荒れた天気が、静けさを取り戻しかけた。どんな態勢で寝ても寒く、息苦しい、〇時三〇分、三人共耐え切れず起きてラーメンを作る。胃からジワジワ暖かくなってまたいつの間にか眠ってしまった。二時半起床予定が、三時半充実した睡眠から目覚める。ザイル一本、フィックス三〇〇メートル、スノーバー五本、カラビナ、ツェルト、少々の食糧、荷物は七キロになる。三人共体調はよい。
快晴、無風で暗闇の中にジェティ・バフラニの肩がはっきり現われ、月が光っている。絶好のアタック日和りになった。ヘッドランプをつけて、ラッセルを交代しながら、飛ばす。
複雑な地形で、雪庇が入り組んでいる。六一五〇メートルの肩に出ると、東の空が紅く染まっている。下りはナイフ・リッジになっていて、ロカピ・コーラ側はスッパリ切れ落ちている。サリモア・コーラ側は見えない。赤旗をたててロカピ・コーラ側を二ピッチ分ロープをフィックスする。クランポン（アイゼン）が小気味よくきく。確保用にステップを刻むとナイフ・リッジに穴が開きサリモア・コーラ側から朝日が輝き出した。視界は拡がりカイトに乗っている心地だ。さらに二ピッチ分固定すると、プラトー

の上に出る。肩のコルが真下に見えクランポンの爪をきしませてかけ下りる。六時四五分、コルで大休止。暖かい陽射しで、サリモア・コーラ側のＣ１が点程のように見える。コルからはサリモア・コーラ側の雪壁からロカピ・コーラ側へラッセルを交代しながら登る。頂上はどこになるのかわからないが、次から次に現われる雪壁を登るだけだ。一か所づつ。氷化した雪壁に、一〇〇メートルと五〇メートルのロープをそれぞれスノーバーで固定する。固定ロープとスノーバーを使い果し、簡単な食事を摂る。食欲はない。チョコレートを無理矢理放り込む。穏やかな天候に気分的には最高で、何の不安もなくひたすら雪壁を乗り越える。サリモア・コーラ側は、滑落したら二〇〇〇メートルは止まる所もない。トップは師田で快調にルートを拓く。幾つも同じような雪壁を乗り越え、剣岳北方稜線を登っている幻覚を見る。師田、吉田共着実に登っていく。傾斜が緩くなって頂上が真近だ。師田の提案で並列に登る。ラッセルがきつい。二〇歩歩いて呼吸を整える。一四時二〇分、こじんまりしたふくらみの上に立つ。皆に感激した表情は見えず安心感で心が充たされる。意識しなかったが義務感から解放されたようだ。お互い記念撮影をする。気づかないうちに西側は雲が湧き出て、あっという間にロカピは雲に隠れてしまった。国境の山のかなたにチベット高原が限りなく拡がっている。一四時四〇分、下降を始める。近づく嵐との競走だ。西風が吹き上げる中を雪壁に向かってザイルで下る。固定ロープの所まで戻ると、今までの緊張感が一度に緩む。一息もいれずＣ３に一七時二〇分に疲れ果ててたどりついた。幸い天候の崩れは、僕等を待っていてくれたようだ。

登　頂

吉田　秀樹

それまでの天候のパターンからも出発は早ければ早い程良い事はわかっていたし、幸い月明りも強かった。高度のためか絶対登るのだという緊張感のためか寝苦しかった僕等は早くから起きて待機していた。案の定、無風快晴。Ｃ１の下で別れたバラサーブの「絶対登ってこいよ」の声を思い出しながら出発の準備をする。四時過ぎ出発。暗さの為にラッセルがよけいにシンドイ。すぐにトップを交替して

もらう。あたりが明るくなる頃肩のピークへ着いた。いよいよここからはコルへのフィックス工作だ。圧倒的に切れ落ちた東側の斜面と西側の大きな雪庇。先日ノーザイルで少し下った時の恐怖感は今はない。三井さんに確保されて後向きに手足を一つづつ動かして一ピッチ延ばす。そして師田がフィックスを張る。そしてまた三井さんがザイルを延ばす。そんな事を四回くり返すと比較的広いコルへ出た。コルは思ったよりも広くテントも何張りか張れそうだ。第一段階終了。ここから先の稜線も肩のピークから見上げた時の圧迫感はない。気分的にも楽になり少し食物をとった。すぐに急な雪壁に行手をはばまれ大きく左側へまくのだがラッセルがひどい。主稜線へ戻ると後は所々急な雪壁が現われるが単調な登りとなる。頂上がなかなか近づかない。もうひたすら目の前の雪の斜面を消化していく事で頭がいっぱいになってしまう。ロカピが下方に見えてくることで高度をかせいでいる事を知る。頂上直下はだらだらとした広い斜面だった。頂上。どういうわけか感激がそれほどわいてこない。頂上付近があっけなかったからかもしれないし、ジェティ・バフラニは登らなければならないし、また絶対に登れる山だという意識が強すぎた為かもしれない。今は登ったという安堵感と世界の屋根といわれる山々の中にいるという壮快感を感じるのみだった。これでヨーロッパへ行けるぞという事もふっと考えた。

ジェティ・バフラニに登頂した時のこと

師田　信人

「もうこれ以上登らなくてもいい。ノルマは果たしたのだ」というのが、頂上に着いた時の正直な気持だった。喜びだとか、登った、っていうようなものはもっと時間がたって安全なところに戻ってからかみしめるようにして湧いてくるものだ。頂上へ着いた時は下りへの恐怖感でそんな余裕はなかったと思う。

長い頂上稜線をロープをフィックスをしながら、あと一〇メートルくらいでやっとピークってところまで出た。後は何の障害もなく緩く続くだけだった。せっかくみんなで登ってきたのだから一緒にピークを踏もうということで、三人で横に並んで登る。丸い細長いそんな頂上だった。へりは雪庇になっていた。今思えばザイルでもつけてへりまで行けばよかったかとも思うけれどもあんな時はとてもではな

いけれどもそんな気にはなれなかった。チベットの山脈がすごく印象的だ。三井さんが頂上を評して遠くから見てるとすごい可愛いお嫁さんって思ってたのに登ってみたら中年のおばはん」というようなこと言っていた。まァそこまでムゲに言わなくてもいいと思うけれども、とにかくもうこれでいいのだという気持でいっぱいだった。三人とも嬉しそうな顔をしていてもその点では冷めてたんではないか。

頂上からの写真を撮る。俺達は旗というようなものは持ってきていない。一通りやり終えるとちょっとくつろぐ。俺は前の晩からアタックが成功したらやろうと思っていたことをやる（何をやったかは内緒なのです）。

下降のことを考えると気分がめいった。トランシーバーも持って来てないのだから、足でも滑らせれば誰にも知られずに幻の記録になるかなというようなことばかり考えていた。

頂上での三〇分はあっという間だった。とにかく一刻も早く安全地帯まで逃げ込みたかった。

たとえそれがどんなささやかなものであっても、自分の持っている夢の一つを実現することができたということ、そんな事を考えると確かに俺は恵まれているのかもしれない。一つの夢を実現するとまた新たな夢を求めて彷徨する。「夢は決してはでなものでも、突拍子もないものでもない。それは地味なものだと思う。もしかしたら地味な活動のはてしない延長なのかもしれない」こんな手紙を俺に送ってくれた人がいる。確かにそう言われてみれば、山岳部に入ってからずっと心のどこかに抱いていた小さな夢がやっと陽の目を見たようなものかなと思う。

登山活動を終えてＢＣにて　前列左より、クリシュナ、カンチャマン、アディカリー氏、山田隊長、アン・テンバ　後列左より、パサン、三井、キパ、吉田、井関、師田

ＢＣへ下山

三井　和夫　吉田　秀樹

四月二八日　Ｃ3→Ｃ1

朝：食欲があまりないのであっさりしたワカメラーメンを食べる。第二次アタックの事も頭に浮かぶがトランシーバー交信はできないので、ともかくＣ2まで下る事にする。Ｃ2には誰もいなかった。いよいよこれで登山活動も終りに近づいた。Ｃ2撤収。三〇キロを軽く越す荷物を背負ってヨタヨタと下る。いつもはシリセードで気持ちよく滑ることができる斜面も今日は全然すべらない。内院へ下り切った所で荷をかなりデポしてＣ1へ。Ｃ1で待っていてくれたバラサーブ、井関さんの顔が懐かしい。少し前に別れたばかりだと言うのに……。

四月二九日　Ｃ1→ＢＣ

けだるさが心地よい目覚めだ。バラサーブ、井関さんは若干の荷を持ち先にＢＣへ下る。残り三名で昨日のデポ回収。Ｃ1の後始末。下りは荷を工事用シートに包んで引っ張って行くが雪がグサグサでなかなか進まない。ＢＣまで半分の所でまたも荷をデポしてＢＣへ。ＢＣではコック自慢のパンやら井関さんの手作りの料理に堪能する。

四月三〇日

用事で先に帰国しなければならないバラサーブがクリシュナと共にチャインプールへ向かう。サーダーもポーターアレンジでドウリまで同行する事となる。本隊チャインプール（バジャン）発五月二一日でチャーター機を予約してくれるとの事。「日本で会いましょう。」

五月一日

井関、三井、吉田、師田全員でデポした荷物を回収に行く。リエゾン・オフィサーのアディカリーさんも同行する。大へん上気嫌であった。

登頂後

三井　和夫

登頂を終えてＢＣへ戻るとすべての力を使い果したあとのように呆然と過ごす。動くと動悸が激しくなり呼吸もぜいぜいと昼飯以外の時はひたすら横になっていた。

五月一日の最後の荷下げは、眠って歩くの繰り返えしで、二〇分歩いて睡眠という具合だった。まったく無気力のＢＣで井関さん考案の寿司をたらふく食べた。食欲だけは衰えることなく回復していった。

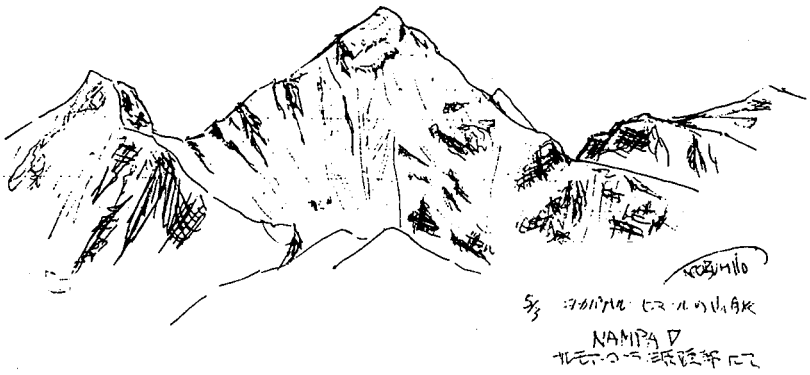
この日かすかに入ったラジオネパールに耳をかたむけていたアディカリーさんから、植村直己が北極点に達した事を知らされる。とうとうやりましたね。と互いに話すが、それ以上しゃべるのもしんどいくらいだった。一番眠ったのは吉田だ。とにかく飯以外の時はひたすら寝ていた。動いたのは師田だ。回復が早くテントの中でも本を読み一人でロカピに続く沢に行ってきた。僕はひたすら太陽にあたっていればしあわせだった。

五月二日

師田は一人でロカピの南側へ出る沢をコル近くまでつめて戻ってくる。他は休養。

五月三日　ＢＣ→サリモア・コーラ→ＢＣ

三井、師田、吉田にリエゾン・オフィサーを加えた四名でサリモア・コーラをつめる。ボバイの東尾根をまわりこんだあたりまで行き引き返す。



サリモア・コーラ源流へ

三井　和夫

三井、吉田、師田、リエゾン・オフィサーのアディカリーさんの四人でサリモア・コーラ源頭部に探険に向かう。五時半出発で足を動かすのもしんどいのにまだ動けるようだ。六時五〇分ジェティ・バフラニ谷（？）の分岐点で、寒風の中チャパティーの朝飯を食べる。一人元気なアディカリーさん、僕なんかなぜ歩いているのかもわからずそれでも歩いていた。寒風の中で太陽はジェティ・バフラニのピークにだけ陽が当り始めてダウラガリを背負っている。ここはこごえてしまう。そんな中大キジが打ちたくなる。こんちくしょうだ。出合から少し歩くとゴルジュがある。幸い雪がつまっていて水は音のみ、時々見える水は四月初めの清らかさは失われ雪融けの白濁した水に変わっている。ダウラガリは廻り込むと登れそうだ。傾斜のきついゴルジュ帯を抜けると広い雪原となる。ラクシャウライの山々は将棋のように立ち並び小さいが洗練されたものを感じる。谷は屈曲して突然右岸に雪におおわれたアジャンタ、エローラのような建築物が目に入る。回廊がはるか奥まで続いている。一歩一歩神殿の中に入っていくような静かで壮大な期待で興奮する。この自然の建造物は雪の間に赤茶色の帯となっている。段丘の淵なのだか、時にエンタシスのような柱をつくり屋根までつくっているのだ。源頭地帯はモレーンが数限りなくナンパの峰々の下までつづいている。アディカリーさんはこの時だいぶ気分がよかったようでカシミールでの登山学校の様子、そして山が好きでガンガプルナには登りたいと話していた。今までBCという閉塞された場所に長くいて、社会の刺激のないところで唯一音の入りの悪いラジオに耳を傾けトランプしか楽しみのなかった彼はこの日がBCでの最高の日だったろう。

五月四日

BCにて終日荷物の整理、今日はアンナプルナII峰に逝った佐藤さんの命日だ。

五月五日

本日もＢＣにて荷物の整理。四時頃から雨が降り出し、雷鳴が轟く。四時半過ぎ、サーダー、ポーター一八名ひきつれて到着した。すでに撤収したキッチンテントを張り直し、ポーターを収容する。

帰路のキャラバン　再びチャインプールへ

ＢＣを後に

井関　芳郎　　吉田　秀樹

行動概要

五月六日　ＢＣ発
八日　ドゥリ着
九日　ドゥリ発
一三日　バジャン着、飛行場の草原にテントを張る

五月六日　ＢＣ→ナヨダール

いよいよ帰路だ。雪解けが始まったコーラの水はもう濁っている。朝サーダーに引きいられた一八名のポーターがくる。問題のゴルジュも難なく通過。来る時と違ってポーターもよく歩く。ウライ峠への分岐点までくるともう雪はほとんどない。二日分の行程をかせいで往路に泊ったテントサイトに泊まる。

五月七日　ナヨダール→ニウノ・コーラ出合

暖かくなったせいかポーターの朝も早い。雪の為フィックスを張った高巻きも難なく通過し今日も二日分かせぐ。もう副食品はほとんどなく、サラミソーセージを混ぜた山菜のタルカリが今晩のおかずだった。夕方、ポーターの一人が鹿（日本のカモシカのようだった）を一頭射とめ、獲物はそこにいあわせた皆で分配するという彼らの慣習に従い、肉を三分の一分けてもらう。その夜は解体、料理とポーターは夜遅くまで起きていた。

五月八日　ニウノコーラ出合→ドゥリ

昼食に昨晩分けてもらった鹿の肉の煮つけを食べた。ニンニク、ショウガ、ショウ油での味つけは格別であった。

家畜の糞が現われはじめると懐かしい人里、ドウリに着く。学校の庭にテントを張る。

五月九日　ドウリ→カーレ

リエゾン・オフィサーとカンチャマンは早朝ドウリを発ち、チャインプールへ向かう。カトマンドゥからの連絡が来ていないとリエゾン・オフィサー動揺しており、目付きも少々異常であった。

ポーターは仲々家から出て来ない。出発は何と十一時半になってしまった。

道中、羊飼のキャンプがあり、チャンを求める。大きなカップ一杯三ルピー。久しぶりに飲むチャンは旨い。ほろ酔機嫌のキャラバンとなってしまった。

今日は女のポーターが一人混っていた。何かしら少し、いつもとは雰囲気が異なるようだ。

五月十日　カーレ→グラウン

いつものように「グッドモーニング・サーブ」の声で起されるが、寝心地が良く、仲々シュラフから出られない。

朝日の昇るのが早くなったためか、ポーターの出発も早い。今朝は何と六時には全員出発した。

羊飼の通過に出合い、しばしば行手をさえぎられてしまう。何百頭いたのだろうか。雪解後のウライ峠を越えて中国領のタクラコット迄行くとの事であった。今日はチャンも鶏にも有りつけなかった。

五月一一日　グラウン→クワール

ポーターの足どりも快調。行き交う人も多く、昼食をとったところでは往路に雇ったポーターに出会った。

夕方近く、猛烈な雷を伴って雹が降った。一時間くらい降り続いた。

五月一二日　クワール→タルコット先の河原

昨日まではよく歩いてくれたポーターもここまで来て問題を起こしてしまった。昼飯時になっても食事を作ろうとせず黙ってこちらを見ているだけだ。食糧がないと言う。こちらとしても規定の食糧を渡してあるので要求を呑む訳にはいかない。サーダーの提案で一まず後で話をつける事にしたら彼らが食

事を作りだしたのにはあきれてしまった。
泊場について見るとサーダーがいない。宝石を買いにナイケとどこかへ行ってしまったのだ。替りにコックのパサンがポーターと交渉する。結局食糧代を後から引く事でポーターに食糧を支給する。パサンは一人でかなり疲れたようだった。

五月一三日　タルコット先の河原→バジャン
日中の暑さをしのぐ為ポーターは五時頃出発する。川も増水して行きにわたった橋も渡れず、少し遠まわりしてチャインプールにつく。サーダーにナイケ、そしてドウリより先発したリエゾン・オフィサーとカンチャマン、それにバラサーブと先発したクリシュナの顔もみえる。泊場は飛行機の関係で飛行場にした。
最後になってまた問題が起きた。ククリが一丁紛失したのだ。サーダーは前例になるといけないのでポーターに弁償させろと言うがポーターは承知しない。結局今日は物別れになってしまった。まァ明日になれば彼らもまた金をもらいにくるだろうという事で静観する事にする。

再び人間世界へ

プレの登山の楽しみはBCから下りる時の楽しみが最高だ。登ることのみに集中した雪上での一ヵ月は、まさに雪の白と空の青の世界だった。BCの雪もだいぶ解けたため大きな岩が出てきてテントは居心地が悪くなる。対岸のびゃくしんの緑が日毎濃くなる。でもまだ残雪のBCは太陽が出るとサングラスなしに目は開けていられない。BC撤収の日はテントは一メートルもの高床になり張り綱を掘り出す事もない。全部雪の間から出ているのだから、登りの辛さに比べ帰りのポーター達も気楽だ。雪の上をバンビロの足跡が道を示してくれる。陽射しはポカポカと一歩毎に春の中に入る。猫柳が芽生え岳樺も芽が出ている。こんなに早く下るのはもったいないと思っても下から春風が呼んでいる。プリムラが咲

きアヤメが咲き沈丁花の一種が鼻をくすぐる。春の祭典が自分の感情を超えてしまう。感情が思いのまま飛び、体におさまりきれない。

雪に苦しんだところが一面ギシギシにおおわれて風にあいさつしている。二日分を一日で歩く。春まっただ中だ。

ほこらはランカ神をまつっている。この神はスリランカとも関係がある。チベットへの交易路で安全を祈願して、コイン、紙幣、写真、祈願文を供えている。ランチプレースでは残雪の上でグリセードを楽しみ、ふもとのドウリ以来初めて髪の毛を洗う。歯はしそうのうろう気味であった。みんないい男になった。特にカンチャマンは西部劇に出てくるカウボーイのように変身して皆を驚かせた。

バジャンでは麦の収穫期。女の人が刈りとった山のような麦を背負って運ぶ

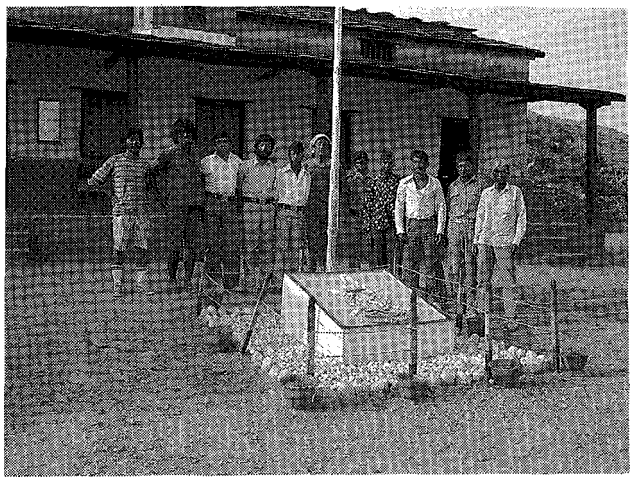
バジャン飛行場（フライト待ちの日々）

行動概要

五月一五日　三井、師田、リエゾン・オフィサー他2名カピタルへ出発
一七日　チャーター便　二〇日に飛来との連絡有り
一八日　三井ら、カピタルより戻る
一九日　警察署に署長のヤギンドラ・タパ氏を訪問
二〇日　チャーター便　飛来せず
二二日　チャーター便にてカトマンズへ

五月一四日

案の定、ポーターが交渉にくる。結局キッチンポータがククリ代を弁償することでケリがつく。見物のネパール人の目が気になりだす。



警察署にタパ氏を訪問する。左から３人目がタパ氏

五月一五日
三井、師田、クリシュナ、キパ、リエゾン・オフィサーの五名でカピタルへ出発。井関、吉田はバジャン飛行場滞在

五月一六日
井関、吉田終日飛行場で過ごす。アメリカ人二名、テントに来る。一九日の便でカトマンドゥに行く予定だが、飛べない時には我々のチャーター機に同乗させて欲しいとの事。

五月一七日
ロイヤル・ネパール・エアラインズのゴパール氏よりチャーター機は二〇日に来るので当日は飛行場から動かないようにと指示される。

五月一八日
午後、カトマンドゥからのツイン・オッターが到着した。往路にお世話になった警察署長のヤギンドラ・タパ氏が下りて来た。再会を喜び、明日警察署を訪問する事にする。
カピタルへ行った三井、師田等戻る。

五月一九日
午後四時過ぎ、タパ氏を訪問する。お礼にフィックス・ロープをプレゼントし、パビール峰についての情報を交換する。タパ氏より、荷物をカトマンドゥ迄輸送して欲しいとの申し出があり、引きうける事にする。
テントに戻ると本日の定期便がキャンセルのため、明日のチャーター便に乗せて欲しいという話が舞い込んで来た。

五月二〇日
終日飛行場で過ごす。荷物は総計五八〇キログラム。タパ氏の荷物三〇キログラム。他にネパール人四名、ドイツ人一名搭乗の予定。一人四〇〇ルピーもらうことにする。

しかし、チャーター便遂に姿を見せず。
今晩はカトマンドゥで冷えたビールでも飲むかと思っていたので皆ガックリしている。
羊を一頭、二五〇ルピーで買う。クルバ（鎌）で首をはね、解体は師田も手伝ってあっという間にモモ（餃子）に変ってしまった。師田曰く、「人間も羊も同じだ」。

五月二一日
昨夜はテントを張らず、荷物のわきに寝る。コックやカンチャマン達は朝からモモ作り。ひき肉機が大いに偉力を発揮している。余りにひまなので飛行場の大きさを測ってみた。長さ七五〇メートル、幅六〇メートルあった。
夕方六時前、ツイン・オッターが飛来した。パイロットが言うには「昨日、バジャンへ向って飛んで来たが天候が悪くて引き返した」という。ツイン・オッターはあわただしく飛び立って行った。チャインプールへ遊びに行っていた三井、師田、パサン、カンチャマン血相を変えて走って来た。

五月二二日
十一時過ぎ、昼食中にツイン・オッターが下りて来た。我々のチャーター便であった。あわてて荷物をまとめ、積み込む。
草地の滑走路をゴトゴト動き出し、重そうにやっと浮かび上ると山肌をかすめるようにして上昇して行く。気流が悪く大変ゆれる。機は想い出多き山河を後にカトマンドゥへと向う。ネパール・ガンジで給油の後、午後二時、カトマンドゥに着いた。

カピタルへ

師田　信人

バジャンでのフライト待ちしての休養、とは言っても強烈な日射とハエの大群でうんざりだ。本当に

今日の晩メシは？　サーダー、コック、キッチン、メイルランナー総出でモモ（ギョーザ）づくり

白い皿が真黒になるんだ。顔、口、鼻にもおかまいなく舞いこんでくる。おまけに村の大人、子供がどっと押しよせてじろじろ珍しそうに見物している。前にも物を盗まれたところなのでフィックス・ロープを張りめぐらす。こっちはまるで動物園の猿になった気分だった。

それで以前から話に聞いてたカピタルへ三井さん、クリシュナ、キパと四人で行くことになった。

五月一五日朝、出発間際になってリエゾン・オフィサーが俺も行くと言いだしてひともめし、バジャンに残る連中は厄介払いできたように思ってたかもしれないけど、こっちは行く前からどっと疲れてきた。やっぱり人間関係おかしくなるともうだめだという気がしてくる。

とにかく暑い暑い一日、一二時から二時まで昼寝したけれどもハエが多くて眠れたものではない。今日はカピタルのふもと、ミリティーって村の小学校の庭に泊まる。途中の村で初めて甲状腺肥大のすごいのを見たので頼んで触わらしてもらう。晩飯のおかずになるはずのニワトリが逃げ出し、みんなで血相変えておいかけ回した。後で首はねたらもろに返り血をあびた。

カピタルへの急な山道をたどる。途中で山菜やキノコを採っていく。カピタルは実にいいとこだ。ネパールの霧ケ峰という感じで森に囲まれた緑の草原の中に池沼が点在している。広々とした草原の中で牛や水牛が牧草をついばんでいてさわやかだ。バジャンのあのハエと暑さの中でくすぶっていることに較べれば、しんどいけれども本当に来てよかった。草原をわたる風が涼しい。秘境カピタル……そんな気がしてくる。一〇〇歳を越える仙人という噂も高いカピタル・ババの家に寄って（三井さんが大変感心していた）タマル氏（ランジャンさんの弟）の事務所に行き、その近くをキャンプサイトにする。タマル氏もカピタル・ババもいなくてちょっと残念だった。天気は崩れないと思っていたのに夜、しっかりと雨が雷を伴って降ってくれた。それでも一七日はまた雲一つない快晴になる。もう今日帰るのかと思うとすごいもったいない。こんなところで流れゆく雲を追いながらいつまでもボケーっとしていたくなる。カピタル…青い空、白い雲、緑の草原、いつかまた来る日はあるのかな、そんな思いを残して昼すぎカピタルを後にする。途中リエゾン・オフィサーの友人のところに寄って今晩は道端の岩小屋に泊まる。酔っ払いの警官にからまれ、合法的に若干のニワトリの肉を食われた、くそっ。一九日はもうバジャンまで戻るだけ、最後の最後でとうとう三井さんとリエゾン・オフィサーがケンカになった。シェルパ達とはすごく呼吸がピッタリなのに、リエゾン・オフィサーとは合わないってのは、単に日本人だから、ネパール人だからってことを越えた以上の、個人的な問題が絶対あると思う。俺も相手がリエゾン・オフィサーなんて肩書き持ってんじゃなかったらとうにぶん殴ってるところだった。バジャンの一

時間くらい手前のところで、三井さんと昼寝してたら飛行機の音がする。俺達のチャーター・フライトは明日の予定なのに…いやでも間違って今日来たのかもしれない。ネパールならありうるというので二人で息せききって戻ったら関係ないフライトだった。みんなに笑われるし疲れるしでいいことない。そんなこんなでカピタルへの旅は終り、早速、暑い暑いバジャンの飛行場でハエと格闘している。夜は星を見あげながらシェルパ達に歌を教わり一緒にハーモニカを吹きあう。カトマンドゥももうすぐそこ…（本当は、またチャーター・フライトが延期になって死にそうに退屈な数日をさらにバジャンで過ごすはめになった）。

平地と蠅

三井　和夫

最終の村ドウリにあと半日と近づいた所から、蠅が出てきた。しつこい蠅で歩いていると追いかけてくる。それから苦しい蠅との同居生活が始まる。朝は動きが悪いが昼飯の為に休憩すると、一斉に集まってくる。食後の睡眠を楽しみに生きている我々にはこれはひどいしうちだった。横柄な蠅達は慎みもなく顔のいたる所を勝手に歩きまわり一刻も休まない。だから無理して歩いた方がよいのだ。一番ひどいのはバジャンだった。蜜蜂かと思われる大群になり食事時は追い払う事も不可能で、紅茶カップは飲んだらふたをしないと必ず入ってしまう。勿論昼寝は当然妨げられる。夕方テントの内側にとまった蠅は捕虫網ですくい取られるが何千匹といる網の中は羽音が不気味だ。一日遅れのチャーター・フライトが、バジャンに着いた。普段は牛の放牧場になっている飛行場でキッチン・ボーイのキパは牛を柵の外に追い出しまわっている。彼には夢のお告げで今日飛行機が飛んでくるというのだ。諦めかけている僕等をあてにせず、彼は一人で広い飛行場から牛を追い出していた。飛行機のエンジンの音が高まり飛行場に舞い降りて来た。すると今まで集まったこともないような群衆が集まり、蠅の集団とごっちゃになる。久々に見るロイヤル・ネパール・エアーラインズのスチュワーデスは、明るくあいそがよい。彼女は我々が飛行機に乗り込むと同時に入ってきた蠅の群にびっくりしてスプレーを取り出した。強烈な蠅はスプ

レーなど全然気にせず飛びまわっている。結局この蠅達は、カトマンドゥまで同行して空港でハッチをあけた時広い空に飛んでいった。これを見た次の便のスチュワーデスの驚きの顔は、いまも印象に残っている。

隊員

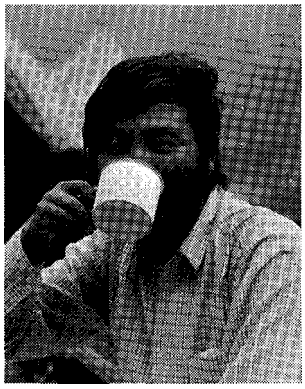
山田　和彦

チームを組んで登山を行う場合、楽しい山行になるかどうかは多くの条件があろうが、チームの構成（メンバー）によるところが大であろう。ましてそれが海外での長期にわたる困難な登山であれば、各メンバーの性格は体力、技術よりも重要な要因になろう。この隊のメンバーは皆、肉体的にも精神的にもかなり過酷な状況に耐えることができ、個性豊かでバラエティに富み、しかもチームワークのとれた誠に良い構成であった。以下は自己紹介である。

山田和彦

医学部昭和三九年卒　丸子中央病院勤務　四〇歳　隊長・渉外・医療

「いい年をして」と皆から馬鹿にされ、自分でもそのように思いながら、一つの山行が終ると、のどもと過ぎれば何とやらですぐ次の計画をたてては喜んでいる。アルコール中毒の人が「酒は悪いもの」とわかっていても止めることができないと同じで、登山は危険で肉体的にも精神的にも良いことばかりではなく、周囲の人達には多大な迷惑をかけてばかり……とわかっていても山から抜けきれないでいる。こうなれば周囲の人があきらめてくれるより仕方あるまい。世界での未知（どの分野ででも）に挑戦する能力のないのはわかっているが、せめて自分にとっての未知なるものにあこがれ、体験のワクを拡げて行きたいといつも思っている。



井関芳郎

農学部昭和四六年卒　松本鑿泉工業㈱勤務　三〇歳
会計

都落ちして早十一年、信州を第二の故郷とした。ヒマラヤ遠征出発前は一児の父であったが帰国後、二児の父となってしまった。前年のアラビア出張も含めると、この一年間、女房子供と一緒に暮らしたのはたった四か月間で、伊勢の実家にあずけっぱなし。

会社も首にならず、女房にも逃げられる事なく、幸運だったの一言。

準備期間中、遠征中とも主にマネージメント、会計を担当。時コックも兼任する。

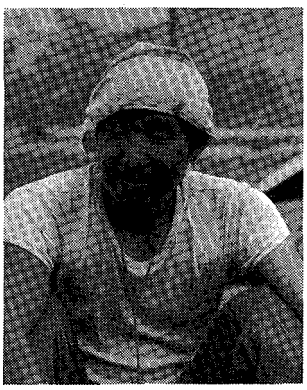
ボッカでは最も軽い荷をかつがせてもらった。

三井和夫

人文学部昭和五一年卒　二六歳　食糧

身長一六三センチ、平均体重五七キロ、短足で甲高、バンビロ、戦前の平均的日本人の体型であろう。隊員中で一番のチビ、走るのが好きで走っている時が最高の気分で、陥込んでしまった時には一走りしてくると余計な事も消し飛んで気分が壮快になる。頭より体が調子を作用する。単純な脳細胞は鍛える事も諦めてひたすら体力を鍛えた。兎歳生まれだから残念ながら沈思黙考型ではなくチョコチョコと飛

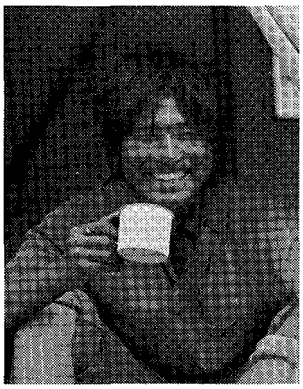
び歩き集中力に乏しく情緒に左右されやすい。開拓者精神で行動するというより、時として短絡しており思いつき実行型の典型といえる。じっとしていると調子悪く、気力にむらがある。洗練されたものよりプリミティブなものにあこがれる。野山を駆け巡るのは子供の時から好きで、僕の基本的な部分になっている。将来は牧場をもちたいというのが僕の夢だ。



吉田秀樹

人文学部四年 在学 二四歳 装備・梱抱・輸送

高校の時に入ったクラブがスキー山岳部であった為、山登りを始める。今まで続いているのはよほど性に合っていたからだろう。反面、他の事に関する好奇心は弱く無趣味である。松本の街、そして信大が好きな為、長くこの地に住んでいる。



師田信人

医学部三年在学 二三歳 医療

山岳部医学科、信頼するに足る医学的知識皆無、もっとも年間山行日数一〇〇日以上で、丸一日授業に出席したのが年間三〇日以下ということくらいしか自慢の種がないのだから当たり前だろう。

今回の遠征のチョンボ役、カトマンズでは王宮の壁によじ登ってえらく怒られたし、キャラバン中は生水バカ飲みして下痢にやられるし、登山中も何かと問題児でみなさんどうもすみませんでした。根が甘ちゃんで、短気わがままにできているみたい。でも新人部員に返り咲いたような新鮮な気持ちでしっかり荷上げしていた。

いつもホラばっか吹いていたけれども、嘘から出た真みたいでネパールへ行くことになって、一番面喰らっていた。まあ山に登れてよかった。目下、柄にもなく勉強しようって気になって高度障害の後遺症だか低所障害だか(もともという誹謗中傷が圧倒的だけど…)、とにかく記憶力の低下に愕然とする毎日です。

隊員について少し付け加えると、井関は信大学士山岳会員の中では珍しく几帳面な男で、他の四人がずぼらでいいかげんだっただけに彼の存在は大きかった。会計・事務雑役等がきちっとでき、今回の遠征が順調に終ったのは彼の力によるが、少し細か過ぎて多少敬遠されたときもある。毎夜、就寝前に妻子の写真に「おやすみ」を言っていた。また調理がうまく、ときどきすばらしくおいしい料理を作っては皆を喜ばした。会社の理解を得られてスムーズに出れたのは、彼の日頃の仕事に対する姿勢によるものであろう。

三井は勤務の休職も可能であったが、あっさり退職して参加した。何か期するものがあったのだろうか。学生のときネパール・ヒマラヤのメラ・ピーク(六四〇〇メートル)に登っており、長期間、ネパールやインドを歩きまわった経験がある。外向的な性格でありながら自分を環境に適応させて行く方であり、今回も期待どおりの働きをしてくれた。家では母親の理解があって……と言うよりは、もうあきらめられたといったところか。

吉田は学生(といっても七年生)ではあるが、登山に関しては体力・技術・精神全ての面で安心してみていることができる。ただ、あまりにおとなしすぎるのが気になったが、内にこもる事もなく結構楽しくやっていたようだ。喜怒哀楽の情を表わすことがなく、あの、頭にきて発狂しそうなキャラバンでさえ、ポーターに対する愚痴一つこぼさなかったのは驚くべきことで、尊敬に値する。

師田は山岳部のリーダーで、山ばかり登っているわりには学業の方も優秀らしい……ということは非常にがんばり屋であるということである。山では登高意欲と体力は抜群で、今回の登頂も彼の馬力に負うところが大きかった。今後は、ただがむしゃらに登るのではなく、皆と山行を楽しむ余裕がほしい。

シェルパ

アン・テンバ

サーダー

サーダーとして同行した。キングズイングリッシュを話し、チベット語も堪能なインテリだ。商売上うまく立ちまわれないところがあり、統率力に欠ける点も指摘できるが、謙譲の美徳をもつ人格者。秋のニルギリ南峰隊にもサーダーとして参加した。

パサン・ニマ

コック

風采があがらず、小柄な体であるが遠征隊のコックには、最高の人。かつてのマカルー遠征隊で、手の

指を失ってから、登攀は不可能となったが、コックとしては、一流の腕をふるう。限られた材料から、工夫して料理する。しかもおいしい。買い出しを進んでしてしまうのではなく、サーブにいつも相談して、顔をたててくれた。隊員の食糧を心配して、自分は食わないで済ます。それも、人に知られないようにして。また一緒に行きたいと思わせる人だ。

アン・キパ

キッチン・ボーイ

常に明るく生きていて、歌が好き。大きな声で歌いながら、調理しているのは、端目で見ていても楽しくなる。秋のニルギリ南峰隊にも参加した。

クリシュナ・バハドゥール

メイル・ランナー

精悍な顔と体で、今までのシェルパ達にない新しいタイプの人です。彼の仕事は主にメイル・ランナーだが、ある時は、ナイケの役、サーダーの役、コックの役をこなす。遠征隊の動きを全て把握していて、役職にとらわれていないので、小人数の登山隊には、実に頼り甲斐がある。

カンチャマン・ラマ

メイル・ランナー

質実なタマン族。酒も飲まず、タバコも吸わず、ひかえ目だが、メイル・ランナーの職を離れても頼りになった。秋のニルギリ南峰隊にも参加した。

リエゾン・オフィサー

ウペンドラ・アディカリ

トリビュバン大学哲学科出身の陸軍少尉でリエゾン・オフィサーとして参加された。まだ若く非常にまじめで、やや余裕に欠けるところもあったので、きびしい条件下での生活で隊員とのトラブルも多少み

られたが、我々の貧乏隊のため精一杯努力していただいた。

ヒマラヤ道中食べ歩記

井関　芳郎

ヒマラヤ遠征においての楽しみは、山に登ることにもあるが、やはり飲みかつ食べる事にあるといっても言いすぎではないであろう。山に登るズクの余りない小生でも、飲みかつ食うことに関しては不思議とズクが出るものである。

さてキャラバン中、またベースキャンプ等で味わった食べ物の中で特に思い出深い印象に残ったものを思いつくままに記してみる。

①タルカリ

いわゆるカレーである。ネパールにおけるカレーは日本のカレーとは大いに異なる。日本では煮物に醤油で味をつけるが、この醤油のかわりにスパイスと塩で味つけしたのがカレーである。

鍋にギー（羊のバター）またはサラダオイルを落としこまかく切り刻んだニンニク、包丁の背でつぶしたショウガ、みじん切りにした玉ネギを、熱したギーの中にほうり込む。そして、こんがりと色がつくまでいためる（約一五分）。そして肉（手に入らない時は肉なし）を入れていため、塩、スパイス（ミートマッサラ）、トウガラシ等を加え、さらに一五分ぐらいいためる。その後水を少々加え、二〇～三〇分ぐらい煮つめて水気がなくなったらでき上がりである。我々が味わったタンパク源はニワトリ、山羊、鹿（？）（ポーターが鉄砲で撃ったもの）、魚であった。

またバナナ・カレーというのも食べた。青いバナナを皮ごと茹で、皮をむいて三センチぐらいに切ってスパイスで味つけしたもので、芋のような感じがしたが喉につかえ余り多くは食えなかった。

青菜を茹でたものをカレーで味つけしたものもあったが仲々旨いものであった。バッティで食べるカレーには必ずと言っていいほど出てきたが忘れられない味のひとつである。

②コロッケ

登頂を終え、全員集結したBCでコロッケが食べたいと言い出した。さてコロッケの材料は……と考えた。ジャガイモと肉とパン粉が必要だが……。

ジャガイモはキャラバン中に購入したものが少々残っているし、肉はまだ鶏が何羽かテントのまわりをうろついているが、さてパン粉はないのでコックにパンを焼かせて粉にするかと、しばらく思案した。思案しても仕方がない。キッチン・テントの食料箱の中をかき回し始めた。あった、あった。カトマンズで購入したクラッカーがあった。スパイスの味が強く、塩味のため皆余り手を出していないクラッカーが残っていた。

ビニール袋に入れ、手でもんで粉々にした。それをパン粉のかわりにした。

その日の夕食は皿に山盛りのコロッケであったが、胃袋の空っぽの連中の前では、一口も残らなかった。

③手巻寿し

BC撤収もせまり、荷物の整理も終えた日の昼食に寿しを作った。作ったといっても残物整理といったようなものである。

材料は、海苔、椎茸、玉子焼、烏賊の塩辛、サラミソーセージ、干瓢、梅ごのみ、ゆかり、わさび等。圧力鍋で炊いたネパール米に粉末酢をまぜたすし飯を各人が海苔の上にとり、具をのせて巻く手巻き寿しであった。

とっておきの最後の日本酒で乾杯。トロ、烏賊、雲丹、海老を思い出しながら。

④わらび・やまうど

帰途のキャラバンは早い。ドウリーの部落も近くなった山腹の道を進んでいた。小さな林をぬけ、日射しも明るい草原にふと目をやった、おや？　一瞬我が目を疑がった。まさかと思ったが斜面を下りて行った。何とわらびだった。あたりを見回すと、たくさん出ている。うれしくなって摘んだ。おや？　また目を疑った。何とわらびと並んでうどがあった。ポキッと折ってかんでみる。あの独特の歯ごたえ、そして香り、本当にうれしくなってしまった。

その日の夕食には、茹でて鰹節のかかったわらびとうどが食卓を賑わした。

何故

三井　和夫

山岳部では徹底してオゾさを追求した。野性的に生きていくたくましさ、いかなる状況の下でも生きてゆける生命力を培った。先鋭化した登山とは対極にあり、探検的な山登りを目指し土の臭いがいつも染みついているような山登りに魅かれていた。一九七四年、ネパール・ヒマラヤのトレッキングは、そんな僕の山登りにぴったりだった。自然の中に包括されている人間に安心するのだった。そしてもう山登りすることもなく、ネパールで暮らすことで充分だった。人の生活とあまりにかけ離れた登山は、遊離したものに思えた。トレッキングの後、インドに行った。特にサンティニケタンでの農民の貧しい生活にもかかわらず心の豊かな人々に触れ、自分の今まで生きてきた事がつまらなく思え存在感のない流れる水に浮ぶ枯葉のように頼りないのだった。五〇〇〇年に及ぶ文明が人々の心にいまも流れ、確かに受け継がれていく。一人一人の生命力の重さに歴史の流れが直接つながっている。衝撃的なインドは消化不良のまま三年たってしまった。三年たったら再度出かけようと考えていた所に、ちょうど遠征計画が湧いてきた。山田隊長の立案で、合宿というか個人山行に近い肩のこらない計画だった。最初は申請書に名前が載っただけの隊員だったのが、いつの間にか正式隊員となっていた。遠征隊というのは組織して動き出すと個人が埋没する傾向がある。そんな感情を無視した登山は煩わしいし、初めから嫌だった。幸い各隊員は僕にはすぎたる人ばかりで、いつでも個人的なレベルで楽しめる人達だった。日本の山の延長で気張ったものもなく、何より簡素な隊の魅力が僕をひきつけた。隊長自らが合宿と連発するところから、隊全員現役の気持ちでいられる。マイナーな気分からネパールに行けるのだ。行くからには思い切り楽しむ事に徹底しようと割り切れた。

実行に移す時になって僕は非常に恵まれていた。言葉が足りない僕の事を最大限に理解してくれた人達の声が、遠征期間中にいかに励みになったか、そういう人達の声があったからこそ積極的に参加できたのだ。人に支えられ山に登る事ができた僕は恵まれている。くじけそうになった時松本の人達に感謝した。

遠征を終えて

師田　信人

今にして思えば、思い切って日本を飛び出してみて、本当によかったと思う。正直言っていざ遠征がきまった時、すごく迷っていた。前から何かしたいと思っていても、いざそれが実現するとなると半信半疑でためらいが生まれるのかもしれない。

とにかくやることなすこと、見るも聞くも初めてのことばかり、チョンボばかりやってたような気もする。ポーター集めで一苦労し、キャラバンを始めればポーターのことにいらいらし、何より俺達の目指しているジェティ・バフラニという山を見つけることができるのかどうか、すごく不安な毎日だった。でも未知の領域に踏みこむようなそんな喜びもあったけど。人間関係の難しさというものも改めて感じさせられた。うまく登れたから、そういうのが表面化しなかったのかもしれないし、また俺達の場合、信大山岳会という一つの集団だったから、最後のところで持ちこたえてたのかもしれないが、シェルパ、リエゾン・オフィサー、ポーターとのつながりも含め、いろいろ考えさせられることが多かった。それから話はちょっと変わるけれども、例の登山違反のことだって、いろいろ不十分な点があったことは確かだけれども登山に関して問題なしとした決定を、あんなにも簡単にひっくり返されたことに、何か割り切れないものを感じた。論理の組み方が異なる以上、やむを得ないのかもしれないけれど……。

とにかく、いろんなことがあったと、今にしてつくづく思う。

いつのころからか、漠然とした夢のように心のどこかにひっかかっていたヒマラヤというものに、ささやかなものであれ自分の手に触れ、そして頂に立つことができたことを素直に喜びたい。

遠征の感想

吉田　秀樹

山登りをしばらくやっていると誰もが気になってくるのが海外の山の事だと思う。僕の場合も例外でなく最初に行ってみたいなと思ったのはヨーロッパ・アルプスだった。何故ヒマラヤや他の地域でなくヨーロッパ・アルプスだったのかという事は、その後もずっと現在まで僕の登山の性格に、良きにつけ悪しきにつけ尾を引いているように思う。

海外登山研究会で信大の遠征隊が現実的なものとなってからも、僕にとってヒマラヤは非常に遠い存在だった。遠い雲間にそびえているという感じであった。確かにヒマラヤの山々はヨーロッパ・アルプスに較べればスケールも大きく魅力的であるが、そんな事がまずヨーロッパへというためらいに現れていたように思う。本を読んだり、地図を見たりしてもなかなか身近なものとならなかった。

「日本を出発すれば遠征は半分終ったようなものだ」と言われているように、実際の登山活動以外の事が大きな比重を占める。そういう所を実際何をやったらよいかという事がピンとこなかった。その点今回は、好き嫌いにかかわらず西ネパールという特殊な地域へ行けたのは非常に良い経験となった。ポーターが集まらない。なかなか歩かない。BCを置ける所があるだろうか、いつ着けるだろうか。そんな山登りとは直接関係のない(しかし、それが山登りの原形に近いのかもしれない)、人まかせの僕もさすがに悩まされてしまった事は、その時は非常に苦痛だったけど、今となっては初めて三月の日高、利尻へ行った時と似たパターンで（勿論それより強烈に）貴重な懐かしい思い出となっているのです。

今回の遠征が僕にまた一つ別な世界へ行けるということを確信させてくれた。思い出は思い出として残し、その中から良かった事を次の登山に生かして行きたいと思います。

徒然に

師田　信人

ジェティ・バフラニ、思えば本当によく見つけたなと思う。サリモア・コーラに入ってからは、あれがジェティ・バフラニだろう、いや、こっちだ、あっちだ……山が見つかり、ＢＣを決めた時は本当にほっとした。山を見つけるだけでも、十分スリルを味わえた。

登頂した後、みんなでサリモア・コーラ源頭に行く前日に、一人でロカピの方に通じる枝沢を辿って行った。朝日の中に影を追っかけながら、誰もいない風の唸り声しか聞こえない世界、雪原に自分の足跡だけがどこまでも続いていく、何とも言えない気持ちだったのを覚えている。帰りは雪がくさって、泣きたいくらいしんどかった。距離感が狂って一〇〇メートルくらい先と思っていたのに一時間くらいかかったりして……。

考えてみれば、ドウリを出て山を登ってまたドウリの村に戻るまでの五週間近くは、毎日男しか見ていなかったことになる。実に信じ難い。こんなこともう二度とないだろう。いやあってほしくない。そのためだか帰りのキャラバンではドウリから女のポーターが一人いて、最初はイモ姐ちゃんくらいに見てたのがバジャンに近づくに連れてどんどん可愛く見えてきて、俺は眼がおかしくなってきたんじゃないかという気がしてならなかった。

バジャンでは行きに盗まれた双眼鏡が警察から戻ってきてこれが役に立った。飛行場から双眼鏡でサリーを着た人を捜しては「うわァ、美人、美人」「スンガリ・ケティー」とか言ってみんなはしゃいでいた。山では全然役に立たなかった双眼鏡なのに…。

カトマンドゥに戻った俺達を待っていたのが、パスポートとフィルムの押収、これにはめげた。頂上からチベットの写真をとったのが、中国の国境守備隊を刺激したとか、ネパールの秘境警察がからんでるとか、信じ難いデマがまことしやかに飛びかい、俺達は半軟禁状態、低所障害とか言って昼間からウダウダと寝転がっていた。大体俺達はいつもカトマンドゥに戻る度にろくなことは起きない。六月、ガネッシュ・ヒマールの偵察に行き、やっとの思いで帰ってきてみれば、例の登山規則違反問題、また低

所障害ショックの再発で昼間から引っくり返っていた。

冒険について

師田　信人

山を登るとか、極点目指すとか、そういったことは基本的に今の社会＝価値とか生産性だけを追求する社会では、何の意味＝価値もない。それどころか、死にでもしたら正に犬死にってことで一笑に付されるのがオチなのかもしれない。でもそれだからこそ何の意味もないことに体を張る、例えば植村直己、長谷川恒男の行動などに人は共鳴を覚えるんだと思う。社会の価値感に対する反抗とでも言えばいいのかな、でもこのパラドックスを徹底するなら、例え単独で極点へ行こうと、壁を攀ろうとサハラを横断しようとそれを自分の胸の中にだけしまっとける奴が、本当の真に偉大な冒険者ってことになるではないか。俺はそんな気がする。本当の探検とか冒険ってのは誰も見てない、誰も知らないとこで繰り広げられる自分だけのもの、自分自身との闘いだと思うのだ。誰にも知られず砂漠や海に消えてった奴こそ、本当の冒険者、そして本当のバカだと思う。

ドクターサーブをやらされて

師田　信人

今回はなぜかちゃんとしたドクターの肩書きを持った人がいたのに素人と何ら変わることのない俺がドクターサーブをやらされることになった。まァとにかくそのひどさと言ったらキャラバン開始の二日目で山田さんが「学生時代の俺よりひどいのがいたか……」と絶句して俺を教育するのにサジを投げた

のを見ても、わかるでしょう（もっとも俺の方は当たり前と思って受け止めてたけど……）。
　さて、俺はとにかく毎日面喰らうことの連続だった。小さな傷なら適当に消毒してガーゼでもあてとけばいいし、虫歯が痛いなら正露丸をつめ（これが馬鹿にならない、カトマンドゥのランジャンさん宅で、使用人のおじいさんが歯痛で顔面半分腫れあがらせてたのが正露丸をつめただけで劇的に解消、おかげで俺はそれ以後、会う度に最敬礼されて何かえらく良心の呵責にさいなまされた。）、このへんまではまだいい。そのうち眼が見えないから見えるようにしてくれ、変形した関節を治してくれなど……何か俺の方が気が狂いそうになってくる。朝昼晩きれいな水で眼をあらいなさい、毎日マッサージしてればよくなるかもしれない……俺は一体漫才でもやってんのかって気がしてくる。でも一番困ったのは薬目当てで来る連中だ。腹が痛い、気分が悪い……中には本当に調子が悪くて来た人もいるだろう。でも俺の力では、悲しいかなそんなの見分けることはできない。くそっ、せめてお医者さんごっごのまね事くらいでもできるくらいに勉強しときゃよかった、なんて思っても後の祭り（もっともそんなに勉強してたらこんなところへ来るような事もなかったろう。世の中うまくいかんもんだと思うよ。）、確かに薬はあるんだからどんどんあげればいいじゃないかという奴もいるだろう。でも俺はすごい抵抗を感じる。俺達はそんな慈善のばらまき団体とは違うんだ。金持ちが貧しい人のためにと言って施すような偽善で満足しちゃいけないんだと思っていた。お愛想で気前よく薬をあげて、それで何かネパール人のためにやってあげたような気になれるのなら、それはそれでいいだろう。でもそんな甘いものじゃないと思う。ネパールの医療の現実ってのは……。自分勝手とかサボるための口実だとかいろいろ批難はあるだろう。でもとにかく俺は自分に診断する力がないから、と言って相手の言うがままに薬を出すってのは絶対嫌だった。もちろん中には遠くから、ぐったりした赤ちゃん連れてやって来た人達もいた。そういう時は俺だって知識がないなんて言っていられないから真剣になる。真剣になっても一緒になって頭抱えこむくらいしかできなかったけど……。
　まァ固い話はそのくらい。今でもいい憶い出になっているのは帰りのキャラバンでドウリに着いた時のこと。その一か月程前に村で原因不明の死者が出たということもあってか、村人が三人やって来た。腹痛と頭痛と歯痛で俺がびっくりしたのは、彼等が持ってきたもの、ニワトリ一羽、タマゴ六個、ニラ三把、俺はいらないって言ったけど、サーダーがせっかく持ってきたんだから受け取れ、受け取れ。かくてめでたく恥ずかしながらもこれが俺が生まれて初めて受け取った診療報酬となったわけ。ちなみに俺がやったことと言えば、例のごとく歯が痛いってのには正露丸をつめ、腹痛の人も同じく正露丸、頭痛

のにはコレデスあたりでも出したんだと思う。思えば、まァ天下太平な世の中です。
いろんなことがあったけど、いつかまたネパールへ行きたいなと思う。今度はもっとしっかり自信持てるだけの力をつけた時に。

ポーターのことでちょっと

師田　信人

ネパールへ行けばポーターを雇ってお金払って荷物を持ってもらい、そしてBCまでキャラバンする。言われてみればこれが遠征の常識だけれども、日本ではこんな阿呆なことやって山へ行く奴はいない。おかげで俺はポーターのことでえらく疲れた。ひねっても何も出てこないような頭でしきりに悩んでいた。

実際、ポーター達をお金で雇うことはどうにもやりきれないいやな立場だ。ついついいつの間にか資本家と労働者みたいな感じになってくる。少ない金でできるだけ働かせようとする。ひたすら能率をあげることばっかり頭にあって……。日本で何だかんだ言ってもこういう所にくるとあっさり逆の立場で思考を展開しているのだ。もともと短気な質だから、すぐポーターと大げんかを始めて、ふと一体俺は何者なんだと疑いがよぎり、愕然とし自己嫌悪に陥り、目を覆いたくなるようなことが何回あったことか。とにかく、実に卑猥な関係に立ってると思う。シェルパ達の中には複雑な気持を持ってる奴もいたのではないかなと思う。登山隊とポーターの間に立ってて……。

どうも「遠征隊」ってのは感覚的にいやで、金を使っていることが、いけないんだろう。金を払って人を使ってまで山へ行く必要があるのだろうか。山は自分の力で登るということ、そこに何かを感じるなら、自分で背負って行ける山に行くべきなのかもしれない。でも大きな山にも行きたい。そう思ったらどうしたらいいんだろう。どうも難しい。自分に対してうまく説明できない。日本の山みたいに自分の力で行けるところへ行ってる方がどれくらい楽かと思う。でもこうやってポーターの問題で悩み、それがもとで隊員同志でもぶつかったりなんかしながら、嫌だ嫌だと思っていても、こんな中でもまれてい

くのかも知れない。悪いことばっかりいつもあったわけではないし……帰りのキャラバンではポーターの撃ち殺したカモシカの肉を掟だとか言ってその場にいあわせた全員で分けて食うとかで、俺達にまで肉を分けてくれたこともあったし、結構楽しかったことも多い。

ともかく、金を払って人を雇って山へ行くことをもっと考えてもいいような気がする。今は、行きたいから行くんだということで俺は自分を強引に納得させようとしているけど……。

ニワトリが空を飛ぶ

山田　和彦

セティ・コーラぞいの地域では食糧が乏しく、ほとんど手に入らなかったが、ニワトリはときどき購入することができた。ネパールでは(カトマンドゥでは養鶏が行われているというが)ニワトリは放し飼いで、餌をあたえることはない。当然、痩せていて骨と皮ばかり、わずかにくっついている肉もとても硬い。そんなためか、ニワトリは屋根などから三〇メートルぐらいはバタバタと空を飛ぶことができ、かなりの迫力がある。ニワトリが鳥であったことを再認識させられ、こんな本来あたりまえの事に感動する自分の姿に気付いて、現在自分の育っている環境について考えこまされてしまった。ニワトリをつかまえるには四～五人の者が一五分ぐらい大捕り物をくりひろげる。今回、数羽のニワトリをBCまであげた。雄鳥もいたので、朝、ニワトリの「コケコッコー」で目がさめるといった妙な気分になったりした。残飯をたらふく食べて、丸々と肥った彼等は、そのうちに隊員達の旺盛な食欲を満足させることになった。

装　備

吉田　秀樹

信大での本格的な遠征は二度目であったが、トレッキングでの小ピークハントや他会の貴重な報告などにより、七〇〇〇メートルクラスの山なら日本の冬山の延長として考え得るのではないか（ゼニなし、また天候の面、また完全な極地法をとらない）という所から計画立案ははじまった。

山については七二年ポスト名大隊の記録があり、ルートは逆方向からであるが雪が主体であり、登攀具もそれに合わせた。

（個人装備）

現在使っている装備があればそれを使い、また特別なオーダーはしなかった。濡れる心配があまりないので、羽毛、皮製品が有効であった。ただ日射が非常に強いので顔の保護の事を考える必要がある。シェルパに対してはBCまでという事を強調し羽毛服代、登山靴代等は支給しなかったので非常に安くすんだ（リスト）。

（登攀具）

ルート中にアイスフォール帯もなく、より容易な北稜線という事で、スノーバー中心に若干のアイスハーケンを使用した。フィックス・ロープは通過頻度も低く六ミリ主体で充分信頼できた。

使用量

フィックス・ロープC2～C3　（六ミリ・一〇〇メートル）（八ミリ・二〇〇メートル）（肩への登り―肩―コル一五〇メートル　西側急雪壁一部氷）

C3～P　（六ミリ・三〇〇メートル）（コル―P一五〇メートル　部分的にあらわれる雪壁三カ所　あればもうすこし下り用にはりたかった）

スノーバー　六〇センチ　二五本

アイスハーケン　コ型　二本

（露営具）

Ⅰ　キャラバン用　①一〇人用カマボコ天（隊員）
②五人用夏天二（リエゾン、シェルパ）
③工事用シート

①はキャラバン中は雨もほとんどなく快適だったがＢＣでは日中の強い日射しで内部は非常に暑かった。

ポーター用の雨具は用意しなかったが、プレ期とはいえ、途中雪、ニワカ雨が降った時は気の毒だった。また街道筋とはいえ宿もほとんどなく、ポーター用に工事用シート二～三枚を毎日かした。

Ⅱ　上部用　メスナーテント　二～三人用　二　四～五人用　一

最終配置はＣ１小型一、Ｃ２大型一、Ｃ３小型一。途中の悪天でＣ１、Ｃ２のテントのフレームが強風で一カ所ずつ折れてしまったが、これは日本でも時々あるアクシデントでこの種のテントの限界なのかもしれない。

（炊事具・火器）

炊事具はコッヘル一、ミートチョッパー、マホウビンを除いてネパールで求めたものであるがＢＣ用と上部用は別々に用意した方がよかった。

火器はＣ１はスベア、Ｃ２、Ｃ３ではガスコンロを用いた。高度、寒さによる不調はなかった。

使用量

石油　計三五リットル　上部で六リットル使用（二〇〇cc／人）

ガスカートリッヂ　一一個（一個／二人日）

（照明具）

なるべくローソク、ヘッドランプですます予定であったがキャラバン中はポーターの到着が遅く度々圧力式ケロシントーチを使用。

（その他）

トランシーバーは古いものを持っていったため途中で三台全部故障してしまった。酸素は種々の事情

により救急用も持っていかなかった。お土産の文房具はここがかなり僻地でもありキャラバン中、泊めてもらったお礼に有効だった。

以上大きな失敗はなかったが、仲間どうしである事に甘えて細かな点への配慮や工夫が欠けていた事は反省しなければならない。

途中、シルガリ・ドウティ、チャインプールが比較的大きな街であるが装備の補給については性能の悪い電池(単II・I)、ケロシントーチのスペア、ローソク、若干の石油ぐらいで価格の点からもすべてカトマンドゥで揃えた方がよいと思う。

食糧

三井　和夫

新鮮さよりも、基本的なものを選んでリストアップをした。翔んでる食事に対して這いつくばっている食事とでもいおうか。家庭内でのバランスの取れた食生活が理想とは思っても、結局山岳部現役時代の食生活が甦って、その拡大計画の枠を出なかった。

現地調達が主となり、BCまでは現地の食生活で過ごす。高所においてもネパールで手に入る限り当地で調達する、というのが基本方針となる。

さて西ネパールの食糧事情はネパールでも最悪といわれる。何故なのかはっきりとはわからないが中・東部に比べて、物資が乏しく取り引きも小規模になる。貧困の度が深くなる。衣類は如実に語っている。耕地が狭いとも思われないのだが。

とにかく西ネパールでは、シルガリ・ドウティ、チャインプール、ドウリ以外での補給は考えず、レーションシステムを採らずに基本の献立表のみ作成しておいた。

購入先は、以下の三つに分類した。

一　日本でしか手に入らないもの

即席食品、日本の味、乾物類など、主として高所食

二　ネパール内で手に入るもの

キャラバン中、ベースキャンプのみならず高所食にも使用する。

三　日本から空輸しても価格、味を考えて、メリットがあるもの。

(a)　日本

細かいものが多く、量も少ないので買い出しは楽であった。好意的な援助を受け、真空パックのベーコン、サラミソーセージ、フルーツ缶詰、だしの素、わかめ、みそ汁、粉末タマゴ、即席ラーメンは大いに助かった。

総重量は、二七〇キロ。計画より三〇キロオーバーしてしまった。期日が迫るにつれて欲しいものが増えてきて切り捨てるのに苦労する程になってしまった。

(b) カトマンドゥ

ヒンドゥ教国のネパールにも輸入の牛肉が店頭に並び冷凍食品まである。ドライフードの工場もあり、安くて豊富なマーケットで何でも手に入る。

米一人日で〇・五キロ、砂糖一人日一〇〇グラムの割で主食、調味料、野菜を買う。

バザールでの買い出しは楽しい。我々は手押し車に積んで運んだが注文書を店に出して配達してもらう事も可能だ。

(c) シルガリ・ドウティ

ドウティ県の県庁所在地のため政府の役人の食糧倉庫からカトマンドゥと同じ値段で購入できた。バザールの三分の一の価格で米、石油、岩塩、砂糖を買う。米はダンガリから運んでくるので高くなる。

キャラバン中の食生活

たらふく食えればよいという隊員のおかげで不満がつのらず、食糧係としては無為であった。パサンは限られた材料を工夫して逸品を作り出す名コックであった。毎日同じメニューでよくも続いたものと感心してしまう。モーニングティー、二時間とたっぷり余裕をとった昼食、比較的豪華なネパール食。昼、夜は、ポーター達もたき火を囲む。あちこちから煙がのぼる。チェットリー、ブラーマンは食事中、裸でいる。暑い時はよいが、寒い時はトリハダをたてている。よくパサンと共に先行して食糧を調達した。ニワトリ、卵がこの地域は安い。全部有精卵である。野菜は、畑にもない。麦、稲との二毛作地帯なので、ジャガイモ畑も少ない。それでいて食糧不足なのだ。

登山期間中の食生活

BCのレストラン形式は失敗して全員同じ食事になった。いただきますで一斉に食べ始める。シェルパ達は控え目に食べ、隊員が食欲を奪ってしまった格好だった。井関さんの活躍により幅のある食事に

なった。羊のレバーステーキ、手巻き寿司、モモ（ギョウザ）、白玉だんごは特に好評。

ニワトリの放飼いは汚されてキパはよく追い払っていたが、飼うのは楽しく肉に一層味が出てきた。

Ｃ１以高では一二人分のパックを八個とＣ１用、アタック用一五人日分の総計一〇個のパックを作る。総重量一二〇キロ、五人で二三日分以上ある。結局、一七日分の高所食を使った。

ラーメンはいつでもうまい。わかめラーメンは好評。ベーコンの真空パックは、新鮮な味が保たれていた。乾燥食品はホーレンソウのおしたしがうまく、長ネギ、白菜の臭いには惨々悩まされた。ワンクイック赤飯はうまく炊けるのに、白米はしんが残り、考えなおした方がよい。しかし、よく食べた。

重要なアタック食は特に作ったものではなかった。三人共昼に食欲減退し、食べたくなくなった。考えられることは、Ｃ3までもってきたテルモスを使用せず、持参したフルーツ缶を凍らせてしまった事、脱水症状になったところに、チョコレートの甘さは、拒絶反応を引き起こす。この一日の水分摂取量の不足は、予想以上の疲労を残した。

帰りのキャラバン

山菜のおかずが主体となり、伯夷・叔斉の山中の生活を想い起す。ポーターの射止めた野生の山羊は、全員で均等に分配され、この地域の共同体意識の一端を知り、うまい肉にかぶりつく。チャインプールでは鯉に似た魚のフライやマチャ(魚)・カレーを食べる。

総括として

今でも不思議な程、皆よく食べてくれた。不平が殆ど聞かれず、食事の量はシェルパを上まわっていた。これは計画段階で隊員相互が食糧事情に協力的で理解をもってくれていた為と察する。栄養のバランスのとれた、変化に富んだ食物からは程遠いものだっただけに、キャラバン中、食欲不振や下痢に悩まされた隊員が出た時には、責任を痛感したものだ。コック、パサン・ニマの奮闘には感謝する。やりくり上手で、控え目な彼は、コックの仕事に自負心をもっていた。

西ネパールの厳しい食糧事情の中で満足感さえ得られたのは、工夫して作るコックと隊員からの節度ある助言であった。

二か月が限度の食糧事情だったが全隊員の適応力、順応はカトマンドゥから驚かされた。一日の出費を下げる事に度を超して、こちらが心配するくらいだった。

梱包・輸送

三井　和夫

梱包材料は寄贈、安く譲り受けられるものを優先したため、使いにくい面も出てきたが、帰路のキャラバンまで充分持った。

用意したものは

1、金属製トランク（鍵付）一
2、プラスチック製段ボール箱（三〇キロ容量）
3、段ボール箱（小）
4、平織りした布にコーティングした布と袋
5、竹カゴ、麻袋

1、は医薬品、トランシーバー、金等の貴重品を入れた。

2、この箱は薄手であったため、途中で変形するものがあった。2と3は別の所からのもので規格があわず、3二個が2一個に入るようにできれば梱包が少しは楽になった。

4、この袋は三〇キロの内容物に耐えるように縫ってもらい、口をとじれるようにヒモをつけてもらった。主に竹カゴに入れる物を入れて使用。使用範囲が広く非常に有効であった。布は紙製の段ボールを包むのに使用。これらはガムテープ、PPバンドとストッパーで梱包した。

輸送

1　日本↓カトマンドゥ（川崎航空サービス）
　アナカンにて実質四二〇キロを送る（七〇〇円／キロ）
2　カトマンドゥ↓シルガリ・ドウティ
　ドウティでの購入分を除く隊荷一二〇〇キロと一一名が、チャーターしたツィンオッター機（最大積載量一五〇〇キロ）二機（二回に分けて）にて。（約三七万円／機）
3　ドウティよりBC
　五二人のポーターで出発、六日目のチャインプールでポーター用の米を六〇〇キロ購入し運んだため、

最大ポーター数は六九人となる。タララ、チャインプール、ドゥリでポーターの総交替を余儀なくされ、一九日目にBC予定地に到着。

帰路はバジャンよりツィンオッター一機によりカトマンドゥへ。

ロイヤル・ネパール・エアラインズの運航状況がよくつかめなくて、バジャンの飛行場を行きにつかえなく日数をとってしまったのは大きな失敗だった。

マネージメント

井関　芳郎

信州大学山岳会海外登山研究会を母体とし、遠征を推進するため実行委員会を結成した。組織は非常に簡略化し、遠征に参加しようという意志を持った者が活動しやすい状況を作ったのは成功だったと言えよう。計画は二転三転し、最終的にネパール政府からの許可が下りたのは出発の五か月前であった。具体的な取り組みはそれから始まったといっても良い。ここでは主として具体的な行動を開始してからのマネージメントについて記す。

・資金

今回の遠征はできる限り自前でやろうという事で、後援会組織は作らず、学士山岳会、学内外関係者、及び隊員の勤務先等を中心の活動であったが、予想以上の多大な御支援をいただく事ができた。

・チームワーク

五名のうちネパールの登山、トレッキングの経験者が三名おり、国内でも共に山行をしたメンバーであったので特に強化合宿等は行わなかった。また全員が松本在住であるため、何時でも全員がすぐ集まることができ、意志の疎通がごく自然になされていた。BCをはなれれば、五人だけの世界で、穂高で合宿しているような雰囲気を感じた。

シェルパ達ともキャラバン中はすべて同じ食事をし、会話も不自由なくできたことから、意志も十分通じていたと思う。シェルパ達との間でトラブルは発生せず、種々の困難にシェルパ達も共に立ち向かってくれた。

・ポーター

今回の遠征の最大の焦点はポーターの雇用にあった。当初はポーターの賃金が非常に高いだろうと考えていたが実際には仲々集まらず、シルガリ・ドウティを出発するのに五日間も空費してしまった。他

人まかせであったためイライラしたが、結局は自らの行動によるしかないようである

賃金は二六～二九ルピー／日であったが、食糧事情が悪いため、チャインプールから奥では往路、帰路とも食糧を支給した。リエゾン・オフィサーの手腕により政府支給米を六〇〇キロ安価に購入してこれにあてた。

・フライト

キャラバンを進めてバジャンへ来ると、何とロイヤル・ネパール・エアラインズのオフィスがあり、ツインオッターが発着している。定期便も飛んでいるという。我々はセスナしか発着できないという事でわざわざシルガリ・ドゥティへ飛んだのだが。このようなことも来てみないとわからないのがネパールであろうか。

会　計

井関　芳郎

本遠征は当初七名で計画されたが最終的に五名となり、予算面では一人当り一〇〇万、合計で五〇〇万円で計画した。

以下に実行収支を示して若干の説明を加えて報告とする。

・寄贈物品の概算額は金額に含めていない。

・保険は隊員は郵便局の簡易保険、シェルパ等は富士火災と契約した。

・医薬費は大半を寄贈によったものである。

・空輸した隊荷は約四二〇キロである。

・人件費は、リエゾン・オフィサー三五ルピー／日、サーダー三〇ルピー／日、メイル・ランナー(1)二八ルピー／日、メイル・ランナー(2)、コック、キッチン・ボーイの三名は二五ルピー／日、ポーターは二六～二九ルピー／日であった。

・運賃輸送費は、ツイン・オッター機を三便チャーターした事による。

・残金七七九一円と、三〇〇三ドルは秋のニルギリ南峰遠征隊の経費に繰り入れた。

リストI

〈シェルパ支給装備〉

・トレーニングウェア（1セット）・夏用シュラフ（1）
・サブザック（1）・ヘッドランプ（1）・軍手（2）
・キルキィングのヤッケ（1）・カサ（1）・サングラス（1）
・ナイフ（1）・くつ下（パイル）（2）
・100円ライター（2）

＋260ルピー（タバコ代、靴代として）

リストII

〈登攀具〉

J：日本より　K．D：カトマンドゥデポ　現：現地にて

品　　名	規　　格	数量		
登攀用ザイル	9㎜ 40 m 9㎜ 160 m	2 2	K．D 未使用	
フィクス用ザイル	8㎜ 100 m 9㎜ 100 m 6㎜	4 13 500 m	未使用 未使用 J	2本使用 未使用
アイスバイル アイスハンマー ロックハンマー	門田　サレワ サレワ トップ	4 1 1	J J J	 未使用
アイゼン予備		1	K．D	未使用
カラビナ	ジュラルミン	30	K．D	
アイスハーケン	コの字型 平　型 スクリュー型	30 10 10	J J 1部J	2本使用 未使用 未使用
ロックハーケン	軟鉄	30	K．D	未使用
スノーバー	L型・リング付	30	J	25本使用
ジャンピングセット 予備キリ エゼクター	ホープ	2 1 1	J J J	未使用
ボルト	リング式	10	J	未使用
アブミ	三段	4	J	未使用
はしご用パイプ	1㎜厚 24.5㎝ 0.9㎜厚 20㎝	40 50	J J	未使用
ユマール		3セット	1部J	1人1台
竹ポール 赤ハタ用布		60本 100枚	現 現	
スキーストック		5	J	キャラバン中使用
細引	3㎜	15 m	J	
ワカン		2セット	J	未使用

〈露営具〉

品　　名	規　　格	数量		
夏用テント	5人用家型	2	K．D	
冬用テント	10人用ウインパー型 4～5人用 2～3人用	1 1 2	K．D J J	
ツェルト	2～3人用底割	1	J	
マット（BC） （C1～）	エアーマット 東レペフ	6 多	K．D J	
工事用シート 雪用ブラシ	3.6m×5.4m	6 3	J 現	余り使用せず
シャベル スノースコップ	剣先 ICIオリジナル（小）	1 3	現 J	
ノコギリ		1	J	
ククリ（ナタ） ハッシー（カマ）		1 1	現 現	
石油ランプ	圧力式	1	現	
テントペグ		30	現	
ローソク		70	現	
予備ポール 天幕修理具	4～5人用冬天用	1組 1	J J	
ポンプ	エアーマット用	1	K．D	
マット修理具		1	K．D	
石油ポンプ		1	J	

〈火　器〉

品　　名	規　　格	数量		
スベア（大） （小）	1l用 0.5l用	2 1	K．D K．D	BCとC1
スベアのスペア		2セット	J	
ガスコンロ ガスカートリッヂ	S－200型	2 20	J J	C2とC3 11コ使用
メタ		11	J	3箱使用
石油		35l	現	全て使用
フィルタージョウゴ		2	J	
ポリタンク	10l用	2	J	

〈炊事具〉

コッフェル（1組）と五徳ナイフ（11）とミートチョッパー（1）以外はカトマンドゥでコックと相談して購入及びデポ品使用

〈その他〉

品　　名	規　　格	数量		
トランシーバー	500 mW	3	J	
カセットラジオ		1	J	
ヘッドランプ		12	J	
電池	単II 単III	 600 本	現 J	
双眼鏡 高度計	 9000 m用	1 2	J J	
温度計	最高最低型 普通型	1 2	J J	
テルモス	サーモス 0.75 l	5	J	
バネ計り	30 kg用	1	J	
工具類	ドライバーセット ペンチ類	1 5	K. D K. D	
針金		15 m	K. D	
ポリ袋		多	1部 J	
マジックインキ		6	J	
タフロープ ビニールテープ 安全テープ	 1 m	2 5 3	J J J	
ゴム輪		多	J	
No.プレート	2枚1組	45	J	
トイレットペーパー	巻紙	45	J	
ガムテープ		10	J	
コーティング袋 〃　　布	110 cm×65 cm 120 cm×25 m	30 1	J J	
100円ライター		20	J	
センタクセッケン セッケン			現 現	
P.P.バンド P.P.ストッパー		800 m 50 コ	J J	
段ボール箱 プラスチック段ボール箱 番号鍵 タイプ用紙 カーボン紙 カッター ビス（16 mm） 火無しカイロ 裁縫具 アマニ油 キィウィ		15 17 1 1冊 10枚 1 15 10 コ 1組 1缶 1缶	J J J J J J J J J J J	
エンピツ 細書マジック		155 本 4	J J	

ボールペン ツープラスワン おもちゃ		9 2 4	J J J	
捕虫網 三角紙 採水用ポリタンク	0.5 and 1 ℓ	2 多		

食糧リスト

J　日本
K　カトマンドゥ
S．D　シルガリ・ドーティー
D　ドウリ
C　チャインプール

分類	食品名	数量	総重量	単価	購入先	備考
主食	ワンクイックライス	134袋	21.4kg		J	味のない白米（参考要）
	ワンクイック赤飯	30袋	2.4kg		J	好評（ゴマ塩つき）
	インスタントラーメン	302ヶ	30.2kg		J	ゴールドパック寄付好評
	信州ソバ	5束	1.25kg		J	
	ソー麺	4束	2.8kg		J	戻りが悪かった
	もち	2パック	1.4kg		J	もっと欲しい
		小計	59.45kg			
	米（ポカラマシーノ）		100kg	3.5RS／kg	K	500g／人 この種が一番うまい
	ヌードル細	180束	60kg	2.25RS／kg	K	30kg余り ポーターに支給
	〃　太	150束	45kg	4RS	K	〃
	スパゲッティー	17束	4.25kg	4RS	K	戻りが悪い
	マイタ		50kg	3．5RS	K	上質小麦粉 ケーキ・パンを作る
	ビスケット	120ヶ	0.06kg	3RS	K	高所食
	〃	20ヶ	0.1kg	4RS	K	
	ダル		40kg	6.25RS	K	ピンクの豆 このスープは好評
	ビターンライス		5kg	4.5RS	K	乾飯
		小計	約310kg			
	米		150kg	2.45RS	S．D	政府支給米．石も混り臭い飯
	アタ		126kg	9RS	S．D	高値．チャパティーはうまい
	マイタ		24kg	13RS	S．D	高く入手困難
		小計	300kg			
	米		600kg			政府米．ポーター支給用
調味料	コンソメスープ	140ヶ			J	
	〃　ビーフ味	25ヶ			J	
	〃　チキン味	25ヶ			J	
	クノールスープ	20パック			J	
	中華スープ	10パック			J	
	味の素	1パック	200g		J	
	クリームシチュールー	8パック			J	
	酢豚の素	4			J	
	麻ボー豆腐の素	8			J	

	八宝菜の素	6			J	
	すしの素	2			J	
	釜メシの素	6			J	
	たらこ茶漬	99			J	
	梅干し茶漬	90			J	
	お茶漬のり	250			J	
	生醤油	1 ℓ			J	
	粉末醤油	5パック	5 kg		J	威力を発揮
	ソース	1本	500ml		J	
	乾燥ミソ	5パック	5 kg		J	必需品
	インスタントミソ汁	120	1.2kg		J	〃 寄付
	だしの素	100ヶ	0.3kg		J	〃 寄付
	わかめ	120ヶ	0.36kg		J	〃 寄付
	粉末からし	1			J	
	粉わさび	1			J	
調味料	ねりわさび	1			J	
	ガーリック	1ビン			J	
	キムチの素	1ビン			J	好評
	納豆汁	2パック			J	
		小計	約23kg			
	ギー油		14kg	3RS	K	固形の上質油 入れものに注意
	サラダ油	5ビン	2.5kg	15RS	K	ビンからポリ容器に移した方がよい
	カネテール（食用油）		17kg	14RS	K	ポリタンクに入れるのがよい
	ミートマッサラ	30ヶ	1.5kg	6RS	K	
	スパイスジラ	20ヶ	1.0kg	2RS	K	
	ベサール	10ヶ	0.4kg	3RS	K	
	チリーパウダー	10ヶ	0.4kg	3RS	K	
	ブラックペパー	4ビン	0.4kg	3.5RS	K	
	ベーキングパウダー	2カン	1.0kg	14kg	K	不足
	トマトケチャップ	20本	5.0kg	6RS	K	ビン詰め
	バター		5 kg	12RS	K	不足
	砂糖		50kg	6RS	K	上質のザラメ
		小計	98.2kg			
	唐辛子		1 kg		S・D C	入手容易
	塩（岩塩）		10kg	2.5RS	S．D	
	砂糖		20kg	7.9RS	S．D	精惣が悪い
		小計	31kg			

乾物類	ゼラチン	2パック			J	
	白玉粉	2パック			J	
	氷豆腐	8パック			J	
	ほん豆腐	10パック			J	
	ひじき	2パック			J	
	さらしあん	5パック			J	
	寒天	6本			J	
	乾ししいたけ	2パック			J	
	片栗粉	3 〃			J	
	納豆昆布	5 〃			J	
	かんぴょう	1 〃			J	
	焼のり	5畳			J	寄付　味つけのりも欲しい
	もみのり	5袋			J	寄付　使いみち多数
	ごま	1袋			J	
	ふりかけ	14袋			J	
	ニボシ	4パック			J	乾燥が弱くネパールでは露が出た
	花かつお	3 〃			J	
		小計	約10kg			
趣好品（必需品）	日本酒	20本	3.6kg		J	
	紅茶		1kg		J	寄付．すくなかった
	昆布茶	2カン			J	1ヶで間に合った。梅昆布の方がよい
	コンデンスミルク	10ヶ			J	カンマンドゥでも手に入る
	スキムミルク	4パック			J	〃
	甘納豆	6パック	1.5kg		J	かびが生えてBCで廃棄した
	ようかん	10本	4.2kg		J	
	チョコレート	60枚			J	
	プリンの素	10ヶ			J	
	おかき	20袋			J	好評．寄付
	さきいか		2kg		J	〃
	貝		2kg		J	沈殿日によい
	こんぺい糖	3袋			J	
	洋ナシ缶	48ヶ	28kg		J	うまい．寄付
		小計	約60kg			
	紅茶		5kg	15RS	K	ダストティー
	インスタントコーヒー	6ビン	0.6kg	12RS	K	不足
	ココア	5ビン	0.5kg	14RS	K	
	レーズン		5kg	60RS	K	
	チーズ		2kg	14RS	K	

趣好品（必需品）	ピーナッツ		5 kg	30RS	K	
	ピーナッツバター	10kg	1.5kg	12.5RS	K	高カロリー　本物
	ハニー	10	1 kg	7RS	K	ビン入りより、はかり売りの方がよい
	カシューナッツ		5 kg	90RS	K	乾燥悪く残念
	かりん糖		5 kg		K	茶店にある
	ミルクパウダー		5 kg	20RS	K	
	ジャム	20ビン	5 kg	12.5RS	K	インド製
	パイナップル缶詰	15カン	6.75kg	14RS	K	インド製
	桃缶詰	15カン	6.75kg	15RS	K	〃　失敗
	ジン	4本		48RS	K. S D	強い
	ロキシー				K他	三日酔いしたものもいた。安心してのめる。
	チャン					チベッタンのチャンがうまい。ドクロ付近は酒をのまない。
		小計	約70kg			
肉類	乾燥鶏肉	2パック	0.6kg		J	
	ベーコン	10　〃	5 kg		J	寄付　味よく好評、信州ハム
	サラミソーセージ	40本	7 kg		J	寄付（信州ハム）高所では不評
	粉末卵		3 kg		J	寄付　何にでも便利
		小計	約15.6kg			
	魚缶詰	10ヶ		10RS	K	サラダにも使えて便利 意外にうまいインド製
	卵	30ヶ		1RS	S. D	入手困難　カトマンドゥから運んだ方がよい
	鶏			12～20RS		安い
	淡水魚				C	唐揚げ、タルカリ、塩焼き
	羊	2頭		300RS	ドウリ C	最高
野菜	乾燥（J. F）ネギ		0.3kg		J	臭いが強い
	人参		〃		J	
	ホーレンソー		〃		J	おひたしがうまい
	キャベツ		〃		J	臭いが強い
	玉ネギ		〃		J	
		小計	約1.5kg			
	玉ネギ（ピアジ）		30kg	2.5RS	K	
	大根（ムーラ）		30kg	4RS	K	
	ニンニク（ラスン）		5 kg	1RS	K	
	ショウガ（アトジア）		3 kg	2.5RS	K	
	ホーレンソウ		10kg	1RS／束	K	
	カリフラワー（カウリ）		10kg	1ヶ7RS	K	保存がきかない
	株大根		10kg	1RS／束	K	
	グリーンピース		5 kg	3RS	K	
	トマト（ゴールベダ）		5 kg	3.75RS	K	

	人参（ガジャ）		20kg	1RS／束	K	
	ナス		5kg	2RS	K	
		小計	125kg			
	玉ネギ		10ダルニ	6RS	S．D	
	ホーレンソウ			15.75RS	S．D	
	ジャガイモ（アルー）		30kg	2.5RS	S．D	
	里イモ（ピラル）				S．D	
	玉ネギ（葉つき）				各所	ニンニクに近い常用野菜
	カボチャ（パルシ）				C	
果物	みかん（スンタラ）		10kg	5RS	各所	プレ季の唯一の果実
果物	レモン（カガデュー）			1～2RS	各所	

献立の例

	朝	昼	おやつ	夕	夕食後	特記
Ⓐ 3／25	紅茶 砂糖 粉ミルク	マトンカレー マトン玉ネギジャガイモ米ダルスープ	ヨーカン カリン糖 緑茶	チキンカレー ニワトリ米ダルスープ 生野菜サラダ	レーズンケーキ ジン ロキシー おかき	チャインプール休養日 キパのバースディパーティー
Ⓑ 3／31	紅茶 砂糖 ミルク	ヤキソバ ガンダキヌードル 中華スープ他	紅茶	ダルカリ・ダル・ハテート (野菜カレー)	紅茶	普通のネパール風定食
Ⓒ 4／11	紅茶 砂糖 ミルク	緑茶 クイックライス弁当 お茶漬のり	ケーキ 紅茶	天プラ 冷ヤッコ なめこのみそ汁 御飯	紅茶	BCでの食事
Ⓓ 4／13	ラーメン わかめ 粉末タマゴ	ビスケット チョコレート フルーツ缶	フルーツ缶など	ワンクイックライス 酢豚 みそ汁 守口漬．塩辛	紅茶	C1での食事
Ⓔ 4／22	紅茶	信州ソバ ひじき ケーキ	パン ゼリー	ハンバーグ 羊のレバーステーキ 豆腐のみそ汁 御飯	紅茶	BC．休養日羊がBCに入る。ひじきは井関氏がつくる。レバーが豪華。
Ⓕ 4／27	ラーメン わかめ．卵 (粉末) 茶	フルーツ缶 チョコレート ヨーカン サラミ ビスケット	お茶漬のり スープ	ワンクイック 赤飯 クノールスープ 茶	コンデンスミルク	アタック日昼飯はのどを通らず。

会　計　報　告

◎収　入	総　額	¥ 5,315,177＋$ 499		
内　訳				
○隊員負担金（5名）		¥ 3,168,000	$ 249	
○学士山岳会員寄附		¥ 1,234,000	$ 200	※
○学内寄附（職員，卒業生）		¥ 272,000		※
○一般寄附，雑収入		¥ 640,877		※
◎支　出	総　額	¥ 4,693,842		
内　訳				
○国内費	小　計	¥ 1,741,327		※
装　備　費		¥ 189,230		※
食　糧　費		¥ 86,203		※
医　薬　費		¥ 4,700		※
梱包輸送費		¥ 16,610		※
保　険　費		¥ 157,189		
事　務　費		¥ 117,655		
航空　運賃		¥ 875,000		
隊荷空輸費		¥ 294,740		
○国外費	小　計	¥ 2,944,730（注1）		
登　山　料		¥ 195,600		
人　件　費		¥ 823,550		
滞　在　費		¥ 204,600		
キャラバン費		¥ 109,840		
現地装備費		¥ 112,350		
現地食糧費		¥ 215,010		
運賃輸送費		¥ 1,108,800		
通　信　費		¥ 7,130		
関　　税		¥ 67,850		
エイジェント手数料		¥ 100,000		
◎差　引　残　金（注2）	合　計	¥ 7,791＋$ 3,003		

（注1）平均換金レート　243.28円／ドル
（注2）残金は秋のニルギリ南峰隊に引継ぐ
※　現物寄贈のあったもの

ニルギリ南峰（6839m）

II部 ニルギリ・サウス

ポストモンスーン期

今にも崩壊せんばかりの巨大なセラックが進路を阻む

複雑な下部アイスホール帯はさながら迷路のようだ、ルートの選択が困難な上、
セラック崩壊の危険に満ちている

◀モレーン堆(アイスホールへの下降口のコル約4300m)よりニルギリ南峰を仰ぐ。 青き処女峰はどこまでも美しい

▼ニルギリ南峰頂上(6839m)
10月10日14時15分紺碧の空の中、とうとうあこがれの頂上に全員で立つことができた。
右より師田、三井隊長田中、藤松副隊長（前列）吉田（後列）、加藤の各隊員

雪壁を越え、頂上直下に全員が立った。右の鋭峰は東南峰

アンナプルナⅠ峰（８０９１ｍ）は毎日見る事ができ、その夕焼けに染まる姿はすばらしいの一言につきる。　登っても登っても相変わらずの高さと大きさでそびえたつジャイアントであった

最後の雪壁（60m・60度）を登る三井隊長。この雪壁を越すと頂上まであとわずかだ。背後の東南峰は眼下となった

登山活動を終え、ベースキャンプに集結した全メンバー前列左より吉田、キパ、藤松副隊長、サーダー、三井隊長、後列左より師田、カンチャマン、アン・ツェリン、田中、ダワ・ギャルツェン、加藤、リエゾン・オフィサー

第II部　NILGIRI SOUTH

(6839 m)

——ポストモンスーン期——

ニルギリ南峰登山実行までのいきさつ

三井　和夫

ニルギリ・ヒマールへの登山計画は、一九六七年信州大学ネパール国踏査隊との出会いより始まった。「個人的記録で終わらせる事なく、今後行われるべき信州大学の海外遠征の第一歩として、長期的な見通しの上に立って、計画を進め、本格的な遠征の為の偵察、ネパールにおける体験を得る」との意欲的な目的をもって、同年九月、隊荷と共に、横浜から、船でセイロンを経由してインドへ渡り、陸路ネパールに入国した。

小川・米倉隊は、ガネッシュ・ヒマール南面から、ラプサンカルボ、パビールの偵察を行い、ガネッシュクンドの確認をした。

佐藤・望月隊は、一九五一年のフランス、アンナプルナI峰隊と、同じくミリステリィ・コーラからニルギリ中央峰、南峰の東面、ティリッオの西面の偵察を行った。この踏査隊は、以後の信州大学の海外遠征の出発点となっている。

一九六八年八月、この偵察結果をもとに、パビール峰と、ニルギリ中央峰、南峰の登山計画が進められた。ネパール政府は、一九六四年から、全面的に登山を禁止していたが、一九六八年一一月に、翌年から、ニルギリ南峰を含む三八座に限り入山許可を発表した。勇躍、ニルギリ中央峰の登山計画は学術調査を含む一一名で隊が組織され、長野県山岳協会、日本山岳協会の推薦を得て、一九六九年五月、一九七〇年プレモンスーン期の遠征許可の申請をした。ネパール政府は、申請書を第一位でリストアップしていたが、同年一〇月明確な説明をせず、他の山を選ぶようにとの連絡をしてきた。

こうして、一九七一年プレモンスーン期のアンナプルナII峰に転進した。

ちなみに一九七〇年一一月に、スペイン、バルセロナ隊がニルギリ東南峰に初登頂している。

以後、ニルギリ・ヒマールは、再び閉ざされ一九七八年の解禁を待つことになった。

ニルギリ南峰へは、一九七一年西面からルート偵察を行い、七三年日本山岳会信濃支部、アンナプルナI峰隊の医師として参加した学士山岳会員の新谷により、ニルギリ中央峰と南峰との間のアイス

フォール帯のルートが再確認された。

七四年から七六年は、カリガンダキ地域への外国人の立入りが禁止となり、七六年秋この処置が解除され、加えて、新規に登山許可範囲を拡げるとの情報を得て、ニルギリ南峰への遠征隊を組織し、長山協、日山協の推薦を得て、七七年二月に、七八年春のニルギリ南峰の登山許可を申請した。しかし、ネパール政府より、他の山を選ぶようにとの連絡で、ナンパ東南峰に転進した。

七八年一月、登山関係の所管は、外務省から観光省に移管され、新たに、登山許可峰を発表した。この中には、ネパールとのジョイントで許可される峰として、パビール峰など、また、外国隊に許可する山として、ニルギリ南峰をも含んでいた。

同年三月、ナンパ東南峰（ジェティ・バフラニ）隊はカトマンドゥに集結した。その時、観光省において、同時期のニルギリ南峰にも許可が下りているのを知った。これは、七七年二月の申請書がまだ生きていたためだ。さっそく現地で討議した結果、春から秋へのシーズン変更が可能であり、金銭面、隊員など、困難はあるが、推進する事にした。

思いもかけない状況の中で、ニルギリ登山は実行に移される事になった。

この遠征隊の誕生した経過は、長山協、日山協、外務省、駐ネ日本大使館の暖かい心情と積極的な支援を受けた賜物であり、また、観光省の開放的で好意ある姿勢はいつまでも心に残る感謝の気持ちで満たしてくれた。

ナンパ東南峰遠征から、カトマンドゥに戻ると、日本では、実行委員会が数度開かれ、六月下旬には、隊員も決定した。

七月一日、ナンパ隊を含む四隊に対し、観光省は、三年間の入国禁止と、五年間の登山禁止を通達した。七月三日、罰則は、隊長の五年間の登山活動の禁止に止まる旨発表された。ニルギリ登山は、暗礁に乗り上げてしまい在ネ三隊員は、動きがとれないまま、途方に暮れてしまった。ＨＡＪの菊地氏を通じて、ニルギリ南峰の許可が継続している事を確認し、新たな決意のもとに再度推進していく。訪日中だった、エージェントのランジャン氏にまでペナルティーが及んだらと、心配されたが、それもなく、山田隊長名でなされた申請書を三井に変更し、登山が可能となった。

在ネ三名は、七月中旬、現地解散し、日本では実行委員会、隊員三名が中心となって、八月中旬隊荷の発送を済ませた。八月二五日隊員三名がカトマンドゥに到着し、喜びのうちに、祝杯をあげることができた。

ニルギリ登山は、幾度か計画され、細部にわたって検討されていた。本格的な学術調査隊として、組織された一九六九年隊は、実現できなかった。以来九年が過ぎ、当時実行委員会に参加していた人達は、今回隊員として参加できなかった。その間にネパール・ヒマラヤの登山は、受け入れ側の態勢が整い、本来のエクスペディションのもつ探検的要素は消え、我々も日本の山と同じ意識でヒマラヤに登れるようになった。

長い間の机上の計画、また偵察は、ジェティ・バフラニ遠征の段階では誰も想像できなかった。まさに、突発的ともいえる誕生であった。一年に二度の遠征など単一の大学山岳会では以前には想像もつかない事に違いない。

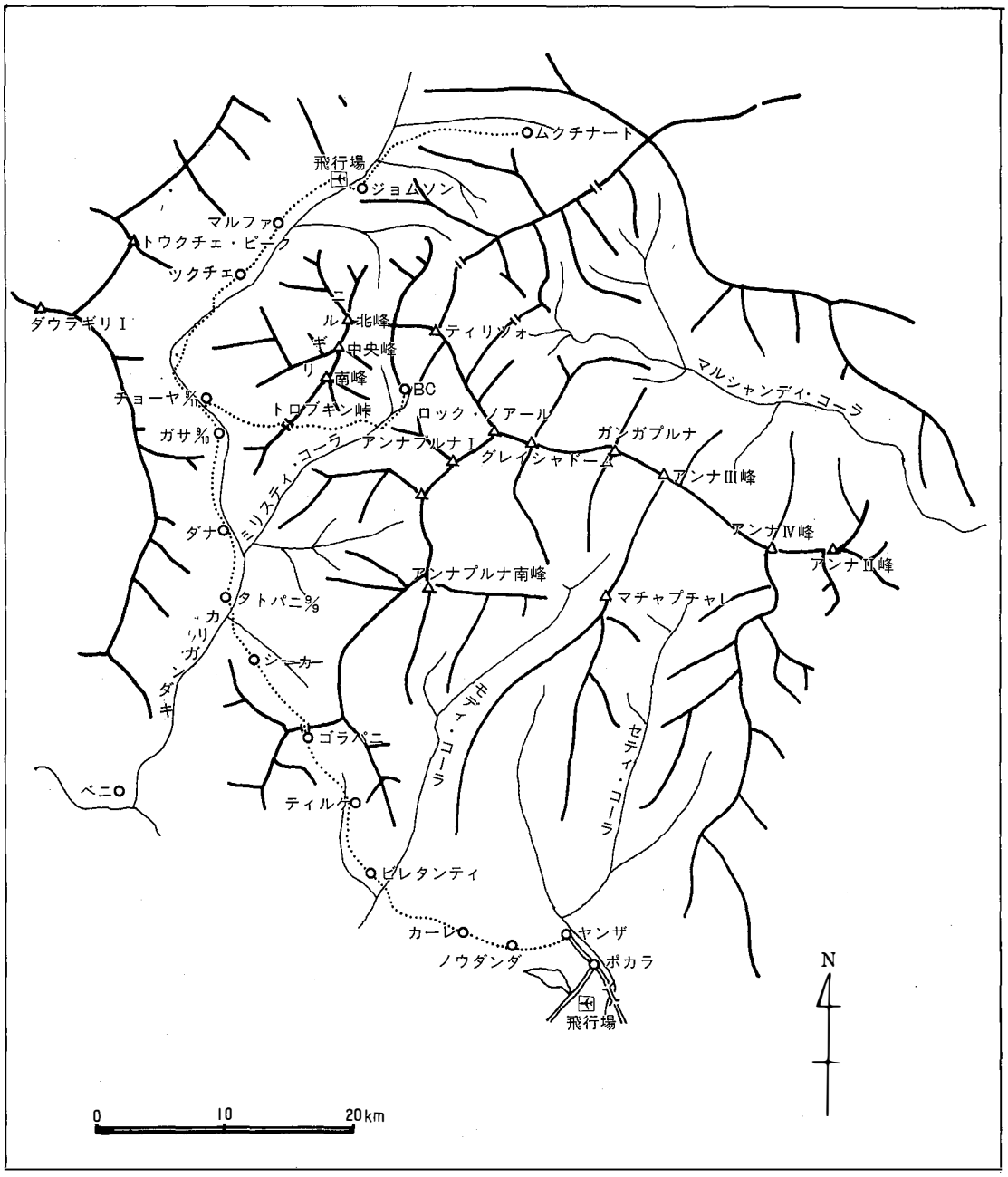
その好機を逃さなかったネパール内での対処（シーズン変更）は勿論だが、ネパール観光省の受け入れ態勢が万全であり、日本でのバックアップがあったればこそ初めて可能性をもった。

実行委員会を中心に組織づくりされ、ネパールと日本は太いパイプで結ばれた。一九七八年秋には、長野県は国体開催県として登山部門では秋の時期に海外遠征は自粛して遠征を中止し、積極的に国体に参加した登山隊もあった程であった。そんな時期に我々は春、秋と続けて遠征を行った。春の場合もかなり議論になったが。

当然信大に対する反発は生まれる。これは当然とも言える。しかし、我々の好機をよく理解してくれた、長山協の寛大な処置には本当に感謝している。

こうした精神面でのバックアップが登山を成功に導いた事と信じている。

ニルギリ南峰キャラバンルート概念図



遠征隊の概要

隊の名称

一九七八年　信州大学ニルギリ南峰登山隊

THE NILGIRI SOUTH EXPEDITION OF SHINSHU UNIVERSITY 1978

遠征の目的

中部ネパールニルギリ南峰（六八三九m）登頂

遠征の期間

一九七八年八月二十四日～一九七八年十月二六日

隊員の構成

隊　長　三井　和夫（26）農業

副隊長　藤松　太一（27）菅平中学校教員

隊　員　吉田　秀樹（24）信大人文学部学生

師田　信人（23）信大医学部学生

田中　誠司（23）信大農学部学生

加藤　喜章（19）同　右

シェルパの構成

サーダー　アン・テンバ（ナムチェ）

コック　アン・ツェリン

キッチン・ボーイ　キパ（バーレ）

メイル・ランナー　カンチャマン・ラマ（タマン）

ウッド・カッター　ダワ・ギャルツェン

リエゾン・オフィサー

カマル・ドゥンガーナ

隊の構成

隊構成は、当初隊長であった山田が不参加を余儀なくされたため実行委員会では、隊長の適任者を選考した。しかし急な事であり適任者は見つからず、ネパールに長くいたという事で三井が急拠隊長になったが、力量不足のため隊員はかえって主体的に行動できたようだ。山田隊長は、登山隊を小人数でラッシュアタックで登る隊を考えていた。多くても五名でシェルパレス。コック、キッチン・ボーイも雇わずメイル・ランナーがポーターのマネージメントを兼任するという考えだった。このような形態は、ロカピのイングランド隊、アンナプルナⅠ峰隊などにある。

ニルギリ隊はＯＢ二名、現役四名の六名で構成された。登りたい人間が六名集まったわけだ。初めて顔を合わす人もいたし、まして山行を共にした事もない人と登る事になる。でもこれはたいした問題にはならない。皆登るんだという前提で共通の意識が生まれている事は相互に理解していた。

この六名でＢＣ以上はシェルパは使わず、自分達だけで登り、しかも全員で頂上を目指した。

準備、キャラバン、登山期間

ネパールと日本でそれぞれ進めた準備は、残留装備を使い、また他遠征隊より格安にわけていただいた。そして日本からは、準備をはじめて三日間で一気に隊荷の発送を完了した。これは、日本での合宿の延長のようにスムーズに運んだ。ネパール到着後食糧担当の隊員一名が到着していなかったため、買い出し表をつくりなおし、食糧担当の隊員は四苦八苦した。そして二七日から準備にとりかかった。通関は八月二九日で、九月二日まで朝早くから買い出し梱包と明け暮れた。これ程忙しいとは思っていなかった。それは手続き上の書類が不備であって、トランシーバー使用許可証取得に丸一日かってしまった事などにもある。他の遠征隊は箱につめてきれいにパッキングしていたが、我々はネパール製竹カゴが約半数になり、梱包の改善点はまだまだあった。

しかし、キャラバン中は支障なかった。

ポーターの手配は、ポカラのヒマラヤンホテルに依頼しておいたものの遠征隊が多く、人出不足が予

想されたが予想を上まわる人が集まり、西ネパールとの違いをまのあたりにする。楽しいキャラバンとなり、ヒルの被害も少なく、シェルパまかせの日々となる。チェックがおろそかになった。

でも予想外の事もあった。トロブギンのコル越えの時、ぬかる道で、ポーターが二分され隊荷もバラバラになった。翌日、ポーターは一一人を残して全員帰るといい出した。大変な難関越えで、ポーター達はチョーヤでの約束を反古にしたのだ。一一人のポーターは、強い人は六〇キロも背負い期待に答えてくれた。

キャラバンでは、シェルパ達の意見を積極的に取り入れたが、サーダーがリーダーシップの面で問題が残った。

一七日にすべての隊荷はBCに集結した。

BC建設後はルート偵察、ルート工作、荷上げ、C1建設、荷上げ、C1入り、これより並行して、ルート工作、荷上げを行った。C1建設後、アイスフォール帯をぬけてC2を作る予定だった。が、予想に反し一〇〇〇メートルに及ぶアイスフォール帯は難関であり中間地点にC2を建設することになった。

下部ルート工作は、安易に考えすぎていた。ルートの偵察をせずフィックス・ロープをどんどんのばしてついには、抜け出れなくなって回収しなければならなかった。

ルート工作は四名で行った。若い二名はルート工作の前面に立つこともなく荷上げの役を、しっかり引き受けた。しかし、この二名のコンディションは上部にいくにつれて確実で安定したものであり、積極的にルート工作、偵察に向わせる事はできたのである。これは残念であった。

軽度の高度障害はでたが毎日起床時に心拍数、呼吸数のチェックと就寝前の隊長のチェック、尿、大便の回数を所定のノートに書く事で体調を客観的に判断できるのに役立った。

ルート工作が荷上げに追われるようになった。

六一〇〇メートル地点でデポ品がブロック雪崩に埋まってしまった。この時の状況判断はあいまいで、ブロックが散乱しているところにもかかわらず、こんなに広いのだからと安心しきっていた。被害はフィックス・ロープ二〇〇メートル他を失ったが、いつ落し穴があるかわからないものだ。軽く済んでよかったというべきだ。

ニルギリ南峰と中央峰の間のだだっ広いスタジアムを横断して、北稜からの南峰アタックはもう一か所キャンプがいるように思われ中止した。

リエゾン・オフィサー、シェルパはBCから細かいところに気を配って我々を支援してくれた。
登頂後はC3、C2を撤収して、かつげるだけの装備をもって下ったが、フィックス・ロープの回収はC3より上部は一か所を残して、回収したがアイスフォール帯はそのまま残してしまった。
余裕がなかったのだが、撤収をも考えてフィックス・ロープを張る姿勢が大切だと思う。
C1では、食糧品を焼いた。それでも三〇キロ以上を担いでBCに帰りついた。
ジェティ・バフラニの時は、四〇キロの荷をかつぎ、C1にはヘトヘトで帰りついた。そしてこの疲れはBCでの数日の休息を余儀なくされた事を考えればニルギリ南峰の場合は軽い荷物で下山できたので助かった事は確かであるが、山をできるだけ元通りの状態に戻しておけなかったのは、悔まれる。
七〇〇〇メートル級の山もBC建設からは、日本の山と同様に登る事ができる。

カトマンドゥ

吉田　秀樹

行動概要

八月二五日　藤松、田中、加藤カトマンドゥ着、三井、吉田と合流する。
八月二九日　隊荷通関シェルパとの契約終了。
八月三〇日　買い出し開始。
八月三一日　パッキング開始。
九月一日　藤松、サーダー、ポーター・アレンジのためポカラへ先発する。
九月三日　全員、ポカラへ。

懐かしい顔ぶれが日本のたよりを持って来た。いよいよ登山の実感がわいてくる。シェルパ達の意外な要求やら、師田がまだカトマンドゥに到着していない事などで、かなり焦ったがとにかくキャラバンを始める準備ができた。

八月二五日

今朝、師田より速達があり、「イランでパスポートを盗まれたので、カトマンドゥに帰るのは今月の末頃になる」との事。三井、吉田それにキッチン・ボーイの予定のキパと三人で空港へ迎えに行く。藤松、田中、加藤の懐かしい顔。事務の都合上、三井はエキスプレス・ハウスに、他はツクチェ・ピーク・レスト・ハウスに泊まる事にする。

八月二六日

午前中は全員でエージェントのランジャン氏にあいさつに行く。午後よりミーティング。日本、カトマンドゥでの経過報告とこれからの予定、ついているはずの日本からの隊荷がまだついておらず若干焦

る。

八月二七日
やっと隊荷が届いた連絡を受ける。だが通関はあさってとの事。今日は予定のシェルパ達がきてメンバーを仮決定した。

八月二八日
インポートランセンスを取る。いよいよあすはシェルパとの契約後、準備を始める事ができる。

八月二九日
朝エキスプレス・ハウスに全員集合。が、キッチン・ボーイのキパとウッド・カッターのアン・ギャルツェンが来ていない。キパはプレ期と同じ程度の支給装備、金ではノット・アグリーであるとの事。どうも皆の要求を代弁しているようで、こちらも支給については大幅に考えを変えざるを得ない。キッチン・ボーイ、サーダー、メイル・ランナーはプレ期に参加したシェルパであり、突然の事なので皆面食らってしまった。結局通関後支給装備の現物を見せ、その後再交渉する事となる。夕方、アン・ギャルツェンがダワ・ギャルツェンに変わり全員来る。彼らの執拗な喰いさがりで羽毛服代、軽登山靴代も支払う事となる。とにかく契約は終わりその後皆で会食した。今日は通関だけしかできず、かつ疲れた。

八月三〇日
朝より買い出し開始。キパが今日も来ていないのが気になるが、昨日の一〇〇〇ルピー紛失orサギ（？）でいろいろ走りまわっていたらしい。買い出しは野菜を除きほぼ完了。

八月三一日
朝より隊員だけでパッキング開始。ホテルの中庭に荷物を全部出し、BC以上で使用する物からつめていく。三井さんより電話でリエゾン・オフィサーとともに昼頃こちらへくるとの事。リエゾン・オフィサーに支給装備を見てもらう。パッキングの方は暑さやらにわか雨やらでなかなかはかどらず暗くなるまで作業をつづけた。シェルパの保険料が予定の半額（保険金額の一パーセント）ですんだので夜は

ツクチュ・ピーク・レスト・ハウスの中庭でのパッキング

少し贅沢な食事をした。

九月一日

朝七時すぎよりパッキングの開始。藤松さんはサーダーと共にポーター・アレンジのためポカラへ先発した。午前中の暑さはものすごかったが昼すぎにはBC以上のパックを終る。午後、キャラバン中に使うもののパックはスムーズに行った。後は明日の野菜の買出しだけだ。若い田中、加藤も今日は軽く疲れたようだった。トランシーバー通関。

九月二日

野菜を買い出し、最終パッキング完了。個装整理等。明日はツクチェ・ピークをねらう長井山岳会隊と一緒にポカラへ行く事になる。

ポカラへ

吉田　秀樹

九月三日

何ごともギリギリにならないとできないのが悪いくせらしい。朝のトラック積み込み、個人装備の整理などで非常にあわただしい。ポカラのヒマラヤン・ホテルに泊まる。

九月四日

リエゾン・オフィサーがドクターがまだいない事を心配している。結局、長井山岳隊とキャラバン出発日がズレるという事もあり一日待って五日出発とする。

ポカラからチョーヤ

加藤　喜章

キャラバン出発

モンスーンの影響で毎日雨に降られたが、キャラバンは予定通りに進んだ。メイン街道だけあり、その賑わいといい、春の西ネパールと較べれば雲泥の差だ。歌に、踊りに、酒に、とネパールの風物を楽しんだキャラバンだった。

九月五日　ポカラ→ヤンザ

五九名のポーター・アレンジを終えてからゆっくり出発する。かなり道草をしながら歩いているのに、すぐに一番後ろのポーターに追いついてしまう。女のポーターだ。そういえばアレンジの時、一六才から二〇才のまだ若い女の子が幾人もいて心配したものだが、三〇キロ以上もの荷物を平気で運んでいる姿には驚くばかりだ。突然強い雨が降り出したので、ちょっと茶屋で休もうかと言っていると、そこがもうヤンザの村だった。今日の行程は短いが、彼らは先行した隊以上には歩かないからしかたがない。キャンプ地は河岸段丘の高台にあって、豚や馬がたむろするのんびりとした所だ。シェルパ達がミルクティーを作って待っていてくれたのにはまいった。

九月六日　ヤンザ→カーレ

田園の広がるヤングディ・コーラの道はすばらしい。あちらこちらに水牛や馬が遊んでいる。ところがノーダラへの登りにかかると、また急に雨が降り出し、うわさに聞いていたヒルが現われて来た。どうしたものか、僕ばかりやたらと血を吸われる。おまけに今日のキャンプ地ときたら、草原で湿気が多いのでたまったものではない。ヒルアレルギーになってしまう。ところで、ノーダラやカーレの村は広々とした尾根上に点在していてなかなか美しい。

キャラバン出発の朝

九月七日　カーレ→ティルケドゥンガ

靴下の下にジャージを入れてガムテープをはり、地下足袋をはいてまたガムテープをはるという周到さでヒルに備える。一日中雨だったのと、ヒルに気を取られていたために風景を楽しむことをすっかり忘れてしまった。長くてしんどい一日であった。

九月八日　ティルケドゥンガ→ゴラパニ

暑い暑い。ギラギラとした太陽の中の登りと、ウレリからは日本では見た事のない奇怪な温帯多雨の樹林に痛めつけられた。夜は峠の茶屋の姉妹や、シェルパや、ポーター達が集まって、飲んで、歌って、おどって、楽しい時をすごした。

九月九日　ゴラパニ→タトパニ

ダウラギリが見えるかと期待して目をさますが、あいにくの雨でがっかりさせられる。ゴラパニ峠からはカリガンダキに向ってひたすら下っている。竹で編んだ壁に草をかけただけの茶屋では、一一才のかわいい女の子が店を取り仕切っていて感心させられる。タトパニでは早速温泉へ行ってみた。なんのことはない、プールにたまった湯はきたなくドブみたいだ。それでも執念で入ってやった。

九月一〇日　タトパニ→ガサ

ダナを過ぎると道は両岸に別れる。たまたま僕は左岸を歩いてみたのだが、茶屋もなにもまったくなく、おまけに登り下りが激しい。対岸のなだらかそうな道を歩く人々がうらめしく感じられた。折からの雨でただひたすら歩き、ガサへはポーター達よりかなり早く着いてしまった。

九月一一日　ガサ→チョーヤ

カリガンダキも水量が幾分減ったように感じられる。日本のどこかのハイキングコースのような静かでのどかな道をゆっくり歩いていくと、知らぬ間にレテへ渡る大きなつり橋に出る。チョーヤはレテから少しばかりの所にある。今日のテントサイトは村のはずれにある。とても広々とした川原である。村の子供たちが何人も遊びに来て楽しい。雲が低くたちこめているが、ダウラギリがぼんやりと見える。明日からはいよいよキャラバンも後半に入る。むずかしいキャラバンになることだろう。

チョーヤからＢＣ（ベースキャンプ）

田中　誠司

行動概要

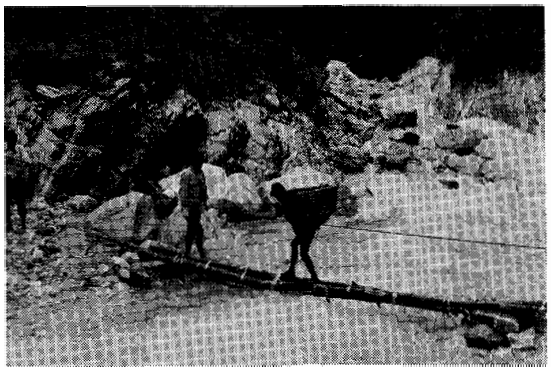
九月一二日　曇り後小雨
チョーヤ→デウラリ（最後の部落）→タンデュン・コーラ→トロブギン西尾根三三〇〇メートルのコル

九月一三日　霧後雨
Ｔ・Ｓ（テントサイト）→トロブギンのコル四三〇〇メートル

九月一四日　雨後霧雨
Ｔ・Ｓ→フン・コーラ→ミリスティ・コーラ、ポーターは全員下れず、途中の岩小屋で夜を過ごす者が出る。

九月一五日　曇り後雨
昨日の行程が長かったのと寒さのためポーターがストを起こす。
先発は藤松、吉田、コック他四名でミリスティ・コーラを遡りＢＣ予定地のアンナプルナ氷河とニルギリ氷河のモレーン合流点先の台地まで行く。
キッチン・ポーターをいれて一三名以外を解雇し給料を支払うので急拠、金を預かっている藤松の所へ田中、加藤が伝令に走る。夕刻までに支払を終え、本隊は昨日とおなじＴ。Ｓ泊り。吉田、コック、キッチン・ボーイ、ポーター四名は岩小屋に泊まる。

九月一六日　快晴後曇り
三井隊長ＢＣ決定のため先発。ティリツォの大障壁下の河原　四〇五〇メートルにＢＣを決定。ポー



ダンデュン・コーラには自作の丸木橋をかけてポーターを渡した

ター一〇名はミリスティ・コーラ沿いのTSより往復。隊荷の管理はシェルパが行う。

九月一七日　快晴後曇り

休養日。隊荷がすべて到着する。アンナプルナI峰をねらうアメリカ女性隊の表敬訪問をうける。いよいよ街道筋より離れ、問題の峠越えである。ミーティングをし浮かれた心をひきしめる。先行のアメリカ隊のおかげで二つの架橋は少し手をかけるだけですんだが、四三〇〇メートルの峠越えの際の悪天候、泊場決定の不手際で、ポーターがヤル気をなくして一三名を残して帰ってしまう。BC地の選定などもあり、隊員は焦るが、結局、ミリスティ・コーラ左岸のサイド・モレーン上の岩小屋を中心にBCを決定しそこまで荷物をピストン輸送してキャラバンは終った。

九月一二日　曇り後雨

出発前、ダウラギリが顔を出した。「凄いなあ」と感激する。カメラに収めようとしたがすぐ雲に隠された。チョーヤの子ども達が物欲し気な顔をして川原に張ったテントの回りに寄ってくる。名を聞くと、ゴーチャン、セルチャン、トラチャン、バタチャンの姓を持つタカリー族ばかりだ。藤松、田中、加藤、カンチャマン、ダワはルート偵察の為先発する。パンブー・コーラを渡るとキャラバン中最後の部落へ入る。ここでは放牧が行われている。畑の中を歩いたりして、台地上の道を登って行く。ここは、レテへの道中で対岸に見えた崖の上に当るわけだ。そばの花がきれいに咲いている。深く谷が切れ込んでいて、崖の腹を縫うようにして道が続く。竹の茂った斜面を下るとタンデュン・コーラへ出る。アメリカ隊が作ったらしい橋があるが流れにさらされて危い。六メートル程の川幅だが重荷を背負ったポーター達を渡すには深くて流れが速く、橋をかけることにする。シェルパが即席のオノを作って木を切り枝を払おうとするが、時間がかかりそうなので、倒木を集め橋を作ることにする。藤松がアメリカ隊の残した橋を綱渡りのようにして渡り、対岸にルートを捜す。初めがとても急でその上ぬれた岩と土でいやらしい所だ。橋ができ、それにロープを張って手掛りとする。ポーター達が追い着いた。いやな斜面に五メートル、ロープをたらす。その後は、土砂まじりのガレ場を登る。以前土砂崩れがあったようだ。竹の混じる林の中を急登は続く。踏跡はしっかりついている。相変わらず天気が悪く眺めはさっぱりだ。傾斜が緩くなりシャクナゲの林を抜けると漸くコルになった原っぱに出る。川から四時間の登りはきつかった。今日の

天場だ。マキはその辺りのかん木が使える。水も登ってきた反対側斜面を下ると取れる。焚火で暖をとりミルクティーをすする。田中、加藤は富士山に登ったことがないので最高到達点だとはしゃぐ。三三〇〇メートルあるのだ。ポーター達は支給した工事用のビニール・シートを張って寝ぐらとする。カゼをひいたらしいポーターが薬を貰いに来る。リエゾン・オフィサーが付いて三井隊長がまたにわか医者になる。夜がふけても隊員のテント横に構えたポーター達は歌ったりして騒がしい。この寒さのため歌でも唄わない限りヤリきれないのかなあと思う。

九月一三日　曇り後雨

きじ場となったテントサイト横の丘からダウラギリ、ツクチェ・ピークが見えた。朝霧で靴もグッショリ。七時に田中、加藤は先発する。今日は四三〇〇メートルのトロブギンのコルを越す予定。尾根を急登する。三七〇〇メートルで森林限界となり灌木まじりの草付を登る。ダウラギリが大きくて迫力がある。岩がゴロゴロしてくると、踏跡は北へ巻くように続く。休んでいると半袖では寒い。キッチン・ポーター達につづいていつものようにリエゾン・オフィサーが先頭集団に入ってくる。三九六〇メートルにはケルンのようなものがあった。コックやキッチン・ポーター達がそれに白い布を巻いたり、摘んできた草や花を供えて何やら祈っている。アンナプルナの神に無事を祈っているそうだ。霧が辺りを包んで先が見えない。草原の中を登るとカルカが点在している。霧が晴れ陽が差したがすぐに曇り出し、そして雨が降り出した。広いコルに出た。南へ続く尾根をたどればピークがありそうだ。テントを張るには良い所だ。キッチン・ポーター達は先へ進まずカルカを利用してシートを張っている。一一時半雨の中後続を待つ。二時半頃ポーターが全員揃う。水は少し下れば取れる。四三〇〇メートルのトロブギンのコル。

九月一四日　雨のち曇り

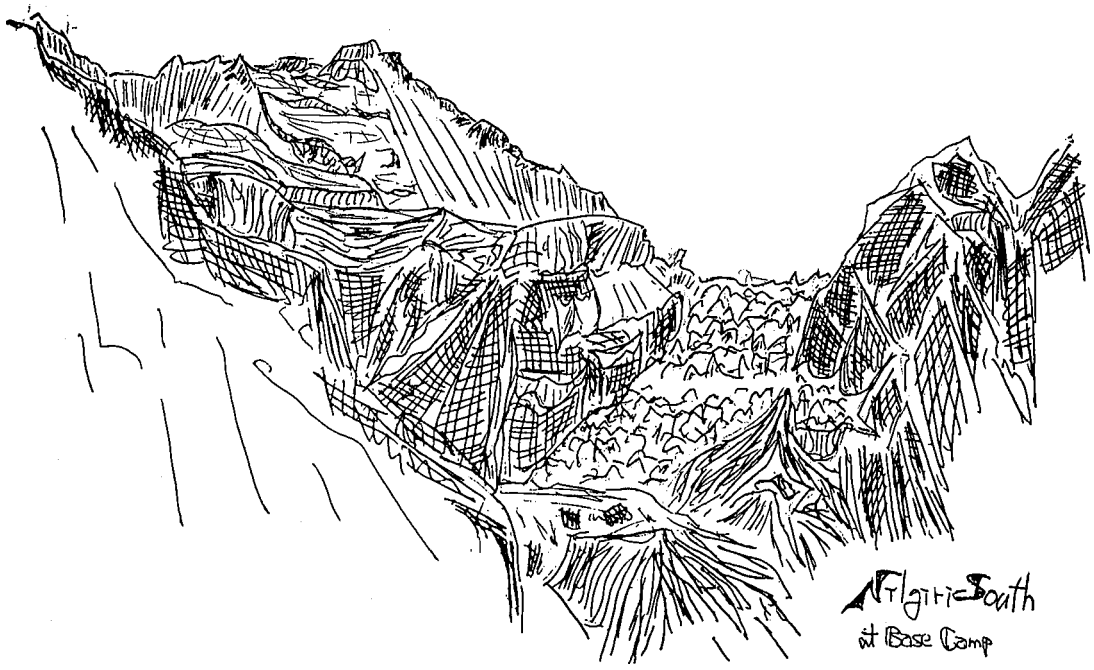
夜中、風雨がひどくテントが潰れる。朝になって風は収まったものの雨は残った。吉田、加藤、キッチン連中が先発。ポーター達はカルカを利用して泊まっていたが、朝の寒さとツァンパを食べてからという次第で出発が遅くなる。グラダラと稜線をたどる。晴れていれば気持の良い所だろう。リエゾン・オフィサーのドゥンガーナさんが三井隊長にいろいろ話しかける。ネパールの国内情勢から国際問題へ果ては革命論までぶっていた。彼は隊員の誰よりも英語力があるので隊長も「疲れるよ、オイ、代って

トロブギン峠手前のキャンプサイト(1300m)で　テントも寝袋もないポーター達にとって、冷たい小雨の中での一夜はさぞつらいことだろう。寒さに耐えるための歌声が一晩中続いた。

くれよ」と悲鳴を上げたほどだ。けれど、食事の時など座の雰囲気をもり上げて楽しくなるのは彼のなせるわざだ。それにドクター問題でも親身になって心配してくれるいい人物だ。ケルンがあってミリスティ・コーラ側の斜面へ入るとトラバース気味に草付を行く。これが雨ですべり易くて歩きづらい。カルカがあるところへ来ると羊を放していた。番犬を連れた羊飼いもいた。フン・コーラ手前の沢では、滝の下にロープを張り、ポーターを順々に渡す。シェルパは力のあるポーターに荷をまかせ空身で渡る。ポーター達は少なくとも二、三人のグループになって行動している。なおもトラバースは続き、ミリスティ・コーラへの下り道はいっこうに現われない。涸沢を渡ると斜面が緩くなってカルカもある草原へ出る。先が崖となって右手の急斜面の踏跡をたどる。これが下り道なのだ。地下足袋が土をかんでとても滑べる。一時間ほど下るとヤブを漕ぐようになる。その後しばらくするとガラ場の中へ出る。上にはとても大きい岩穴が口を開けている。雲が切れてやっとのことミリスティ・コーラが見える。ルンゼを下り、とげをもつブッシュの多い河原へ出る。先発隊は左岸に天場をとった。コーラは水量が多く轟音をたてて流れている。少し上流にアメリカ隊が作ったらしい橋がある。ダケカンバでできていてしっかりしている。キッチンは岩小屋を利用している。我々はビャクシンがパッチ状になった草原でテントを張る。今日の行程は長かった。ポーター達が中々到着しないので心配する。日が暮れてから降りて来たポーターにはサーチライトを持って出迎えた。結局、カンチャマンと三分の一ほどのポーターが上の方の岩小屋で夜を明かすことになる。

九月一五日　曇り後雨

八時に朝食を終えたがポーター達が揃わない。九時に先発隊が出発する予定だったがトランシーバが来てないので田中、キパが取りに戻る。川向うのガレ場に置かれたジュラルミン・ボックスの所へ急ぐ。一〇時過ぎに、藤松、吉田とキッチン連中が先発したので、キパはトランシーバを持ってその後を追う。ポーター達が全員揃ったが、昨日の行程が長かったのと寒さのため、今日はBC予定地まで行きたくないと言い出す。三井隊長、サーダー、リエゾン・オフィサーが彼らと話し合いの場を持つ。それほど時間はかからず帰りたい者は帰すことにし、BCまではポーターの中で強い者が往復することでトラブルも収拾する。キッチン・ポーター三名を含めて一三名が今日一往復し、明日二～三往復することになる。それで他のポーターには、昨日分までの支払いを済ませ帰すことにした。先発した藤松が金を持っているので至急連絡しなければならず、田中、加藤が伝令に走った。トランシーバーで一五分ごと三井隊長



と交信して先へ進むが、先発隊がコールに応じてくれないのでイライラする。霧雨の中、左岸の道を川沿いに遡る。モレーンが出てくる。丘になっていて上ったり下ったり、ケルンをたどって進む。雨に変わり寒さも増す。一時になって漸く藤松と交信できる。モレーンの岩かげで待っていると小走りに藤松が下りてくる。先発隊はBC予定地のアンナプルナ氷河とニルギリ氷河のモレーン合流点の先へ入った様子。田中、加藤は三井隊長と先発隊の交信を中継して四時に帰天する。テントを窓口として一人ずつ給料の支払いが行われる。夕刻までには無事終えられた。寒いので隊員、ポーター達もキッチンの火にあたり暖をとる。本隊の夕食はハイキャンプ用のコッフェルを使い、ラーメンとおかきを食べた。

九月一六日　晴後曇り

今日こそベースキャンプへ到着できる。ベースを決定しに三井隊長が先発する。冷えきった地下足袋をはいて、漸く晴れ渡った空のもと、まだ暗いミリスティ・コーラを遡る。踏跡はしっかりしていて危い所はない。対岸にはすごい大きな滝が落ちている。行く手にはティリツォが見える。モレーンに出ると視界が開けた。アンナプルナI、ファング、ティリツォが見渡せる。クッション状の草に寝ころぶと気持ちが良い。今、自分はヒマラヤの懐にいるという実感が湧いてくる。ガラガラのモレーンを行くと緑の湖へ出る。右手はアンナプルナ氷河の舌端が、左

私たちのベースキャンプ（4050m）ティリツオの大障壁真下に建設した

奥にはニルギリの氷河がモレーン堆を作っている。正面の斜面を登って、アンナプルナBCへの道と別れガラ場を登り切ると下に広い河原が広がるようになる。河原を横切り、ティリツォの大障壁の下に、キャラバンの終りを告げるテントを張る。キッチンは岩のひさしを利用して広く作ることができた。すぐ近くには氷河よりながれる小川があり、まきもわずかだけれど斜面のブッシュを利用できる。河原は広くとても明るく、ニルギリの氷河もここから見える。ただ上部は雲に隠れて中々姿を現わさない。逆にアンナプルナはピラミダルなピーク、下部のアイスフォール帯の全貌が見渡せる。まさに絶好の場だ。高度は四〇五〇メートルの別天地。アンナIを目指すアメリカ女性隊の訪問を受ける。

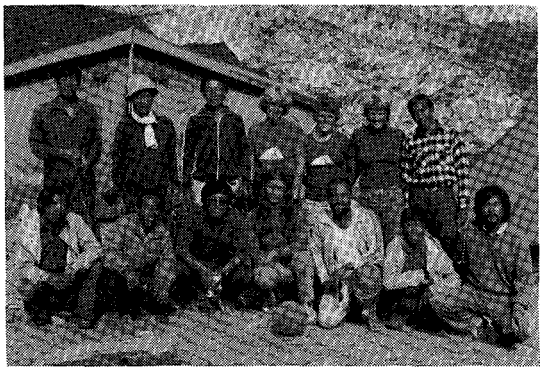
九月一七日　雨後曇り

休養。アンナI隊に昼食に招待されBCまで行く。夜は田中の誕生日の祝いをやる。皆久し振りに大声を出して歌った。

日本の代表とアメリカ女性隊日誌

藤松　太一

ポスト日本隊の数ある中で、我々六名だけがアメリカ女性隊と会う機会を得た。得るのもあたりまえである。歩いて三〇分の所にアメリカ隊のベースがあったのである。我々のテント三つ、一方あちらさんは数えきれない、何といっても一人にテント一つである。GNPの差か。しかし、決して僻まない。こっちに来ても出すものは紅茶のみ、一方あちらはコーヒーにライスにモモと、まるで待遇が違う。一七日、昼食に招待される。この日まだ師田君は来ておらずリエゾン・オフィサーと五名で一二時キッカリに着く。先ほど書いたもので腹を十分つくり、歌など、日本側田中、加藤のUFO。リエゾン・オフィサーのりにのってベニコーバザールダンス。方や、アメリカ側フォークソング。何にせテーブルもあり、ギターもあるという隊。それから外に出、フォークダンス、日本側負けてはなるかと、日本古来の相撲、

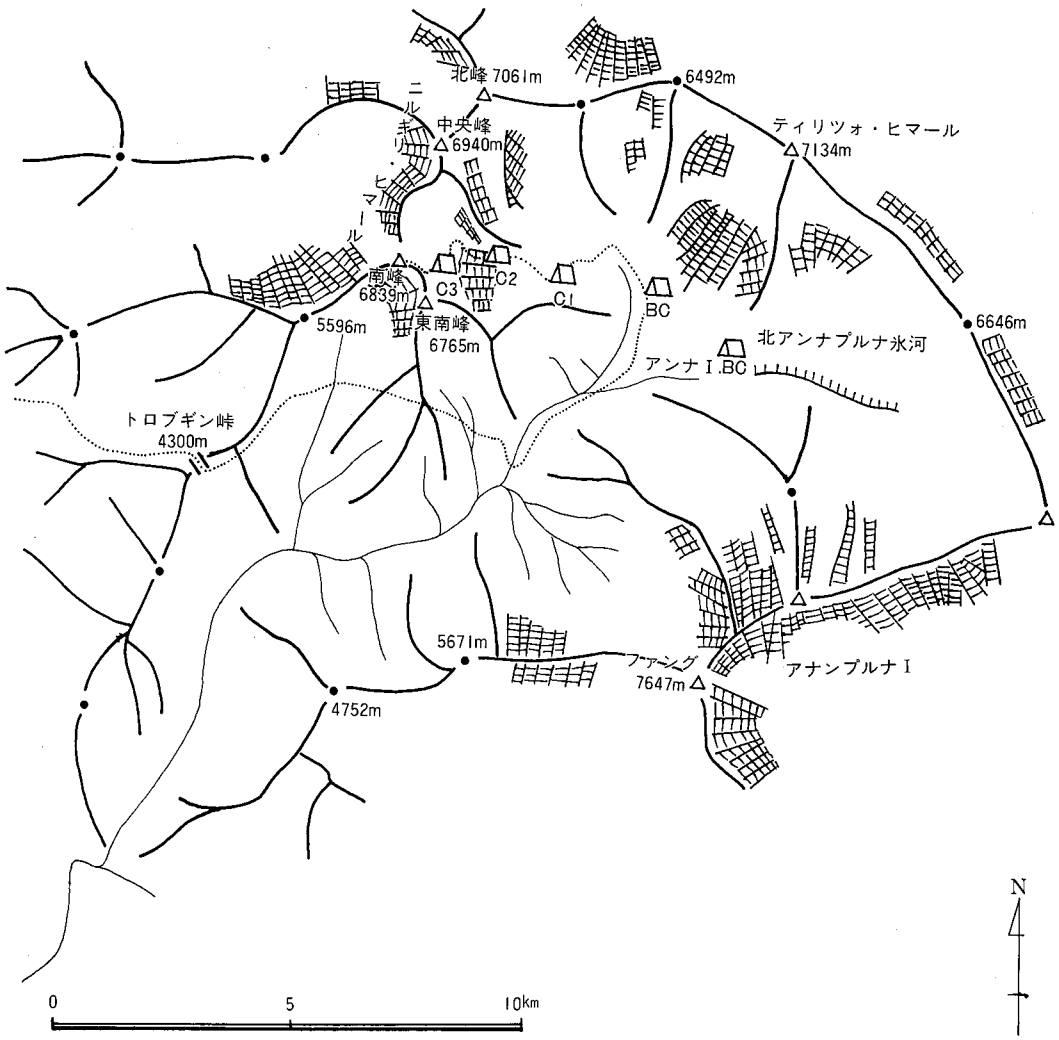


アンナプルナⅠ峰アメリカ女性隊ＢＣにて
前列左より２人目アンテンバ、藤松、ダイアナ、ドゥンガーナ氏、一人おいて三井隊長　後列左より吉田、田中、加藤、マギー、ジェーン、メアリー、女性隊のリエゾン・オフィサー

一番手、三井対ジェーンおばさん、圧倒的な突き押しでアメリカ一勝、次、藤松、下手投げで決めるが円内にあれば負けないでと思いしや、パンツも見えるほどに押し出される。田中君のは忘れましたが、加藤君はサンドイッチ、ダイアナの上にピタリとのりました。勝負はぬきにして楽しかった。しかし、四〇〇〇メートルの上では疲れました。この時、三井はマギーの甲高い声にまいった様子です。ダイアナがトイレに行き、かこい越しに手を振っているのを頭に残し、我々のベースに帰りました。我々が登頂後、何人かが、アンナのベースにかよった人がいたみたいですが、しつこくもトランシーバーで某女性を呼びだしている御人もおりました。とにかく、今回の遠征で、男だけの世界の中で、たとえ顔が、背たけがどうであれ、一つの精神カンフル剤の役割をはたしてくれたアメリカ女性隊の諸氏に感謝したいものである。

ニルギリ南峰の頂を目指して

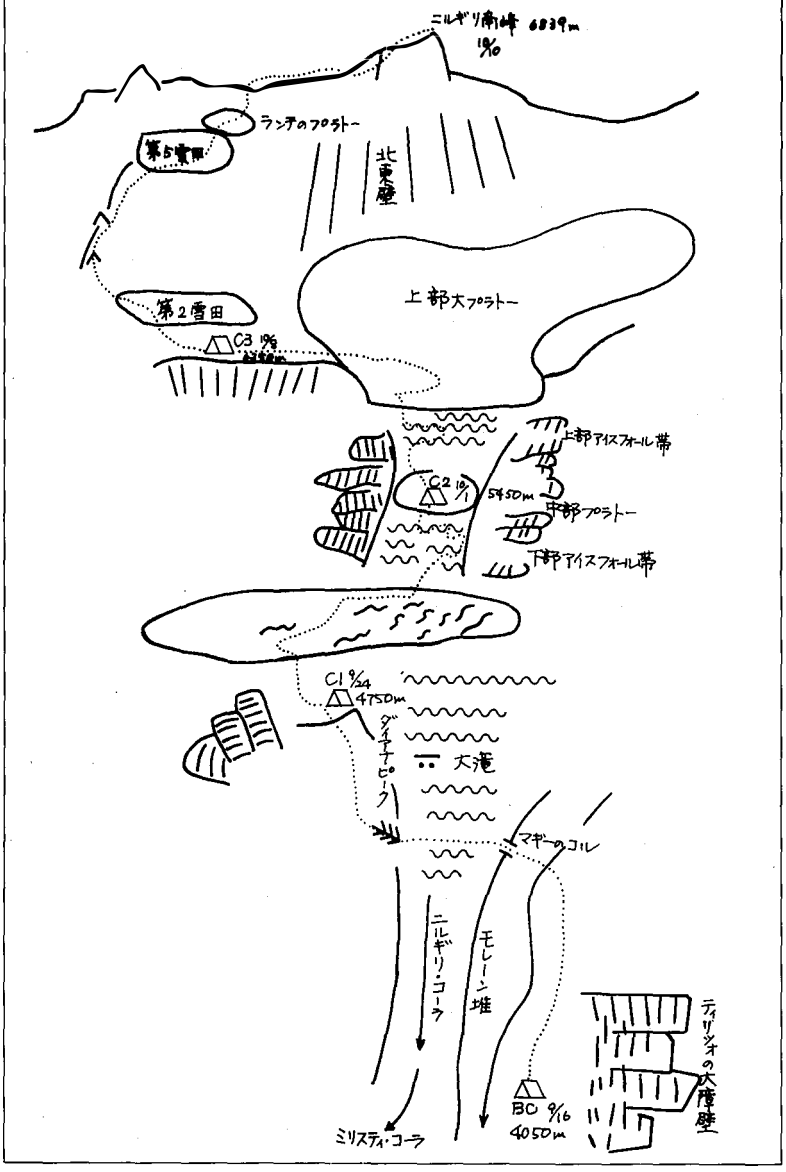
ニルギリ・ヒマール周辺概念図



行動概要

九月一八日　ルート偵察
九月二四日　工作隊C1入り
一〇月一日　工作隊C2入り
一〇月八日　全員C3入り
一〇月一〇日　全員アタック
一〇月一二日　全員BCへ下山

ニルギリ南峰登頂ルート概略図



ＢＣからＣ１

吉田　秀樹

いよいよ隊員だけによる荷上げが始まる。遅れていた師田が加わり見通しは明るい。初めての氷河。岩のような氷に驚くが、その舌端部をトラバースすれば後は一気にＣ１へ高度を稼ぐ。

九月一八日
三井、藤松でルート偵察、氷河舌端部にフィックス・ロープを張る。他は荷の整理。

九月一九日
夜半よりの雪で隊員用テント夜中につぶれる。キッチンのフライもかなりつぶれ、今日はＢＣの整備を徹底的に行った。

九月二〇日
朝方最終荷分けを行い、その後四四〇〇メートルまで荷上げする。途中、小ルンゼにフィックス・ロープを張る時田中が一〇メートルほどすべりヒヤッとさせる。夜おそく師田到着。これでやっと体制が整った。この晩は皆、よく眠れなかったようだ。

九月二一日
個装及び医療品の整理の師田を除き、荷上げ。昨日より重いはずだが皆競うように登る。体調は良いようだ。

九月二二日
全員で荷上げの予定だったが、吉田は足の死んだ爪が痛み大事をとってすぐ引き返す。

九月二三日
全員、沈澱、明日のC1入りを控え、これからの予定等のミーティングを行う。

九月二四日
師田、田中、加藤で荷上げ、他は個装＋αでC1入りし、高度順化とルート偵察をかねて四九二〇メートルまで行く。問題のアイスフォール帯は……、あのように時間がかかるとは誰も予想できなかった。

C1からC2（下部アイスフォール帯）

藤松　太一

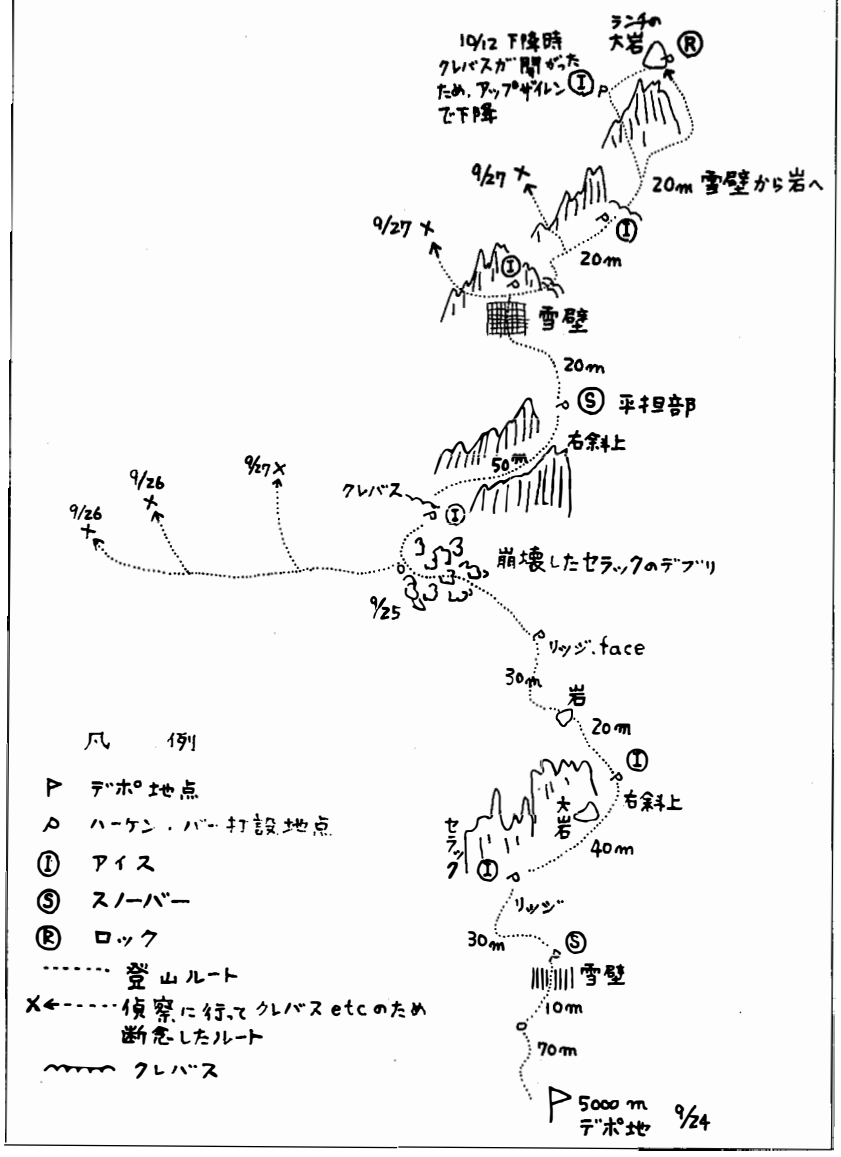
アイスフォール帯への無知を、さらけだしてしまった。フィックス・ロープを張りながらルートを決めて行くなんて……甘い、甘い。翌日、二パーティに分かれてルート偵察。最急傾斜部を右側よりの岩稜にルートを求める事により何とか中間部プラトーへ出れそうだ。C2では皆、若干の高度障害を訴える。

九月二五日
C1の三人でルート工作、五〇〇〇メートルのアイスフォール帯末端より左上へ抜けるルートをとるが、クレバスにはばまれてなかなか高度をかせげず、トラバースばかり。結局五二〇〇メートルまでフィックス・ロープを張る。BCの三人もC1入りし、高度順化のため、五〇〇〇メートルまで若干の荷上げを行う。

九月二六日
三井、師田、加藤で前日のルートをさらに左斜上するが、またもクレバスに阻まれ、結局ルート変更を決める。他は四四〇〇メートルのデポ回収。

九月二七日
三井、師田、藤松、吉田の二パーティでルート偵察、右よりの岩稜沿いに行けば、中間部に出れそう

ニルギリ南峰下部アイスフォール帯ルート図 I



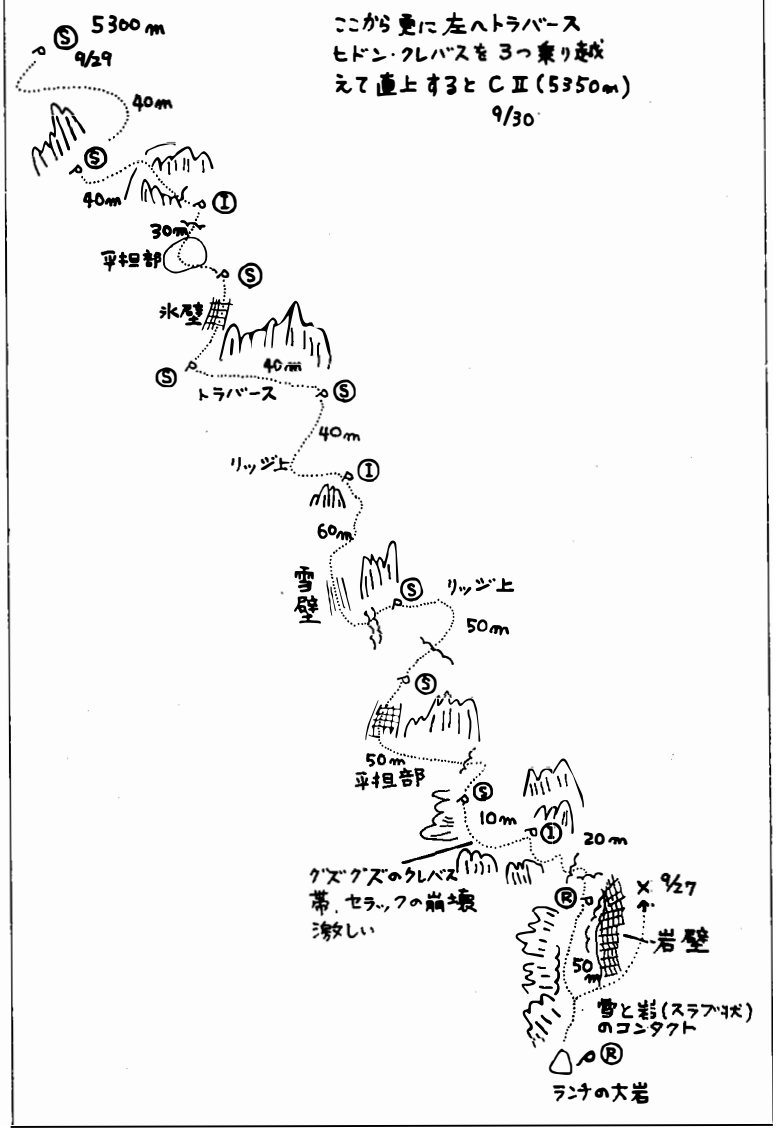
アイスフォール帯を横断してＣ１（4750m）へと向うアイスフォールの氷は表面に砂礫が付着してコンクリートのように固い

で明日よりルート工作を行う事にする。他は五〇〇〇メートルまで荷上げ。

九月二八日
天気もよくなく休養を兼ね沈澱。

九月二九日
二七日の偵察に基づき、藤松、吉田、師田でフィックス・ロープを五三五〇メートルまで張る。他はその地点まで荷上げする。

ニルギリ南峰下部アイスフォール帯ルート図２



一〇月一日
全員で出発するが三井は五〇〇〇メートルで引き返す。他はC2予定地まで荷上げし、また五三五〇メートルのデポ回収。田中、加藤はC1まで下り他の三人はC2入り。

C2からC3

吉田　秀樹　　三井　和夫

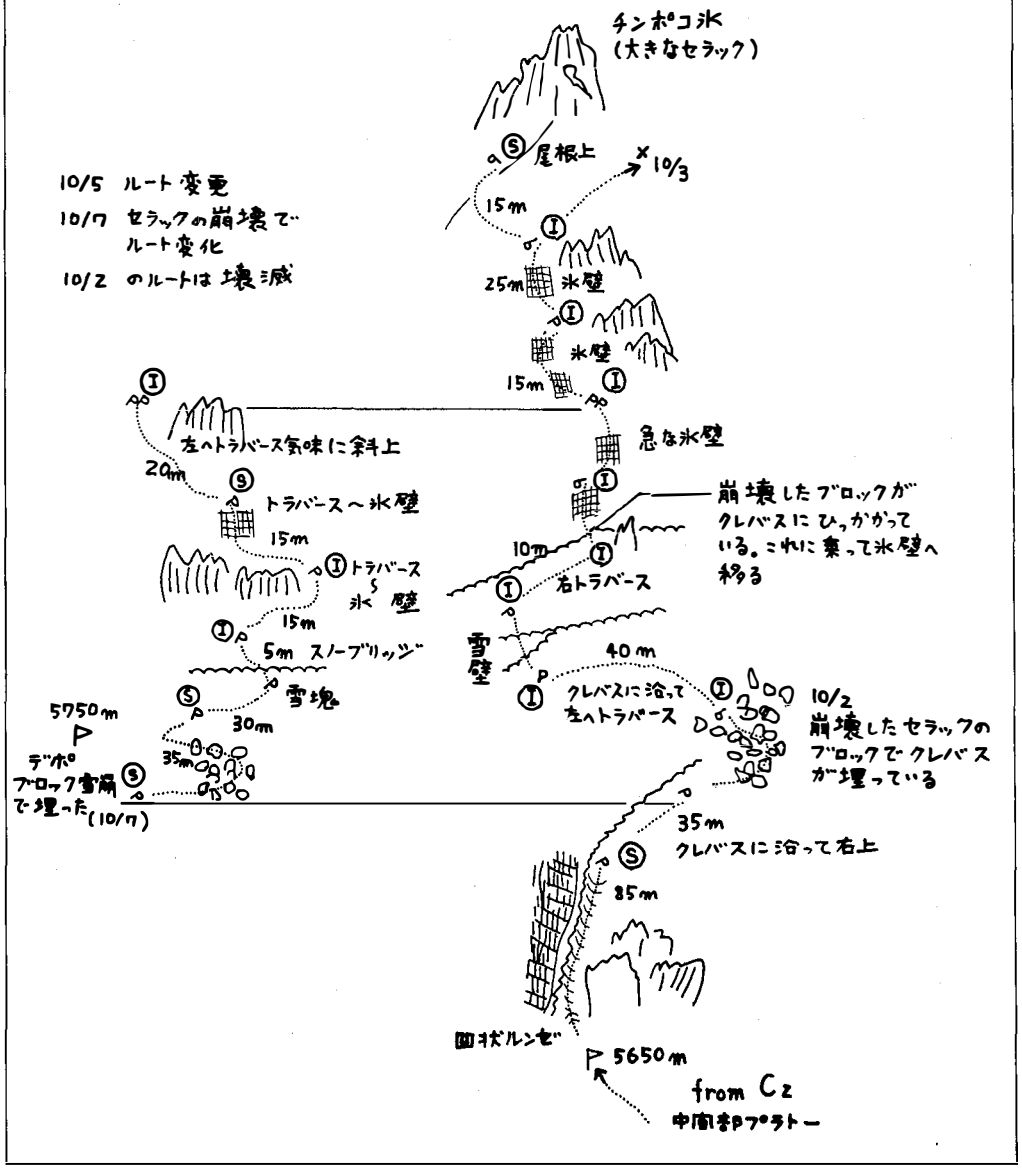
プラトーからの落口のセラックは巨大で、崩壊が激しい。傾斜の強い雪氷壁を抜けると標高六〇〇〇メートルの大プラトーだ。気のゆるみかC3直下にデポした荷物がブロック雪崩れにやられる。被害は少ない。アタック・キャンプの完成だ。

一〇月二日
藤松、吉田、師田で上部アイスフォール帯へのルート工作。右岸側を一〇〇メートルロープを延ばすと深いクレバスにさえぎられその先には巨大なセラックと氷壁。またまた甘い期待は裏切られた。五七五〇メートルまでフィックス・ロープを張る。他の三人はC2まで荷上げ。

一〇月三日
吉田、師田でルート工作、深いクレバスは、アイスフォールよりの中央部で越し、また右岸側よりにもどり氷壁を必死の思いで越す。中央部はまだセラックの崩壊地帯だ。結局、右岸を上部へとつきあげるルンゼを登り。最後の氷壁を登る事にして下る。五九〇〇メートルまでフィックス・ロープを張る。藤松は休養、他の三人C3入り。

C 2（5450m）より上部アイスフォール帯へのルート工作へ向う師田隊員と吉田隊員

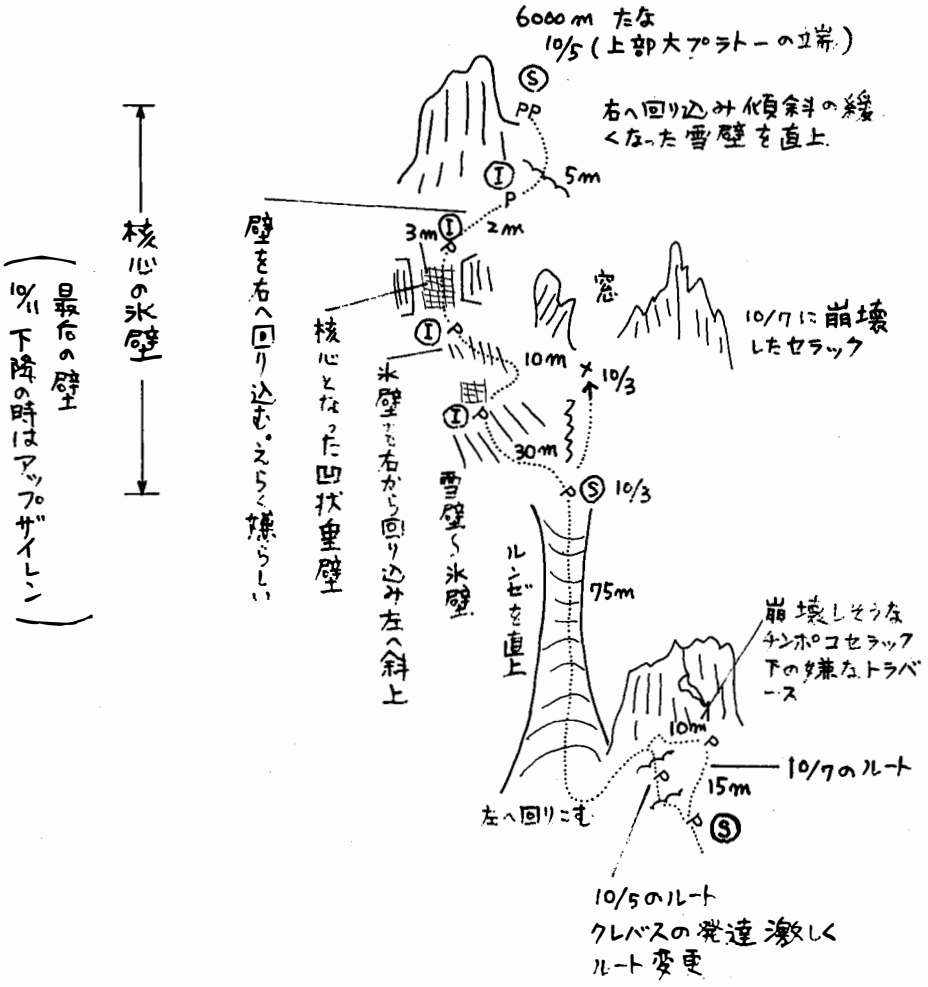
ニルギリ南峰上部アイスフォール帯ルート図 I



一〇月四日
全員休養。

上部アイスフォール帯最後の垂壁。ここを越すと上部大プラトーへ出る

ニルギリ南峰上部アイスフォール帯ルート図2



一〇月五日

三井、師田、吉田でルート工作に出かけるが、深いクレバスから先は状況の変化にルートを変更する。ルンゼの終点五九〇〇メートルまでフィックスを整備して、最後の急な雪氷壁を抜ける。アイスフォール帯を抜けたのだ。他の三人は五七五〇メートルまでデポした後下のデポ品を回収。

一〇月六日

三井、師田でさらに上部大プラトーまでの偵察とルート整備を行う。藤松、田中、加藤は最後の雪氷壁下まで荷上げ。吉田は途中でC2へ戻って休養。

一〇月七日

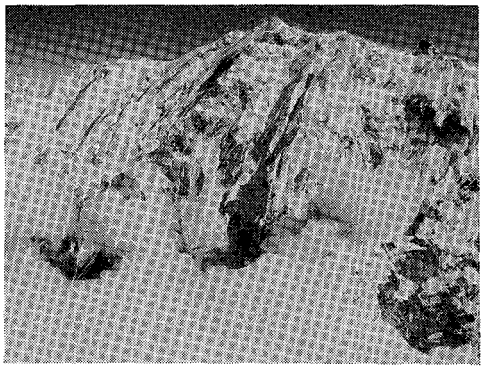
全員で荷上げ。上部大プラトーへ完全に入り、東稜へ続くゆるい傾斜地にデポする。六一〇〇メートルブロック雪崩の後のはずれ。

一〇月八日

全員でC3へ入り、前日のデポはブロック雪崩で四散しており必死で掘り出す。しかしフィックス・ロープ二〇〇メートル、バイル一本、若干の食糧等はとうとう掘り出せなかった。不注意が生んだ事故だが、何とかアタック体制に入れそうだ。

一〇月九日　快晴　C3→六四五〇メートル

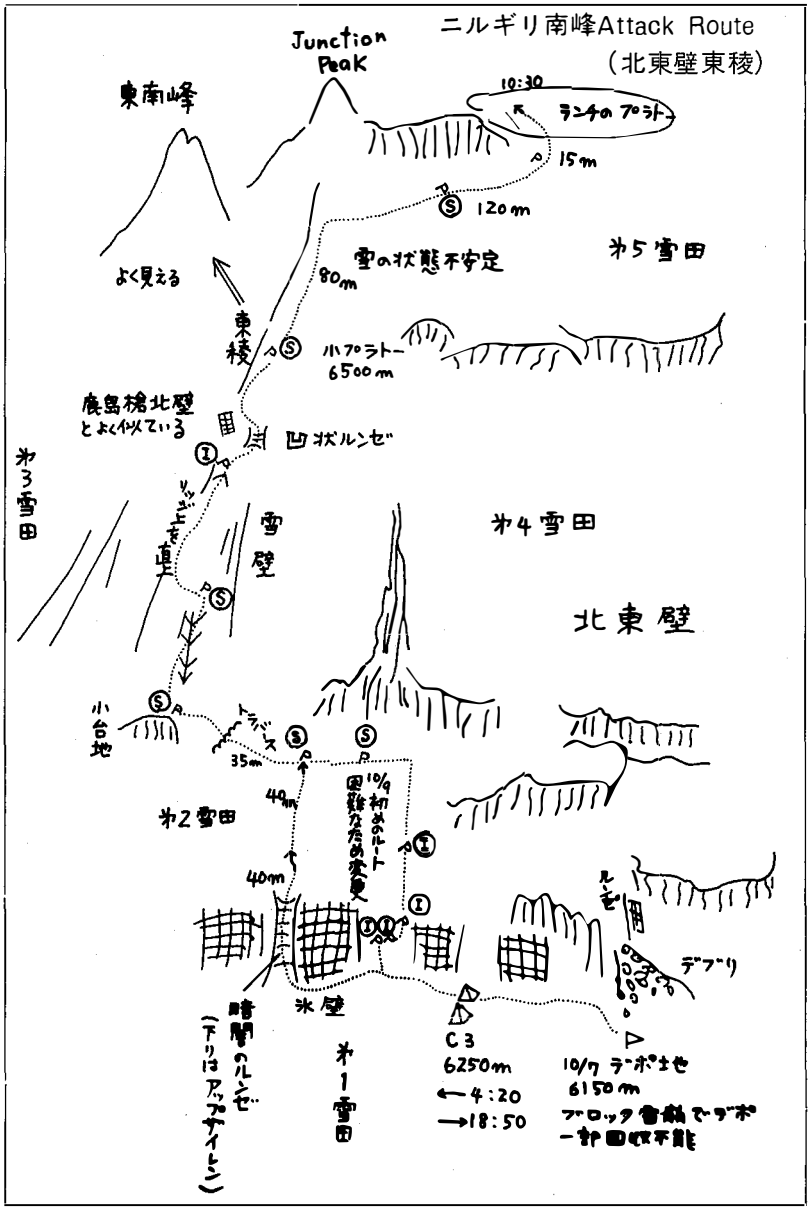
C3での初めての夜は静かに明け、手足のむくみが少々ある程度で全員の体調は良好だ。七時一〇分、三井、藤松、吉田、師田はルート工作に出発する。C3は、雪壁となり顕著な四〇メートルのルンゼ二本が、走っている。右のルンゼに取り付く。かぶり気味の氷壁で基部は、崩壊が激しく安定したスタンスにならない。吉田は苦労して、このワンピッチを開いた。その上は雪の緩傾斜帯がありその上は上が見えないかぶった雪壁に阻まれた。左に一〇〇メートルトラバースして安定した天候に心も軽い。吉田はロープを固定してこのテラスに登り、トップの三井は確保をする。東稜は、すっきりと青空に続いている。ザラメ雪となった雪壁のラッセルで、一歩ステップを刻むと雪はトレースをすべり落ちてしまう。



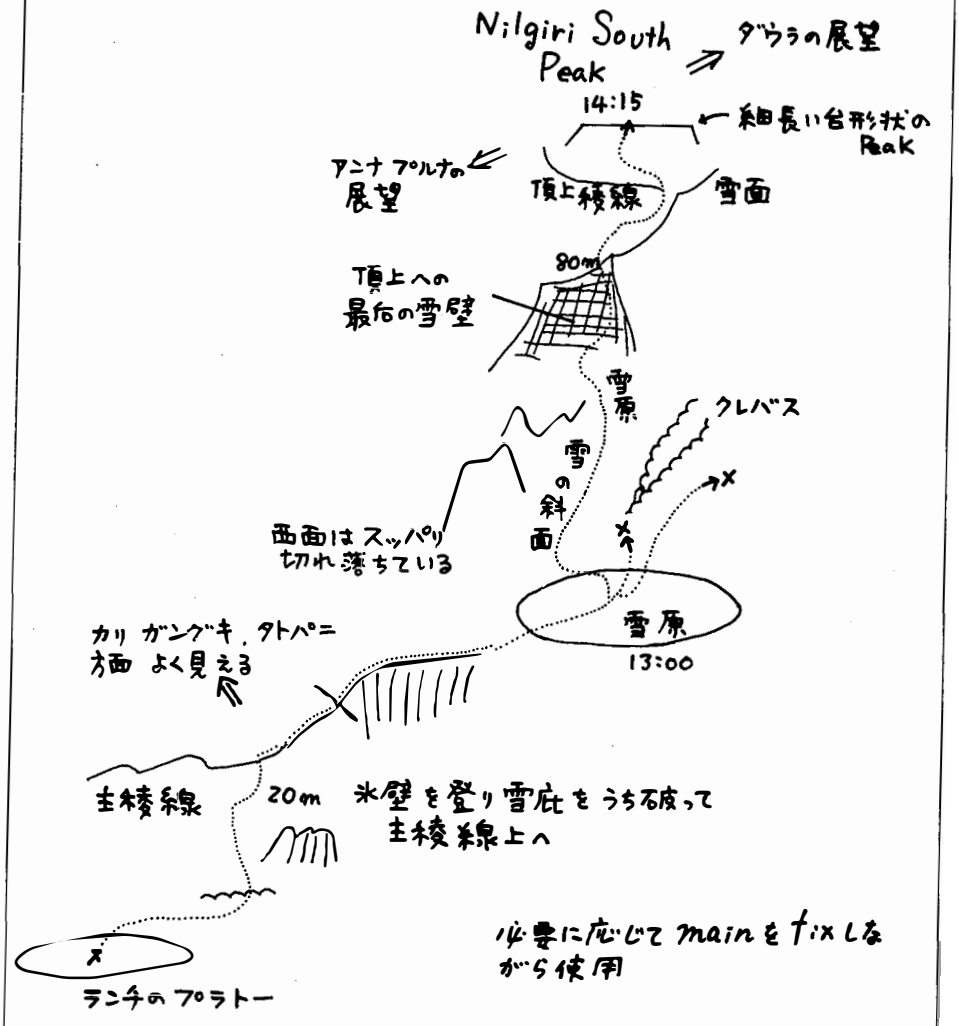
ニルギリ南峰頂上(6839m)より
アンナプルナⅠ峰(8091m)、ファング(7647m)を望む

安定したステップが刻めないまま六四五〇メートルの地点で固定ロープを使い果す。ここまで登ると、ファングの右にアンナプルナ・サウスが見える。ミリスティ・コーラ内院は、いつも通りにガスが上昇してBCは雲の下だ。東稜上部は雪壁となって頂稜下の氷のハング帯でさえぎられているが、右から巻き込めそうだ。見通しがついて、気分よく下降する。師田、藤松は困難な右ルンゼのルートを左ルンゼに変更し、固定ロープを張った。これで明日のアタックの用意は万全となった。田中、加藤は、デポ地から、デポ品を回収し、ルート工作隊の様子をC3で眺めていた。

夜六時の定時交信では、ニルギリ放送局が開局し、騒がしいディスコに変わり、音楽が流れてくる。



ニルギリ南峰Attack Route



頂上に立つ三井隊長、背後にダルラギリⅠ峰(左側)とツクツェ・ピーク（右側）を望む

ニルギリ南峰の頂へ

登　頂

三井　和夫

一〇月一〇日　快晴　無風

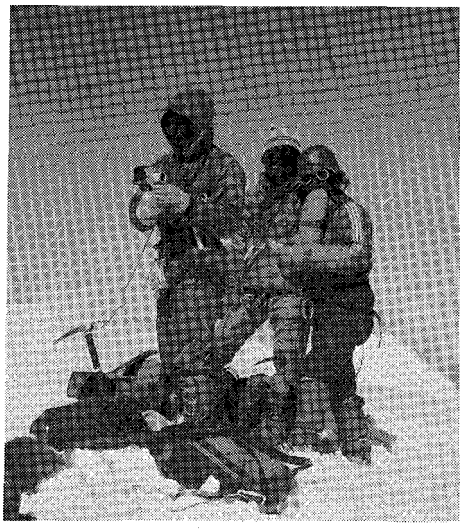
星がきらめく二時一五分起床、隣のテントの師田、田中、加藤がさっそく朝飯の準備を始める。ガスのシューという音までよく聴こえる。掛け声がかかり、隣のテントに移ると、アンナプルナⅠが黒々と座している。アタック日和りだ。好評のきつねうどんは鍋の底まできれいに食べる。四時二〇分、ヘッドランプの灯をたよりに昨日のフィックス・ロープを辿る。全員最上のコンディションだ。フィックス・ロープ終了点に着いた頃、アンナプルナⅠの左から太陽が輝きに満ちた光を投げかける。象徴的な瞬間だ。フィックス・ロープを回収し、六人で交互にラッセル―六五五〇メートル地点から、師田トップで、二〇〇メートルの大トラバースを一人で拓く。かぶっている雪氷壁を回り込みプラトーに抜け出た。頂上は見えないが、頂稜まで七〇メートルと迫っている。北西稜はギャップを境に中央峰に続いている。一一時～一二時昼飯として、日ネの食品を食べる。頂稜の出口は師田トップで三〇メートルの堅い雪壁を登る。我々はもう四〇メートルザイル二本しか持っていない。頂稜に出ると、東南峰の南壁が切れ落ち、カリガンダキは雲の下になっている。吉田トップで頂稜をワンピッチ進む。たしかに近づいているはずなのにピークが見えない。時折やるせない気持ちになるが振り向くと、東南峰は下になり、巨大なアンナプルナⅠが視界一杯に拡がる。ザイルを解いて広いプラトーを登る。視界が開け頂上が見える。プラトーと

頂上の間にはクレバスが走り、師田は、スノーブリッジに近づいた時の割れる音と共に飛びはねた。他を捜してみたが、ここ以外にない。下弦のスノーブリッジの上を吉田がフワッという具合に体を浮かして渡る。幸い崩れなかった。

太陽は西に傾き、南峰の影は中央峰との間の大雪原に影を落している。頂上雪壁は底も見えず、雲の中にきえている。三井トップでカンテラインを雪を払い落しながら登る。板状に切れ落ちる雪は、上半身をそのまま切り落としそうだ。そして、音もなくすべり落ちていく。五〇メートル登ると間近にピークが見える。ピッケルを深く差し込んで、後続を確保する。アンナプルナI峰を背景にしてザイルがうごき、次々にメンバーが顔を出す。ピーク下に全員集合した後、全員で同時に登りつめる。視界がパッと広がり風をうけてダウラギリ・ヒマールが目に飛び込む。サングラスの中では涙があふれている。強く握り合う手に仲間の心がつながる。皆はしゃいでいる。そして一緒に登ってこれた事、克服した事の満足感で体中が充たされる。

タトパニが雲間に見え、雲海を東に目を移すとアンナプルナ・サウス、ファング、アンナプルナI、大障壁の向うに青くアンナプルナIIの秀麗な姿には極立った感慨がある。茶色に見えるマナスル、チベット内の七〇〇〇メートルクラスの山、ティリツォ・ピーク、ニルギリ中央峰の上に北峰が見える。ちょうどパンダ模様のチベットの低山、そしてダウラギリ・ヒマールの特にすばらしい眺め。地上の世界とはとうてい信じられない眺めだ。BCから登頂のお祝を受けツクチェ・ピークの長井山岳会、ダウラギリIの群馬岳連からも祝いの言葉が届く。カトマンドゥーポカラを行動を共にした、長井山岳会は、断念せざるを得なくなって残念だった。そして我々より一か月近く前から困難な東南稜に挑んでいる群馬隊の登頂成功を祈る。頂上にすべてがあった。隊の発足からキャラバン、登攀のすべてがあった。

三時、気を張りなおして一人一人慎重に下りる。頂上雪壁のザイル回収は吉田が確実におこない大トラバースのフィックス・ロープは回収して下部をフィックスする。ロープがキンクしてしまって団子になっている。六四五〇メートル地点につく頃、渡り鳥の一群がティリツォ・ピークの西のコルを越えて、眼下に独特な啼き声と共に、トロブギンのコルに向かっていく。大自然の偉大な行為を感動的に見つめる。この日のアンナプルナIは、黄金色に輝きそして次第に色があせていく。ティリツォ・ピークは、うすいピンク色になり、上空もまたうすいピンク色に染まっている。三度フィックス・ロープを張り、下降を続ける。真暗闇の中を最後のルンゼを降りる。凍りついた靴は、気づくとスキー靴のようになってしまっていた。七時、フルコースのメニューでいっぱいの一日はC3帰着と共に終了した。



8ミリの操作をする藤松隊員

登頂のこと

加藤　喜章

C3へのルート工作がのびるにしたがって、登頂の実現がかなり現実的なものとしてとらえられるようになって来た。ピークに立つ自分の姿が鮮かな夢となって現われるようにもなった。それと共に登頂を成功させなければという義務感や、自分が登頂したいという欲望が大きくのし上がって来て、今考えてみればかなり病的な考え方をしていたように思う。まったく神風的な特攻精神であって、とにかく登りたい、死んでもいいから登りたいと真剣に思っていたものだ。それだけに、荷上げをしていたぼくは入って来るルート工作の進展の情報を一喜一憂して聞き、どれほど最前線で働いたほうが気が楽なものかと思ったのだ。

C3での一泊はやはりこたえるのか、朝からどことなく体が重く感じられる。三井、藤松、吉田、師田は明日のアタックのためのルート工作へと出かけて行った。アタックを目前とした心の高ぶりで、未熟なためにルート工作に活躍することができないでいる自分をいっそう残念に感じる。荷上げはたしかに大切ではあるが、一義的なものはやはりルート工作であろう。そんなやるせなさも手伝ってか、三時間足らずのデポ回収に向う体が極度に重く感じられる。デポを回収しC3に向けて登り始めると、体の不調が顕著に現われてきた。足に力が入らないのだ。息苦しくはない。心臓の鼓動も異常なほどは激しくない。ただ足だけが腑抜けになってしまって自分のものとは思えない。何回もの休憩の後やっとC3にたどりつくと、ルート工作隊は以外にもすぐ近くで苦戦をしていた。明日のアタックは大丈夫なのだろうか。僕自身はこんな調子でも登れるだろうか。あせりと不安が高所で攪乱している精神状態をより不安定なものにする。いや、何も考えるのはよそう。あらゆる感情も押さえてしまおう。そうしないと頭がまいってしまう。とにかく後に残されたことは、よく寝て疲れを取ることだけだ。そして這ってでも登ってやるのだ。

一〇日一〇日、四時二〇分、満天の星空の下をヘッドランプをたよりに出発した。昨日張られたフィックス・ロープに従ってただ黙々と登る。目に入るものはランプに照らされた一歩前の雪面だけで、どこを

どう登っているのか皆目見当がつかない。フィックス・ロープの最終点に着く頃になるとようやく夜が明けて来て、ヒマラヤならではの雄大な風景が現われてきた。鋭い東南峰へつき上げるヒマラヤ襞は金色に輝き、アンナプルナはどこまで登ってもあいかわらずの高さと大きさを誇っている。目差す頂上はまだ遠くだ。ラッセルをして、雪壁をトラバースして、着々と頂上に向って登って行くのだが、一つの難所を越えるとまた難所が現われて来る。ニルギリは容易には頂上へ立たせてくれそうにない。

東南峰へと続く稜線に出ると、カリガンダキに向ってスッパリと落ちている岩壁の高度感はものすごいものだ。足が震えてくるのを押さえることはできなかった。フィックス・ロープの通過待ちのたびにうとうとした寝りを誘う疲労感も吹き飛んでしまった。最後に七〇メートルほどの雪壁を越えると頂上が目の前になった。台形の細長い頂上だ。横一列に並べば二〇人くらいは一度に立てそうだ。頂上直下に六人が集まるのを待って、一列に並んで一歩一歩頂上に向って登った。雪面への一踏みごとに感動が高まり、なぜか笑い出しそうになってしまう。そして全員が同時に最後の一歩を踏み出した時、目の前には肩を怒らしてそびえるダウラギリと、なだらかに続くツクチェ・ピークが現われた。頂上への一歩に限ってそれ以上の感動の高まりはなく、あっけらかんとした気持ちに支配されていた。しかしそれは一瞬の事で、全員が喜びの握手を交わし始めた時、また新たな感動がよみがえってきたのだった。BCとのトランシーバー交信では、親しみのこもったリエゾン・オフィサーやシェルパ達の声が聞かれ、ダウラギリの群馬隊やツクチェ・ピークの長井山岳会隊からの祝福もあり、感動をより募らせるものとなった。二時一五分であった。

頂上を後にした僕達には長い下降が待っていた。ザイルをフィックスしてそれを通過する繰り返しが何度続いたことだろう。いつの間にか日は落ちて暗闇の中の下降となった。寒さと共に疲労感も増してきて、登頂成功の喜びなどもう頭の中には一片も残されてはいなかった。長い下降を終って平坦な雪面につけられたトレールをC3に帰る時には、もうまともには歩けずヨタヨタとした足取りで何度もころんでしまうほどであった。七時に帰着した。狭いテントに小さくなって集まりスープを作る皆は、激しい疲労を楽しんでいるかのようだった。

ニルギリ南峰に登って

師田　信人

ニルギリ―青い山、その頂上稜線はもうすぐ先だった。俺達の立ってるとこからそこまでの間には威圧的な、でも魅力的な雪壁がそびえている。登りたいなという気がした。ここさえ登れば頂上に立ったも同然だった。一休みの後、三井さんがトップで登りだす。隊長としていろいろ苦労しながらいつも下から隊を支えてきていただけに、最後の壁は自分の手で登りたいんだろうと思った。一歩一歩慎重にステップを切っていく、やがて視界から姿が消える。頂上稜線に出たんだ。フィックス完了。後はフィックス・ロープをたどって登るだけだ。

頂上手前の平坦地に六人全員がそろう、春のジェティ・バフラニの時と同じように、また横一列になって頂上を目指す。ダウラギリ、ツクチェ・ピークが目いっぱいに飛びこんでくる。嬉しかった。やっぱり六人全員で登頂できたからだろう。ＢＣとトランシーバーの交信をする。リエゾンのドゥンガーナさんの声が弾んでいる。こっちもいざ言おうと思うとしどろもどろになって何を話せばいいのかわからない。そのうちツクチェ・ピークに向っていた長井山岳会、ダウラギリＩ峰に挑んでる群馬岳連隊からお祝の交信が入ってくる。思ってもいないとこから、日本隊と交信できたので、それだけにまた登った実感が湧いてくる。俺は今回の遠征では最初から遅れたりでみんなの足を引っぱってばかり。だから登頂なんてことより何かみんなの役に立って迷惑かけたぶん取り返したいと思っていた。ルート工作などで全力を尽してルートを切り開いた時など本気で、もう登頂できなくてもいい、俺の役は終わった。誰かがピークに立ってくれれば…なんて思っていた。それだけに今こうして六人そろってピークに立てることが嬉しかったし、自分自身、俺は運がいいんだなという気がしたんだろう、春とはまた全然違った思いだった。

下降の不安はつきまとっていた。温度も冷えてきて、羽毛服を着こむ。フィックス・ロープの最終までメインザイルをフィックスしながら下る。あの雪崩で埋められた二〇〇メートルのフィックス・ロープがあったらと何度も思った。アイスフォール帯でルート工作に悩まされてた頃、俺達の頭上高く飛んで行っ

た渡り鳥の群が、今は俺達の下を渡っていく。夕陽がきれいな日だった。アンナプルナ山群が真紅に燃えていた。こんな凄じい夕焼けは初めてだ、と息をのむような想いで見とれていた。フィックス・ロープの最終点にたどり着くと、後は抜けるんなら抜けろっていうような開き直った気持ちでフィックス・ロープに全体重をかけて、駆けるようにして下っていく、腕が抜けそうだった。いつか空には星がまたたいていた。朝、出発する時も星明りの中だったのに…足の凍傷に気づいたのはC3に戻って一安心してからだった。

頂上からは七年前の遠征隊が目指したアンナプルナII峰がくっきりと空に映えていた。ニルギリ登頂の知らせを聞いて一番喜んでくれるのはOBの人達かもしれないと思った。一〇年以上も前からこの山にずっと思いを寄せていたんいだから…そんな夢が、一つまた実を結んだということ、それが何より俺には嬉しかった。山は逃げない、でもいつか心の中から消えてくことがある、そんなことを部誌に綴っていた奴がいる。何かよくわかるような気がした。

ニルギリ登頂

田中　誠司

朝二時起床。よく眠れた。不快感はない。気持ちが張りつめていて、六二五〇メートルの高度の影響を殺しているのだろう。いつものように脈をはかる。相変わらず数は多いが呼吸数は少ない。シュラフに入れておいた罐詰は凍ってない。急いで食事の準備をする。風もなく天気は良さそうだ。好天が続けば、これで五日目だ。三井さんのせきがひどく、気になっていたが、「セキをすると血が出るんだ」と言うものの飄々としている。エッセンに全員集まり賑やかになる。みんなで顔を見合わせる。「どうだ、大丈夫か」と藤松さん。いつも笑いの中心で愉快な先輩だ。おじやをほおばる。後片付けをして、アタックザックに荷を詰め込み外へ出る。星がいっぱい出ている。キラキラとまたたくのは風のせいか。四時二〇分ヘッドランプをつけて出発。昨日のトレールを追う。雪壁の下を行き、ルンゼ状の壁でフィックスをする。ツバイでザイルを操作しているうちにオーバー手袋の右手を落とす。急斜面をあっと言う間

に滑り落ちて行く。下にいた吉田さんが急いで駆け下って捜してくれたが、闇の中に落ちた模様。吉田さんはどんな時でも捨身になってやってくれる。先輩だと言って甘えてはいけないと思ってもつい頼ってしまうほどたのもしい人だ。一〇〇メートル近く直上して南へトラバースする。少し白んで来た。そして風も出てくる。フィックス・ロープに従い稜上を登る。

加藤が怒鳴られている。ヘッドランプを飛ばされたらしい。普段はとても物静かでおとなしい奴だが、気心が知れると自分のことをどんどん打ち明け陽気になる。また、いい悪いはともかく頑固なところがあり自分を大切にする人間だ。山が好きで、山に登りたくて信大へ来たというタイプでもある。僕の場合、山は好きだけれど、山に登ることそのものより、ただ単に山岳部に入れば山に接することができていいなと思い入部した訳で、入ってから山登りってこんなものなんかなあと身体で知るようになった。ほとんどの仲間は、自分の山登りを持ちたい、こんな山登りはいやだと言ってやめて行った。そんな周囲の影響から、自分はそれまで主体的といえる山登りをしていなかったが、これじゃいけないと思って今までやって来た。そんな時ニルギリの話が出て飛びついた。

フィックス・ロープの終了地点着六時。ティリツォそしてニルギリ中央峰がオレンジ色に染ってきて陽が登る。加藤と写真を撮り合う。快晴で風も止み絶好の条件が揃った。ラッセルが始まる。サラサラ雪で、もぐる上に不安定なのでフィックスする。頂上らしきものが近くに見える。これじゃ一〇時頃にいけるんじゃないかと思う。フィックスを登ると頂上はずっと北寄りでまだまだかかりそう。雪塊が張り出す下を師田さんが北へトライバースする。ザイルが少しずつしか延びない。「師田の野郎何やってんだ」と声がする。長い待ち時間、眠くなってついウトウトする。師田さんはエネルギーの塊みたいな人で、山でも街でも、大きい身体をフルに使っていつも精力的に動き回っている。山で沈澱している時、急に「ワーッ」と大声で叫ぶのでテントの中にいる者が驚いて顔を見合わせると、「これは、ストレス解消にもなって身体にいいんだよ」と答える。この行動派の師田さんも時にはこぼすこともある。「どうして僕がこんな目に会わなきゃならないの」と。でも、これは次のステップへのバネとなる起爆剤のようなグチだと僕には思われる。

一〇時に主稜近くのコル状になった雪田へ出る。何とピークはまだまだ遠い。缶詰を開けたりして昼食をとる。日射しが増して暖くなり少し気だるい。それを振り放すようにしてラッセルで進む。ヒドン・クレバスが出てハッとする。皆で交替しながら進むと主稜への壁が出てくる。氷壁を抜けると視界が開けた。稜上をたどり漸くにして頂上の下へ出る。それも雪壁にはばまれる。西面はスッポリと切れ落ち、

東面は回り込んでも登れるかは定かでない。登れるんかな、大丈夫かなとなさけなくなってくる。休んでテルモスのお茶を飲む。風が出て来て寒くなる。結局、三井さんが正面の雪壁を登り出す。ステップが作れて心配したほどでもなかった。ザックに腰をおろして見ていると、また眠くなってくる。ウトウトするが、鼻水がたれたりして気分は落ち着かない。動きたくなくなったり、早く登りたいと思ったり気持ちが交錯する。これが最後なんだと緊張させる。立ってフィックスの順番を待っていると今度はワクワクしてきた。ピッケルを刺し込み一歩一歩登る。ユマーリングする自分の姿に自分で酔っているようでもあった。傾斜が緩くなる。すぐそこが頂上だ。皆待っていてくれた。疲れは全く感じなかった。スカイラインが頂上。各自が思い思いラッセルする。頂上だ。凄い、ダウラギリが富士山の何倍もありそうな雪の塊となって迫ってくるのが目にはいった。着いた瞬間は各自それぞれが興奮し、それからお互いに顔を見合せ握手し抱き合った。やはりホロリとなった。苦しんだ甲斐があったというだけでなく幸運でもあった。全員がそろって頂上を踏めたことは。三六〇度のパノラマは素晴らしいものだった。ダウラギリⅠ、ツクチェ、その向うは初めて見るⅡ、とⅢとⅣ……Ⅴかな、何だかよく解からない。振り返ってマナスルも見える。マナスル三山、どれとどれか……、高いのがマナスルだろうけど。ちゃんと解かるのは、アンナプルナⅠとⅡ、ロック・ノアール、ティリツォ、ニルギリの中央峰、北峰。南へは凄いリッヂを経て東南峰へ、アンナプルナサウス、ファングと一周する。カリガンダキも眼下に、そしてゴラパニ峠もあの辺りか。チベットの山々も北に拡がる。そんなに高くはないけれど、やっぱりチベットは雄大だなあと感慨に浸る。トランシーバ交信、記念撮影を終え、食事をしたらもう三時になっていた。四五分もいたとは。下りの不安はない。ただ下ればいいのだ。

BCからカトマンドゥ

三井　和夫

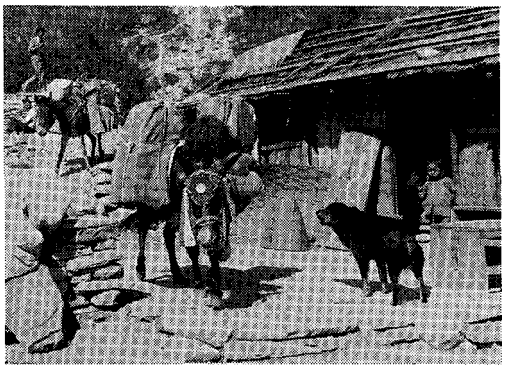
一〇月一八日　BC→トロブキンコル手前
いよいよ出発日、もう二度とくることのないだろうBCに未練が残り、ポーター、シェルパが出た後ようやく出発した。雨の中BC予定地に入った日の事を思いだすと。水量の減った川、乾いた地面の中、ぐんぐんと距離をかせいでいく。

一〇月一九日　トロブギンコル手前→チュルキ
朝、外は霜である。アンナプルナが美しい。雪煙が陽にあたり何とも言えない。我々四人九時三〇分最後にBCを出る。親子丼のカンズメのうまかったこと。

一〇月二〇日　三三〇〇メートル尾根上鞍部→チョーヤ
チョーヤではムクチナートへ行っていた田中、加藤とリエゾン・オフィサーらが待っていた。ポーターはここまでで明日からはポニー八頭とキッチン・ポーター二名でいく事となる。夜は約束どおり羊の肉を買い久し振りのご馳走に舌つづみを打った。

一〇月二一日　チョーヤ→ダナ
茶店に入り、チャン、ロキシーをのみ、ブラブラとゆっくりしたキャラバン。今日よりポニーを雇う。一頭でポーター二人分。計七頭。トレッキング・シーズンのためかポーター不足。

一〇月二二日　ダナ→タトパニ（隊員以外はミーカ）
今日はシーカまでの予定であったが平尾さんのやっておられるスルジェ館で厚いもてなしをうけ、シェルパ達には明日ティルケドゥンガまで行くよう通行人に連絡を頼み、今晩はここで泊めてもらう事



帰りのキャラバンはポニーで行った。きれいなかざりをつけ、チリンチリンと鈴を鳴らしながらの行列は楽しい

にする。レイをプレゼントされたり、ロキシーをのませてもらったり話をして楽しい時を過ごした。

一〇月二三日　タトパニ→ゴラパニ

昨日はシェルパ達がかなり心配したそうである。結局我々が来るまで待っていて、今日はゴラパニ峠までとなる。

一〇月二四日　ゴラパニ→ビレタンティ

今日は下るだけ、ビレタンティに着き、師田がチャンを買ってくる。晩めしはチキンである。しかし帰りのキャラバンの会計のヒモのゆるいこと。

一〇月二五日　ビレタンティ→スィケット

雲間にマチャプチャレを見ながら茶店のあるごとに入る。師田、リエゾン・オフィサーがポカラへバスアレンジで先発する。

一〇月二六日　スィケット→ポカラ→カトマンドゥ

いよいよキャラバン最終日だ。ポニーによる輸送は最初の不安もなんのその文句はいわないしポーターよりしっかり歩くので非常によかった。ポカラが近づくにつれて人通りははなやかになってくる。昨日先発した師田がバスをチャーターしてくれていて今日中にカトマンドゥに帰れる。ポカラのヒマラヤンホテルでお礼と乾杯をすませ、カトマンドゥへ急いだ。カトマンドゥの空気はもうだいぶ冷たくなっていた。

隊員

藤松太一

教育学部四九年卒　菅平中学校教員　二七歳　会計

元々生まれが信州山奥育ちであるので、小さい頃から山に対して何の抵抗もなかったが、毎日見るアルプスへ自分が夏に冬に行こうとは考えてもみなかった。体力にはかなり自信があり、高校時代の柔道のためか、やや体型は箱形。自分では岩、縦走、沢と何でも一応に取り組んだ。知的理解力はやや劣るが、計画性はかなりあると考える。おおよそ、体力的に何でも取り組んでしまう面があり、やや科学的な側面に弱点がある。それほど自己主張は強くなく、気の合った者が同じチームで取りくんだ、今回のような山行が大好きである。特技といえば一つの言葉でジョークを連発する事であり、その速さである。また、趣味と言えばカメラで山など静かなものを撮り、伸すことである。今回のメンバーの中の唯一の教師であり、やはり、行動も思考も全て教師であった。

アラスカ「ブラックパーン遠征　登頂」　一九七三年
インド「カシミール方面トレッキング」　一九七六年

田中誠司

農学部三年在学　二三歳　食糧

「散髪、俺、上手ね」とシェルパが言うので、ニルギリ・コーラの水辺で頼んでやってもらった。BCが設営されて二日目の休養日。仕上ったシェルパカットなるものは、ザンギリ頭の見るも無残な姿となった。この日が二四歳の誕生日。昼食をご馳走になったアメリカの女性隊にも酷評だった。落ち込んでニルギリBCへ戻ると、夕食は私の誕生日を祝って、コックの特製ケーキが出て来た。すしを食べ、ロキシーを痛飲し、歌って踊って愉快に過ごすと、シェルパカットのことなど、すっかり忘れた。

「いつもニコニコ怒った顔を見たことがありませんね」と小学校の通知票にあった。今もその名残りで、早くも、目尻に小じわができている。先輩にはニコニコしていても別段支障はないが、後輩や彼女の前ではしまらないのでキリッと厳しくしようと努めている。

「いびき、寝言の常習犯」寮でもテントの中でもやってしまう。横になったらすぐ寝てしまうので、夜を共にした人には皆迷惑をかけていると思う。夢の中でもつい興奮してしまって、しまりのない口がすぐ開いてしまうようだ。

「山岳部に入ってとてもよかった」信大に入った限り何かやりたかった。ありきたりな学生生活にはしたくなかった。それで山岳部に飛び込んだ。ヒマラヤの処女峰に登れて十分満足だけれど、まだまだいろんな体験がしてみたい。

「山の道具はまともなのがなかった」ニルギリ遠征が決まっても、山の道具を揃える事が心配だった。そんな折、学友がカンパしてくれて立派な靴を誂えることができた。おかげで暖かい思いをして登れた。

最後に、いつも内弁慶で、わがままばかりで育った私でも、ニルギリ遠征だけは母に反対されると思っていた。それが以外にもすんなり賛成してくれた。無事帰国できたので今度は何をしでかそうかと考えているところです。

加藤　喜章

農学部二年在学　一九歳　装備

本格的な登山を始めてまだ間もない新人に、ヒマラヤ未踏峰に挑むという大きなチャンスが訪れ、幸運にも初登頂者の一人として名を連ねることが出来ました。OBの皆様には未熟ということで御心配をお掛けしたことと思います。技術の無い私にとっては体力で勝負するしかなく、その点だけはシェルパに「日本のシェルパ」とおだてられたくらいなので、がんばれたのだと思っています。ただ、多くの面で面倒臭がりの性格が出て、先輩方に任せきりであったため、登らせてもらったという感が強いのは残念です。今回の遠征をステップとして、今後は自分がリードして行くような立場で、もう一度ヒマラヤに挑んでみたいと思っています。

シェルパ

アン・ツェリン

コック

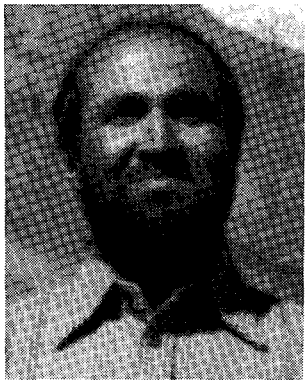
血気盛んな青年で、衝突も多い。時々、目の覚めるような、とびきりうまい料理を作るが少ない材料をやりくりして、うまく作り上げるのはできない。

ダワ・ギャルツェン

BC人夫

おとなしく、誠実な人である。BC人夫として命令には忠実に従ってくれた。

リエゾン・オフィサー



カマル・ドゥンガーナ

ボード・ナートの近くに住む警察官でリエゾン・オフィサーとして参加された。彼が一番、隊全体の事を考えてくれていたともいえる。隊員の小さな負傷の事からシェルパとの関係のこと、時には率先して皆を笑わせてくれた。又職務上の立場からチェック・ポストの通過も極めてスムースに取り計らっていただいた。若い隊員達にとって、大いに頼りになる方であった。

我々の世界

藤松　太一

一、プロローグ

大学へ入ったら柔道をやるつもりだった。山岳部に入部した年、アンナプルナII峰の遠征隊が出、我々山岳部員の胸中に「俺達もいつの日にかヒマラヤへ行くんだ」とおそらくみな胸の片隅に持ったことだろうと思う。当時、我々の年代で最後まで残ったものが八人もいた。他のサークルから見れば極めて少数と言えるが、山岳部という特殊な集団では数多い方であった。もともと信大は質より量の面があるが。そして、我々が上級生となった時、いや、四年部員以上になった時、インド、ネパール、ヨーロッパ、アラスカへと各々思い思いの旅に、山に出て行った。私もその中の一人であった。もちろん遠征としてならそれにこした事はないが、それをする力量がなかったのが事実、みな気持ちを押さえきれず飛び出していった。よく酒の席でヒマラヤの白き神々の座の一端の話に花が咲いた。教師となり三年目、独りモンスーンの中のインド、ネパールを旅し、ゾージ・ラより垣間見るヒマラヤ、帰国して二年目、山登りを始めて九年目にして、憧れであり、夢であった遠征に参加でき、幸運にも登頂できた。

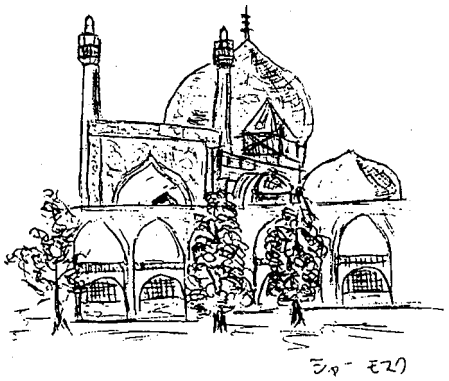
二、そしてヒマラヤへ

それは突然だった。先輩が一二年前に見つけ、我々が惚れた山ニルギリ南峰、しかも処女峰。毎年熱き恋文をネパール政府へ送り、そのつど入山禁止云々で許可がおりなかった。一〇年も過ぎれば心も変わり色あせるのに、しかし、我々は極めて単純なのか、山が動かないためか、一つの光を信じてきた。そして、暑い太陽の下で割と簡単に準備し、新装なった成田よりフライトする。むし暑いカトマンズの空港におり、いつも決まって泊るツクチェ・ピーク・レスト・ハウスに入る。学生時代の合宿風景にも似た準備をし、キャラバンに出る。言葉も、衣服も、風景も、それは日本ではなく、まぎれもないネパールであったが、しかし、いつもの日本の山と何も変わらないペースで一日一日と白い峰の一角へ進む。いつも思う事であるが、山には国境がない。それは「我々の世界」という言葉がピッタリである。加え

てシェルパレス、真に我々の世界である。標高はまったく違う、それなりの苦痛はある。でも、我々は山登りが好きである。どんな苦しみもある種の満足感を消化してしまう。一日一日の行動がキャンプを伸ばし、ルートをつくる。そしておそらく私にとって一生涯忘れる事のできない一〇月一〇日。ヘッドランプの灯りと、フィックス・ロープに導びかれ進む。フィックス・ロープの終了点でアンナプルナ側よりの朝陽に六人の姿が一瞬オレンジ色の中に映える。ラッセル、またラッセル、そして、今迄誰一人踏んでない頂に立つ。加藤、田中、師田と吉田の握手。とりわけ三井との握手には力が入り、胸からこみあげる喜び、一筋熱いものが頬を通わる。ついにやった。喜びと喜びが体全てに広がる。ただ、今迄山にすがりついていてよかった。つかみきれない幸せと、背負いきれない満足感を持って頂を後にした。やったぜ信大。しかし、登ってみると、アイスフォールでも四〇〇〇、六〇〇〇と日本の山にない高さではあるが、我々の山登りは日本のそれと何も変わらず、楽しい毎日であった。六人全員が高さにうまく順応し、日頃の体力を出せた。また、我々信大の登り方によく合っていたのも勝因の一つだったと思われる。今思うと、処女峰ニルギリ南峰を大キジ、小キジはたまた空キジで汚い白い雪と氷の世界を色をつけて帰った事を秘そかに悔むものである。

三、エピローグ

私は幸せだと思っている。信大の山岳部に入って。なぜかというと山への登り方、考え方が極く自然であるからだ。特別肩を怒らせ山を登るのでなければ、特別山登りを美化し、その行為に意識的にならない。よく、学生時代に山登りを日常化しているなどと言われたが、ゴロリと横になり、山を眺め「あの山いいなぁ」「行くかい」という発想である。また、食べる物にも、生活にも特別気を使うのでもなければ、装備に金をかける訳でもない。ただ、ひたすら山への情熱の中で、好きだから、登りたいから行く。山が自然にあり、我々の登り方も自然である気がする。そんな中から生まれてくる人間的な触れ合いも何とも言えず好きである。特別な言葉を持った者に自然な喜びは見い出しにくい。私はそういう仲間にとり囲まれた自分を幸せに思う。私はよかったとつくづく思うのである。



暑く長かったイランの日々と本隊追っかけの記録

師田　信人

七月中旬から八月末のニルギリ南峰への準備が始まるまでの期間、俺はイスタンブールまでの旅を考えていた。しかしその帰路、イランで大チョンボをやり、本隊の面々にすっかり迷惑をかけてしまった。一体俺は何をやったのか、言うもおぞましく思い出すだけでもみっともなくも情けないことに、パスポートを盗まれたのです。以下はその概略と、本隊を追っかけてBCで合流するまでの記録である。

八月一四日、テヘランからメシャド行きの夜行長距離バスで、夜中眠っていた間に小物入れからパスポート、学生証それに二〇〇リアルを盗まれる。

八月一七日、テヘランへ戻り大使館へ再発給を頼みに行く。一〇日以上かかるとのこと、それにしても言いたくはないけれどもやっぱり言わずにはいられない。「日本大使館はど官僚の冷血動物の集団だ」というのが俺の正直な感想。弱い立場になるからぐっとこらえてきたけれども、同じヒラの立場だったら絶対ぶち倒してやりたい衝動に何度も駆られた。日本の留守本部や、ネパールにいる三井さんのところに速達を送る。

八月一九日～八月二四日、イスタンブールで知りあいになった日系三世のアメリカ人とテヘランの路上でばったり出会い、気分転換も兼ねて、イラン南部へ足を向ける。なかなかよかった。

九月六日、やっとの思いでパスポートを手に入れる。この間、テヘランの治安は悪くなる一方、昼飯を外で食っていたら催涙弾が流れ込んできたり、俺の泊まってた安宿に流れ弾があたったりでまったく半軟禁状態、何もすることがなく、そのくせニルギリのことで気だけはせいて、発狂するのではないかという気がしてくる。時間潰しに映画館にちょくちょく行っていた。大使館は国籍証明書すら発行して

くれず、入国の確認をとっておくこともできなかった。

九月七日、出入国管理事務所、そしてカスタム・オフィスと周って入国確認と出国許可を頼みこむ。

九月一二日、やっとの思いで脱出用四八時間の延長ビザを手に入れた。これで悪夢のようだったイランとやっとお別れできる。

九月一三日、ニューデリー経由で朝カトマンドゥに着く。空港で入国ビザをとってすぐ、ツクチェ・ピーク・レスト・ハウスのトラチャンさんのところへ行き、それからランジャンさんのところへ行く、ランジャンさんのお蔭でこの日のうちに遠征許可証とビザの延長をすますことができた。さらにトラチャンさんが色々心配してくれて、案内人を一人みつけてきてくれた。こういう困ってる時の親切は本当に身にしみる。これで明日カトマンドゥを発てるわけだ。何か置いてけぼりをくったようなわびしさでやり切れなくなる。本隊からの指示は何が何でもできるだけ速く来いってことだけ、どうやってミリスティ・コーラ内院へ入ったらいいのかなんて、考え出すといても立ってもいられなくなってくる。雨音がやけに耳につく晩だった。それにしてもよくぞ俺のパスポートを盗んでくれたものよと、あのイラン人の顔は忘れようにも忘れられない。身から出たサビとは言え、改めて頭にくる。

九月一四日、ポカラへバスで向かう、途中でパンク、もう勝手にしてくれという感じだ、この日はポカラ郊外のヤンザと言うところまで、偶然と言うか幸運というか、ここで同じミリスティ・コーラ内院に向かうアメリカのアンナプルナ隊のシェルパと、ポーター二人と一緒になる。シェルパは俺達の本隊のことも色々知っていて、できるだけ早く行くってんで一緒に行くことになった。考えれば本当に運がよかったと思う。彼と出会わなかったらあんなにスムーズに本隊のBCを見つけ合流することはできなかっただろう。

心配していたゴラパニ峠のヒルも、ガネッシュの偵察に行った時のに較べればいないも同然だったし、トロブギンのコル越えもみぞれの降る中でだいぶしんどかったけれども、何とか無事に通過し、二〇日はミリスティ・コーラ内院にはいった。後は源流目指せばきっとBCがあるはずだ。時間はおかまいなく経っていき、陽はどんどん暮れていく、まっ暗になってほとんど何も見えなくなった頃、河が二つに

別れていた。ここでアメリカ隊のシェルパが、アメリカ隊のＢＣは右手の方で、ニルギリ隊のはここから左手に向かえば見つかるだろう、と言ってくれた。六日間、すっかり世話になって何かと気を使ってもらっていたのでそのお礼をする。本当にありがたかった。

彼等と別れ、案内人と二人でおぼつかない足取りで崖を登る。こういう時に限ってヘッドランプをなくしているのだ。笛を取り出し吹く。山岳部に入った時から、三種の神器だ、とか言われてナイフ、コンパスと一緒に持っていたけれどもまだ一度も使ったことのないものだ。まさかこんなとこで使うような破目になろうとは思っていなかった。笛を吹いても何ら変わることはない。ＢＣまで後数百メートルくらいのところで今夜はビバーク、と思いながら左手に移動し、小さな崖を越えると、何か光っているものがあった、それが何を意味するのか、すぐピンときた。体中の緊張感が解けていくような気分の中で、コールを送る。テントから光りの輪がでて、こっちに向かってきた。田中、加藤それにキパだった。やっと追いついたかという気持ち、ＢＣのすぐそばでビバークせずにすんでよかったとつくづく思った。テントの中にはすっかり心配かけた三井さん、藤松さん、吉田さんの顔があった。初めて目にするリエゾン・オフィサーやシェルパもいた。これで久々に、気疲れせずに今夜はくつろげるなあと思った。そして、みんなに迷惑かけたぶん、俺はサポートの方に回ってしっかり頑張らなければなんていう柄にもないこと考えたのを思い出す。

とにかくこのような次第で、本隊のメンバーばかりでなく日本の留守本部にまで大迷惑をかけ、大馬鹿者扱いされても一言も返す言葉もなく、一生に数度とないと思うような顔面真青の経験は終わったのである。それにしてももうこんないじけた経験は二度としたくない、絶対にしないぞ。

そしてネパール

田中　誠司

カトマンドゥ空港では雨に降られる。税関を出ると、ヒゲの三井さんとゲッソリやせた吉田さんが迎えに来てくれた。三井さんのヒゲはとても似合っていた。吉田さんはあわれと言えるほどやつれている。アフガニスタンで下痢にかかったそうで今もって調子はよくないという。タクシーは日本の中古車のカローラ、サニーが多く控えていて、玄関は客引きでいっぱいだ。交渉が済み、荷を小僧さんが積み込んでくれる。何か、しきりにせがむので、三井さんがタバコの吸いかけをやった。のどかな田園風景の広がる中を通って市街へ入る。道端には子どもがあふれ、牛が寝そべっていて、夕暮の中人々が忙しく動き回っている。車窓からこちらは好奇の眼で見つめるが、向うはちっとも表情を変えない。バンコクの蒸し暑さにはまいったが、ここは夕暮れの風がここちよい。ホテルに荷を置き、マネージャーのトラチャン氏と共に夕食をとりに出る。栄養をつけようと豪華な食事となる。トラチャン氏は日本語がとても上手だ。ビールで乾杯する。

準備が始まる。師田さんがイランでパスポートを盗まれて往生しているらしいので心配する。一週間しかないから、食糧係の僕としては忙しい。人のあふれるバザールで買物の毎日が続く。八月末のこの時期はまだモンスーンの中で曇りがちの日が多く時々雨が降る。ヒマラヤの峰々がホテルの庭から見えるらしいがまだ眺められない。夜はコウモリが外でバタバタしている。結構涼しいので毛布がいる。

バザールは活気にあふれている。多民族国家だけあって顔つきは様々だが、概して日本人に似ている。貧しいけれどとても素朴な感じがする。シェルパとは馴れない英語で話す。カトマンドゥの彼らは、外国人と同様特異な存在と思われた。観光が産業のようなこの国で、ヒマラヤをガイドするのは彼らに外ならない。それに外見も遠征隊が支給するセーター、ジャンパー、トレーニングウェアを着ているため異彩を放っている。街ですれ違っても、ああ、これはシェルパだなとはっきりわかるのである。買物の交渉は値切れるだけ値切り、キャラバンや登山で使用する物を購入する。初めて見る物もある。チャパ

ティをのばす円板や棒、凹のない杓子。赤や黄そして黒もあるダル。カレーに使うマッサラ。うりのおばけのようなもの。調理法は全くわからないけれどコックが料理するから心配はない。日本で間に合わなかった乾燥野菜を求めに店へ行くと、ドライヤーで玉ネギ、ニンジン等を干していたのには驚いた。ほとんどホテルでは食事をとらず街のレストランへ行く。チベッタン料理が安く、よく利用した。モモというギョウザもありメニューは日本と比べても豊富だ。バフ（水牛）の肉も食べるがあまりうまくない。日本食の天ぷら、かつ丼、すしも食べるがネパールにしてはとても高い。ダヒ(ヨーグルト)、アイスクリーム、ケーキ、パイ、皆おいしい。特にラッシー(ヨーグルトにミルクを混ぜシェイクしたもの)がおいしくて毎日飲んでいた。少しカトマンズの街や人に馴れたと思う頃には準備を終えポカラへと発つ。

トラックに荷を満載し、インドのタタ社製バスで中国が作った道路を野越え山越え暖いポカラに着く。バナナが茂り、水牛が泳ぎ、牛、馬、ヤギ、ヒツジが草を食むのどかなところだ。

ポーターが集まってホテルの庭は賑やかになる。強そうな奴から順に、サーダーが名前を聞き書きして、アドバンスマネーを払い、拇印を押させる。一人当り荷を三〇キロにふり分け番号をつけ、その番号札をポーターの首にかけ契約終了となる。女性のポーターもいるが、ほとんどはシェルパニと呼ばれる働き者だ。七〇人の契約は半日仕事となる。一日休養がとれ、近くのペワタールという湖へ遊びに行く。秀峰マチャプチャレは現われなかったが、冬の晴れた日この湖面に姿を映すのが見られればどんなに素晴しいことだろう。ヨーロッパのツーリストが多く、水着で日光浴をしている。皆ではしゃぎ泳ぐことにする。泳ぎの達者な加藤は対岸まで往復した。ネパール人は横の方で体を石けんで洗い風呂代りにしている。

キャラバンが始まる。コースはその昔チベットとの交易路として賑わったジョムソン街道を行く。石畳の道には子どもがたくさん遊んでいる。可愛いい子が多い。とても愛くるしく、時には色っぽくもある。スカートをはいているんだけれど下着はつけていないのが多かった。カメラを向けるとはずかしがるので仲々撮れない。もっとも加藤など追いかけてまでカメラを構えていたが。大名行列でサーブと呼ばれる我々隊員はゆっくりと行く。えらくなったものだ。雨の日が多かったけれど毎日楽しい日が続いた。ティルケドゥンガでは地元の中学生とバレーボールに興じ、ゴラパニでは唄ってダンスを踊り、タト

パニでは温泉に入れた。

奥へ入るほどやはり英語は通じなくなる。ネパール語を勉強して現地の人と喋るように努める。シェルパについても同じで、交流を深めるように努める。言葉が通じ、互いに理解し合うことはやはり素晴らしいことだと思う。何日も寝食を共にすると表情だけでも気持ちは通じ合うが、どうしても言葉の違いが壁を作る。雇う者と雇われる者の関係には違いないが、彼らの考えていること、腹の内を知りたくなるものだ。シェルパ達の方が我々より数多くの外人と接していて、その感覚、こなし方を身につけている。僕などはサーブであってもただの日本人で田舎者にすぎないのだ。ネパール語が片言だけれど何とか通じるようになると自信がつき、一人で茶屋に入っても心配ではなくなる。

街道からはずれ四三〇〇メートルのトロブギンの峠を越えると人の住む世界ではなくなる。羊を追ってくる羊飼いの宿となる石積みの小屋「カルカ」が見られたのを最後に、アンナプルナ、ニルギリの懐へ入る。ヒマラヤのジャイアンツ。とてつもなく大きな岩と雪の世界が今自分を包んでいる。氷河が運んだモレーンの川原にBCを建設する。運が良く、アンナプルナⅠ峰に挑むアメリカ女性隊が訪ねて来た。次の日はアンナプルナのベースキャンプに招かれ、こんなんで山に登れるんかいなと思うほど楽しく過ごす。BCからは氷河がよく見えた。轟音を立てて崩れたり、雪崩が走る様は迫力もさることながら胆を冷した。

登山活動が始まる。氷河を歩く。初めてで凄いなあと感激のしっぱなしだった。それも、重荷にあえぐ日が続くにつれ、岩と雪の単調な世界にうんざりし出す。日本の山が懐かしい。四季それぞれの美しさを持ち、なんとも言えない繊細さがある。ガスって足もとだけを見て歩く時そんな事を思った。

BC入り前、雨の中のトランシーバ交信でカゼ気味になり体調をくずした。その上、高度の影響で身体がおかしくなった。ついにC1で夕食後、ゲェーとやった。僕は高校の時ボート部にいたんだけれど、三年の時夏バテで体調をくずしながら合宿へ入った。やっぱりゲェーゲェーやった。それを思い出した。そのまま目指す国体の予選があり試合当日もゲェーとやって敗れてしまった。残念だった。ボートでは百分の一のキャッチがくるえば艇速が鈍る。そんなクルーのうち一人でも、ましてリーダーがダメだったら調子がくるう。これほど、自分の不甲斐なさを仲間に対してすまないと思ったことはなかった。登山でもやはりパーティのうち一人でもブレーキがかかれば他の者に迷惑がかかる。健康管理は各自の責任でやらなくてはいけない。あーあ、情けないなあと思って寝たら、次の日は心配するほどではなくケ

ロッとしていた。C2へ上がるまで長く苦しかったけれど頂上へ近づくにつれ、興奮してきたのか、意欲が出てきた。これなら事故がない限り大丈夫、イケルと思った。アイスフォールを登っていてBCが遙か下に見えた時、我ながらえらい所まで来てしまったと思ったけれど、増々登はん意欲は出て来た。C3では気分が落ち着いてなるようにしかならんと思った。アタックを前にしてゲェーとやらなくてほんとに良かった。

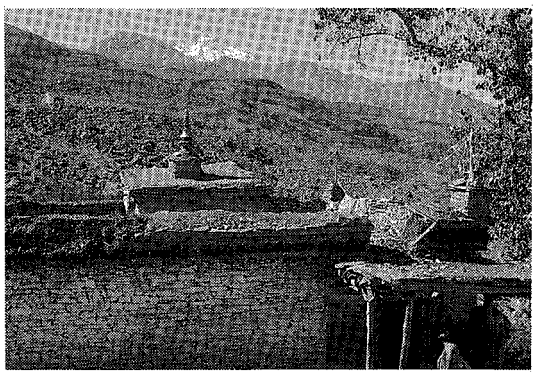
一日休んで次の日には、リエゾン・オフィサーとメイル・ランナー、僕と加藤の四名でムクチナートへ向った。ポーターアレンジのため下山するサーダーも一緒に発った。すでに川原の淀みも凍るほど寒くなっていた。往きには三日かかったところを一日で駆けた。サーダーはどんどん先へ行きちっとも休まない。長いBC生活で体がなまったのかリエゾン・オフィサーは遅れがちになる。ミリスティ・コーラからトロブギンへの急登で彼は何度も足がつった。「ノープロブレム、ノープロブレム」と弁解していたがやはり遅い。とうとう満月の光のもとで歩くようになった。とても僕らに気を使う人なので「心配しなくていいから頑張ろう」と何度も励ました。なんとかデウラリの部落に着いた。農家でのフレッシュミルクとマッカイ(トウモロコシ)がとてもおいしかった。次の日はダウラギリ、ツクチェが見えてとても気持ち良かった。往きに見られなかったニルギリも見られた。きれいな山だとほれぼれする。先日とは打って変わってリエゾンが張り切り出し、どんどん先行する。こっちは登山が終ってのんびり行きたいところなのに、しごかれているようだ。カロパニにはトレッカーが多かった。リエゾン・オフィサーが「ニルギリ・サクセス」を連発して我々のことを皆に紹介するので祝福される。この辺りは松を主とする緑が多く心が和む。カリ・ガンダキの川原が広くなり、カンチャマンが川原で何やら拾っている。アンモナントの化石があるのだ。黒くて丸い石はサリグラムと呼ばれ宝石扱いされるそうだ。黒っぽい堆積岩を砕くと中にアンモナイトの化石が入っている。何度も石を割って試みたけれど、僕と加藤は一個も見つけられなかった。カンチャマンが目ざとく見つけて来てすべて我々にくれた。ラルジュンを過ぎると風が強くなり寒々としてくる。ツクチェの街へ入る。ゴーストタウンのようになってしまったと聞いていた通り人影は少なかった。ツクチェ・ピーク・ホテルに泊る。カトマンドゥにいるトラチャン氏の実家だ。次の日も天気は良かった。気持ちよく川原を歩く。マルファは穀物やリンゴが豊富な街だ。マニ石が多く、石がゴロゴロする道を荷を積んだポニーが行き交う。飛行場のあるジョムソンに着く。ニルギリ北峰がすごくきれいに見える。リエゾン・オフィサーのはからいでチェックポストは素通りで

き、ポストオフィスで登頂の知らせを打つ。ここからカリガンダキはとても広くなり荒涼としている。遙か先はムスタンだ。馬に乗ったチベッタンが行き交う。馬に乗ってチベットの草原を駆けられたらどんなに幸せだろう。彼らを羨ましく思った。砂嵐が舞うため仲々先へ進まない。ムクチナートは遠くいいかげんいやになって加藤とブツブツ言う。ムクチナートはヒンズー教の聖地で巡礼者が集まるところで今どきは祭があってとても賑かだ。そう聞いて、ははん、きっと善光寺のような賑いなんかなあと期待して出かけた。それがもうこんな砂漠のような道を歩かされてちっともおもしろくなかった。日が暮れて漸くザルコットへ着いた。次の日は荷を置き、いざムクチナートへと出発した。期待ははかなくも打ち砕かれた。静かなもので巡礼の人などいないではないか。僕と加藤はガックリ来た。しかし、リエゾン・オフィサーはことの他ご満悦であった。「どんな気分だ」と聞くので「心が清らかになった」と答えると「そうだ、私も心が清められて気分がいい。」と深呼吸してタヌキのような腹をポンポンたたいた。お寺巡りをする。ビシュヌ神を祀る寺ではティカを付けてもらい悦に入ってたが、案の定布施を請求された。ラマ教の寺院では天然ガスを祀ってあったり、大仏があった。帰りの道端でみやげ売りを冷やかしていると見覚えのあるシェルパに会い懐しかった。タルカリ、ダルバートをたらふく食べてジョムソンへ戻りローカルロッヂに泊る。チョーヤで合流するまで日があるので、のんびりと来た道を戻った。

皆と合流した帰りのキャラバンは開放感でいっぱいだった。チャンを飲み過ぎ腹の調子をよくくずした。今度はポーターの替わりにポニーを使う。一頭で二人分の荷を運び、文句も言わずに黙々と歩くから順調に進んだ。ポロン、ポロンとベルを鳴らして、精一杯の化粧をしたポニーと一緒に歩くと時間を忘れる。茶店では知っている限りのネパール語で話かけると、相手（カマドを前にして店を守っているのはほとんど女性）もおもしろがって色々話してくれる。タトパニからのニルギリ南峰は美しかった。ゴラパニの峠を越えるとニルギリと別れる。皆、帰路を急ぐ。ヨーロッパのトレッカーが行き交う中ポカラへ着き、そして夕暮のカトマンドゥへ戻る。やっと帰って来た。二ヶ月余りはやはり長かった。

気がゆるんだのか、ネパールのペースにはまったのか、残務整理も仲々進まず一日一仕事で終る毎日が続いた。それを振り切ってランタン谷へ二週間入った。

加藤と僕の他、カラマツの調査をするため、気の知れたカンチャマンとホテルで知ったタマンのガイド（師田さんをＢＣまでガイドしたラルマン・ラマ）、それにホテルが一緒だった東京の吉田さんも同行



ムクチナート　聖なる火を祀るラマ教寺院

することになった。

道中はジョムソン街道ほどの賑わいはなく静かだった。トリスリ川をはるか下に見て、稲やシコクビエの穂の中、のどかな気分で歩く。シャクナゲの茂る山腹を巻いて行くと、ランタン・リルンが現われた。山容は大きくて立派だ。右に長い稜線をなびかせている。大阪市大はあそこから登ったんだろうと加藤と話す。ランタン谷は世界一美しい谷と言われただけあって素晴らしいところだった。ランタン・リルンもさることながら特に印象に残るのはガンチェンポであった。ヒマラヤ襞のついたそれはもう美しい山だ。おとなしいヤクが草を食む草原で一日中寝ころんでいても飽きないほどだ。カラマツは、ランタン村の下流のモレーン最下端からギャンジンの三八五〇メートルまであることが解っていたので測定具をもってウロウロする。U字谷の北向き斜面にはヒマラヤモミと混交したり鈍林に近いものもあったが、あまりにも急なため近寄り難くランタンコーラ沿いに調べた。放牧のためか矮生しているカラマツが多かった。帰り道、モレーン最下端より低い、ゴサインクンドの下方二六五〇メートルの所にもカラマツが見られた。カンチャマンにカラマツを指さして、「これはネパール語ではなんて名だ」と聞くと「ルークだ」と答えたのでルーク・リサーチ、ルーク・リサーチと言って彼らを連れ歩いた。ランタン谷を去るに当っていろいろ単語を整理した。馬―ゴダ、犬―クックル、さる―バンダル、白毛のさる―ロンガル、それに菩提樹―ピープルコルーク、三葉松―サラコルーク、この時になって驚いた。ルークとは「木」ということである。ガックリ来た。カラマツの球果を示し母樹は何と呼ぶかと正したところ「ラーニ・サングラ」と答えた。これもあまり信用できないけれど。

タマンの二人はシェルパに比べると登山そのものにはあまり関心を示さないが、サーブに対しては従順でよく気がつく。シェルパよりはスレていないと言える。タマンの歌や、ネパールの流行歌を僕らが覚えるまで一生懸命教えてくれた。歌い出しに美人の多い地名を上げるものもあった。

「カトゥマンドゥーコー　ネーワラニー
　タコラコー　タカリニー
　ヘランブーコー　シェルパニー
　シィンドゥパルチョク　タマンニー」

ヘランブーは、ギャンジンよりガンジャラを越えれば入れるが、地下足袋じゃやはり無理な所で、加藤と泣く泣くあきらめた。タコーラ地方のタカリーはやはり美しかった。それに宿をやっている内でタカリーの作るカナ（食事）が一番おいしかった。カンチャンマンが「セカンドワイフはタカリーがいい」

と言ったのは十分うなずける。でもこれは冗談にすぎず、族外婚は仲々無理な話である。カンチャマンは往きの道中調子が悪く、のどの痛みを訴えた。どうしたのだと尋ねると、スープの中に髪の毛が入っていてそれがのどにからみついたから痛いのだと言う。二、三日経っても良くならないので熱をはかると三八度近かった。やっぱりこれはカゼだろうという事ですぐ休ませた。真剣な顔をして言うものだから驚かされた。森の中でさるが騒いでいるのを見てからこんな話になった。「欧米人のことを何と呼ぶか知っている？」「いや知らないけど」「モンキーて呼ぶんだ」同感。彼らは顔立ちも似ている我々には心を許すのだろう。収穫期で野良に出ている村人たちに「今何時か」「火を借してくれ」とかよく声をかけられた。外に出て遊んでいる子どもはしつこく「ミータイ、ミータイ」そして「パイサ、パイサ」と物を乞う。聞かぬふりをしてやり過ごすしかない。

カトマンドゥへ帰るとツーリストが多かった。街をぶらつくのは楽しく、みやげ物屋を冷やかす。レンガ造りの三階建てくらいの長屋になった家が多く、階下の店は本柱で仕切られているのが入口だ。中はうす暗い。僕と加藤とラルマンでターメルのチャンを飲ませる店へいった。日本で言えば赤ちょうちんみたいな所で賑やかだった。ランタンで知ったガイドのバルクーもいた。煮豆とかタルカリがつまみだった。とたん女将が警官が来るといってバタンと戸を閉めた。チャンも隠せという。チャンは自家製なので酒税にでもひっかかるのかと考えさせられた。バルクーが外へ出ていったと思ったら、事もあろうに警官を連れて来た。カーキ色の制服を来て、部下の者も一緒だった。どうなるのかと心配していると、大丈夫、俺の友人だから安心しろと言う。俺と加藤が紹介されると、彼は日本にはとても興味があるらしく、柔道も習ったし、エンジニアの〇〇氏を知っていると言う。バルクーが酒を彼につぐと遠慮せずに飲んでいた。日本じゃ警官が制服を着て飲まないだろうし、やっぱりネパールだなと思う。連絡将校もそうだったけれど、官史や知識階級は日本の技術の優秀さを羨望をもって語る。

カトマンドゥの街中だけでなくバドガオン、パタンの古都を初めあちこちを自転車で駆け回った。京都のようにいたる所に寺院が残っていて見るところが多かった。冬山合宿まで日がないので急いでインドに発った。ゴアやケララのコロバンビーチで泳げたけれどディスカバーインディアの旅で目がまわった。疲れてカトマンドゥへ戻るとやはりホッとした。人々の表情は穏かでのんびりしている。街はインド同様活気にあふれているが落ち着ける雰囲気だ。冬を迎えたカトマンドゥ盆地は寒かった。朝は乳白色の霧が立ちこめ昼まで晴れない。旅行者が目立つ街から逃げるようにして日本へと発った。

ネパール人の目から思う

加藤　喜章

好奇心を露にしてぼくを見つめているネパール人がいる。それはぼくのどんな抵抗に対してもひるむことなく、足を止めて執拗なまでに続けられる。そして、思いもよらない所に彼らの目がある。はるか遠くの畑から、暗い窓から、生い茂ったやぶの中からでさえそれは感じられる。小便をしていてふと気づくと、どこからか二・〇以上の目でもってぼくを見ている人間がいるのだ。それが五メートルと離れていない場所であっても同じだ。彼らは何の躊躇も見せないで面と向かってぼくを観察する。ある時などは、暗闇の中で大便をし終ってふと立ち上がると、老婆がすぐそばでぼくを見ているのに気づき愕然とした。何という本か忘れたが、ネパールに関する本の冒頭に、ネパール人の持つ目の鋭さについての詩が書かれていたが、まったくぼくをたじろがせるほどだ。それはボード・ナートのストゥーパの目とは違う。ボード・ナートの目もぼくをたじろがせるが、それは宗教的建造物が持つ尊厳のようなものに威圧されるのであって、ある種の感動がある。彼らの目から与えられるものは嫌悪やなにかしらの憤りや、そういった不快な感情だけだ。

そして、彼らはぼくの行動を絶えず観察していて、折りあらば何かを手に入れようとする。茶店で昼飯を食おうと思って、ビスケット等を取り出したビニール袋を横に置く。すると、そばにいた老人がそのビニール袋をていねいにたたみ出し、ぼくの視線に気づくと「くれ」と言って自分の懐にしまいこもうとするのだ。老人の浮かべる愛想笑いも加わって、次第に怒りが高まるのを感じた。また、子供は子供で「ナマステー」とかわいい声であいさつをしておいて、こっちが「ナマステ」と返すと、今度は「ミトー」と、人差し指を頬にあててグリグリと動かしながら、何かを要求して来る。初めはそれもかわいいものだが、次第にやはり嫌悪と憤りしか感じなくなって来る。彼らは「～してもらう」という意識を子供の頃から持ち続けているようにも思えて来る。

それについてこれ以上とやかくは言うまい。恵まれた自分の境遇からは彼らのそれを推し量ることはむずかしいし、もしぼくがネパールに生まれていたならと考えた時、何の疑いもなく物をねだる姿が想

像されるのだから。現に戦後の混乱期には、日本人は米兵に群がって物をねだっていたというではないか。また、貧しい国にあって富んだ国からの侵入者が目の前で豪遊する姿を見れば、彼から恩恵を受けるのは当然と考えるのが普通だろう。ぼくはネパール人が好きだ。好きだからこそ貧しくとも強くあってほしいと思う。単なる自己満足のために施される慈悲などははねつけてしまうプライドをもってほしいと思う。このようなことを望むのも単なる傍観者の身勝手なのではあるが。

装　備

吉田　秀樹　加藤　喜章

プレ期の成功により、装備に対する基本方針が充分通用するという確信を得、今回の計画立案はスムーズに行えた。（プレ期の項参照）ただ以下の点について留意した。

1、ルート中にアイスフォール帯がある。
2、モンスーン中にキャラバンを始める。
3、トロブギンのコルを越える時の水の確保。

結果的には1、の点でフィックス・ロープの長さの計算に甘さがあったが、特に支障はなかった。

（個人装備）

シェルパ支給装備については、シェルパからのクレームで大幅に変更せざるを得ず、BCまでにもかかわらず、羽毛服代、準登山靴代を支払う事になった。

（登攀具）

アイスフォール帯については皆、経験がなかったが、

1、信頼度の点で太さ八～九ミリとする
2、高度差五～六〇〇メートルと考え、ベタ張りするとし一〇〇〇メートル用意した。

またC3以上の雪壁・雪稜用については、重量の点からも六ミリロープを使うこととし七五〇メートル用意したが、C3直下でナダレに二〇〇メートル分、流されてしまい、結局その分が不足した。

使用量

（フィックス・ロープ）
BC—C1　六〇メートル
C1—C2　五四〇メートル　下部アイスフォール帯
C2—C3　四七五メートル　上部アイスフォール帯
C3—P　六六〇メートル　一部張り替え
の計　一七三五メートル

（ハーケン）　ロック　四本　アイス　三二本　スノーバー　三六本

ナワバシゴ、アブミは使用しなかった。

バイル、ハンマーは氷に効く物を用意する必要があった。
スノーバーは中央に穴のあいた物が用途が広い。
九ミリのフィックス・ロープはナイロンのヨリであったが非常に硬くて使いにくく、他の物（魚網用等）にしたかった。
アイスハーケンは、日中の強い日差しで、短いコの字型は場所によって一日でとび出していた。パイプスクリュー型は短くともよく効いたが平型は全く効かなかった。

（露営具）

キャラバン中は、一〇人用カマボコ天（隊員用）、一〇人用夏天（シェルパ用）、五人用夏天（リエゾン用）を用意したが、雨の時はカマボコ天＋工事用シートだけが悲惨な目に会った。ポーターには各自にビニール布を支給したが、途中ポーターが勝手に交替したりして、雨具のないポーターがでてきてしまった。工事用のシートは八枚用意した。
上部用としては、プレ期より一人増す事、もう少しゆったりしたいという事で六人用ミード型を送ってもらった。最終配置は、
C1…二、三人用ドーム型1
C2…六人用ミード型1
C3…二、三人用及四、五人用ドーム型各1
となった。今回は強い風に吹かれる事もなく、快適であった。

（炊事具・火器）

プレ期と変わらないが、BC以上のコッフェルと食器を別に用意した。火器は、C1…スベア、C2…ガスコンロ、スベア、C3…ガスコンロ、C2はガスコンロを使う予定だったが、六人分の食事を作るのは火力不足でスベアを併用した。ガソリンはモンスーン中である事と、シェルパにあまり節約させなかったので六〇リットル消費した。

（その他）

装備のある物はプレ隊より安く譲ってもらった。

峠越えの水は、峠で泊まる一晩が問題であるとしたが水場もかなり遠い(二時間くらい)があり、ポーターも各自でまかなっていたようで多く用意したポリタンクは穀物入れに重宝した。
ヒル対策としてコハゼの多い地下足袋を用意したが足に合えば非常に便利であった。

食糧

田中　誠司

カトマンドゥから日本で用意するリストを送ってもらい、それに従って日本食を準備することで始まった。OB諸兄の尽力で半ば調達できて、係としては残りのこまごまとした物に色をつけて買い出したにすぎなかった。高所はともかく、キャラバンなど現地ではどんな物を食べたりするのか勉強不足のために漠然として捉えられず、まあ何とかなるだろうと日本を発った。そのため、カトマンドゥでは大忙しで、基本的な事から悩まされた。ナンパ東南峰隊の計画を参考にして購入リストを作ったけれど実感がなかった。コックを連れて買い出しに行っても、品定めが良くできないまま金の心配ばかりが気になった。でも大都会カトマンドゥだけあってほとんどすべての物が揃ったのでホッとした。キャラバンは雨期にかかるので、梱包にも注意し米やダルをポリタンクに入れたり、ダンボールをビニールシートでつつんで保管したのは良かった。しかし、小さいポリタンクに入っていたサラダオイルが漏れたり、ミリスティー・コーラで小麦や砂糖のカバーがはずれ、濡らしてだめにしたのは管理不行届きだった。キャラバンのコースはジョムソン街道を行く為、穀物、野菜も補給できたが、カトマンドゥ、ポカラよりは高くついた。玉子、にわとりも奥へ入るほど高くなった。タトパニの平尾さんの話では、遠征隊が通過するごと、毎年のようににわとりの値も上っていくとのことであった。ではキャラバン中の食事にとったものを以下に記す。

〈朝〉

まずモーニングティー、そして
チャパティ、ジャム&バター
パンケーキ、　ジャム&バター
ヌードルストープ
ヌードルの焼ソバ
スパゲティ

おじや
タルカリ、ダルスープ
お茶漬け

〈昼〉
ランチパックで
おにぎり
プーリー（揚げパン）、タルカリ
チャパティ、タルカリ
チューラ、タルカリ
蒸しパン、タルカリ
レーズンorナッツ入りケーキ
パンのタマゴ焼巻
ドーナツ
トウモロコシ、リンゴ等

〈夕〉
タルカリ、ダルスープorみそ汁
チキンカレー、ダルスープorみそ汁
クリームシチュー、スープ（シイタケ、卵、クノール）
野菜炒め、スープ
マーボどうふ、スープ

等で帰りはこれよりぜい沢になり、ヒツジの焼肉、ローストチキン、五目ずし、親子丼、天ぷら等を食べた。

このように、現地食が主体で日本食を三日に一度という予定を立てたが、日本食とネパール食の折衷という具合になった。もとより粗食に耐える者ぞろいの隊なので不満はなかったようだ。豆のポタージュ、あのダルスープも考えてみれば重要な蛋白源である。ニワトリを毎日料理していてはたまらないし、またその必要もないのである。ネパール人にとっては肉は祭の時などに食べるくらいで、日常はタルカリ、ダルバートの繰り返しである。シェルパ達とは、朝、夕食をできる限り共にした。遠征隊によ

く参加しているため、日本食にも慣れていたようだった。ただ一つ、すしにダルスープをかけて食べるのを見た時にはア然とした。リエゾンはブラーマン（カーストで高位に属する）で、やはり普段の食生活とはがらりと変わったものを食べさせられたため多少困惑していた。ワカメ、コンブ、のり、みそは初めて口にするものらしく、最後まで好まれなかったようだ。キャラバンでは食糧そのものにも増して水の事が心配された。こんな山奥にまでといっても、斜面を切り開いて水田や畑が耕されているため、生水は飲みにくかった。しかし、それを利用すればのどの渇きも覚えず、また、村人がかめを持って汲みにくる水場では生水も飲んだが皆大丈夫のようであった。コックのアン・ツェリンは、エベレストビューホテルのコックをしていたことがあり腕は良く、日本食にも通じていた。しかし、粗末な材料で工夫しておいしい物を作るというのではなくて、これこれを作るには、それ相当の材料がないと作れないというぜい沢派だった。レストランのコックタイプで、（貧乏な）遠征隊のコックには不向きなタイプという具合だった。ベースでそして帰りのチョーヤで食糧の横流しをしたと情報が入って、酷評だったコックでもあった。カナサーブと呼ばれ、管理の責任は私にあり、この点食糧のチェックが不十分だったことを深く反省している。リエゾンのドゥンガーナさんが「キャラバンのイニシアチブはコックが握っていて、サーダーのようにふるまう」と言っていたが、実際、ニルギリのベースまでは良く知っていた。そんなコックを使いこなすだけの力量が不足していたのを感じる。キャラバン当初から、リエゾン・オフィサー、シェルパ達とも打ち溶け合い、友好関係はとても良く、楽しい毎日だった。シェルパ達は良く気を使ってくれて、われわれのことをいろいろ心配してくれた。この信頼も、人情に流されていてはやはりだめであって、遠征隊という外国人の金で雇う者とネパール人の金で雇われる者という雇用関係を抜きにして接してはだめなことが身にしみてよく解った。日本より送った食糧は一九五キロで隊荷の半分を占めた。それだけにバラティーに富んでいて良かったという評が多かった。そして食事は楽しく賑やかにできて、不評もほとんどなくてコックの問題以外は無事に済み成功を収めたと思っている。食糧の細部については参考までに表にまとめた。

梱包、輸送

吉田　秀樹

（梱包）

ネパール政府のペナルティが緩和され正式に登山ができる事になったのが七月上旬。時間のなさが決

定的だった。普通の厚さの段ボール箱が手に入っただけだった。結果はそれでも使用に耐えるという事だった。

1、プラスチックの段ボール箱
2、トランク金属性
3、段ボール箱（大）とそれに二個入る小型
4、防水シート等
5、麻袋と竹カゴ
6、その他

1はプレ期の余りや他隊の余りものを使用、開閉の激しいキャラバン用物資を入れる。
2貴重品等
3BC以上に使うものを入れ防水シートをガムテープ、PPハンド等でしっかり梱包した。

会　計

藤松　太一

今回の遠征計画は、外部よりの金銭的援助を受けず、個人負担金を中心として行った。プレに遠征隊が出ており、装備面、渉外面など多面において安く行えた。また、現地へ行ったら、現地のレベルで生活をしようという事で、滞在費、キャラバン費とも他の隊と比べ、予算規模は半分か、それ以下で済ませる事ができた。ある意味で考えると、我々が計上し、実行した予算額が自然ではなかったかと思われる。ヒマラヤも遠征というより、日本の山へ登ると同じ考え方でよいのではないだろうか。しかし、まだ検討する余地があると思う。以下に計上予算収支と実行収支を対比して示し、概略の説明を加えて会計報告とする。

・食糧費の一部、医療品費の全ては厚意ある寄贈に負ったものである。
・現地装備費の一部はプレ時のチューレン、名古屋山岳会より安く譲ってもらったものである。
・エージェントはプレと同様ランジャン氏に行ってもらい、通関、ビザ、諸雑務全てを含めて一〇万円である。
・隊員負担金は学生四〇万、OB五〇万円、現地集合隊員二〇万円とした。
・食糧費のほとんどは現地食という事で、カトマンズにおいて使った。

・登山料についてはプレ時の隊長であった山田氏の寄附による。
・通信事務費の多くは日本よりの電話代である。
・今回、非常に強い円のためたいへん金銭的には有利であった。換算率は別表のとおりである。

食糧リスト

隊員の食事を中心とした物である。
評価…優◎　良○　可△　不可×

J：日本
N：ネパール

品目	使用場所		質	味	備考
米(ポカラ米と呼ばれる、ジャポニカ型)	キャラバン ベース	N	○	○	
乾燥米　白	高所	J	◎	◎	少し重く、炊くのに時間はかかる
赤飯	高所	J	◎	◎	
チューラ	キャラバン ベース	N	○	○	
マイダ（精白小麦）	キャラバン ベース	N	○	○	ケーキに良し
アタ（荒びき小麦）	キャラバン	N	○	○	
ダル　黄	キャラバン	N	◎	○	ダルスープは各自好みがありなんとも言えないのでコックの腕次第
黒	ベース	N	○	○	
赤	〃	N	○	△	
スパゲッティ	キャラバン	N	△	×	
乾燥野菜　ほうれん草 人参 玉ねぎ ねぎ	高所	J	◎	◎	ネパールの物とくらべると日本製はまるで宝石のよう
カリフラワー	キャラバン	N	△	△	
キャベツ	キャラバン		△	×	
玉ねぎ	ベース		△	×	高所ではうんざりするほどまずい
人参	高所		△	×	
ほうれん草	〃		△	×	
しいたけ	〃		△	△	調理法を誤ったため失敗
グラノラ	キャラバン		○	×	
トマトクリームスープ	キャラバン		○	○	
ドライフルーツ　アップル	ベース高所	N	○	○	ケーキに利用
ピアー（梨）	高所	N	○	○	
ペルシモン（柿）	高所	N	○	△	ややべとつく
マンゴー	高所	N	○	○	
マッシュポテト	高所	J	◎	◎	
モチ	キャラバン ベース高所	J	◎	◎	ベースではおしるこに、高所では焼きモチにした、重いけれど貴重品。
インスタントラーメン	高所	J	◎	◎	ラーメンのスープだけでも十分うまい
焼きソバ	高所	J	◎	◎	
きつねうどん	高所	J	◎	◎	
信州ソバ	ベース	J	◎	◎	
冷や麦	ベース	J	◎	◎	
砂糖	キャラバン ベース高所	N	○	◎	
塩	〃	N	○	○	小パックで便利
ギー	キャラバン	N	○	×	
ネパーリオイル	キャラバン ベース	N	○	△	
サラダオイル	キャラバン ベース	N	○	○	小さいポリタンク入
バター	キャラバン ベース	N	○	◎	保管に要注意
トマトケチャップ	キャラバン ベース	N	○	○	ビン入
ビネガー	キャラバン ベース	N	○	○	ビン入
ウスターソース	キャラバン	N	○	△	ビン入

トンカツソース	キャラベンベース	J	◎	◎	ポリパック
ガーリック	キャラベンベース高所	J	◎	◎	ビン入
クッキングエッグ	〃	J	◎	◎	
粉末みそ	〃	J	◎	○	濡れに注意
だしの素	〃	J	◎	◎	
乾燥しょう油	〃	J	◎	◎	濡らすと扱いにくい
しょう油	ベース	J	◎	◎	乾燥物より優る
味の素	キャラバンベース	J	◎	◎	少ししか持って行かず失敗、とてなも有効品。カトマンドゥでも売っている
ミートマッサラ	キャラバンベース	N	○	◎	別にこれといった味はないがどれがいいか良く解からない
イエローマッサラ	〃	N	○	○	〃
こしょう	キャラバンベース高所	N	◎	◎	ビン入
チリー（唐がらし）	キャラバンベース	N	◎	◎	赤色を使用
にんにく入唐がらし	キャラバンベース	J	◎	◎	日本での特製、口の中に火が走る
ベーキングパウダー	キャラバンベース	N	○	○	評価しにくい
ドライイースト	キャラバンベース	N	○	○	〃ポリパック入
コンソメスープ	ベース高所	J	◎	◎	
チキンコンソメ	〃	J	◎	◎	
クノールスープ	キャラバンベース高所	J	◎	◎	
中華スープ	〃	J	◎	◎	
中華あじ	キャラバンベース	J	◎	○	果粒状
ねりわさび	ベース	J	◎	◎	チューブ入
からし	〃	J	◎	○	〃
おろし生にんにく	〃	J	◎	○	〃
生しょうが	〃	J	◎	◎	〃
バニラ メロン エッセンス	キャラバンベース	J	◎	◎	小ビン入
ポッカレモン	高所	J	◎	◎	ビン入で重い
マヨネーズ	キャラバンベース高所	J	◎	◎	いたまなかった
カレールウ	キャラバン高所	J	◎	◎	やはり日本のカレーの方がいい
クリームシチューの素	〃	J	◎	◎	キャラバン中コックが調理法を誤る
ビーフシチューの素	〃	J	◎	○	
酢豚の素	〃	J	◎	◎	
マーボー豆腐の素	キャラバン高所	J	◎	◎	
八宝菜の素	高所	J	◎	◎	
みそ八宝の素	〃	J	◎	◎	
グラタンの素	〃	J			
インスタントみそ汁の素	〃	J	◎	◎	
釜めしの素　とり	〃	J	◎	◎	
さけ	〃	J	◎	◎	
山菜	〃	J	◎	◎	

お茶漬のり　のり、梅干し	キャラバン	J	◎	◎	
たらこ、さけ	ベース	J	◎	◎	
	高所				
焼肉たれの素					全く使用せず
ふりかけ　ゆかり、たらこ、ごましお、のりたま、のりふり、本かつお、一発くん	キャバン	J	◎		
	ベース	J	◎		
	高所	J	◎		
	〃	J	◎		
	〃				
	〃				
めんつゆの素	ベース	J	◎	◎	ビン入
寒天	ベース	J	○	○	ほとんど使わず
ふ	ベース	J	◎	◎	
白玉粉	ベース	J	◎	○	
ひじき	キャラバン	J	◎	○	
	ベース				
かんぴょう	ベース	J	◎	◎	
ほんとうふ	キャラバン	J	◎	○	作るのに時間がかかる
片栗粉	ベース	J	◎	○	
すしのこ	キャラバン	J	◎	◎	
	ベース				
カラフト巻こんぶ	高所	J	◎	◎	時間がかかるが味がついていて良い
とろろ昆布	キャラバン	J	◎	○	
	ベース				
	高所				
にぼし	ベース	J	◎	◎	上等だったのでカビなかった
	高所				
味付のり	キャラバン	J	◎	◎	
	ベース				
	高所				
もみのり	〃		◎	◎	
わかめ	〃	J	◎	◎	小さく刻んであって便利だった
かつお節（削りぶし）	キャラバン	J	◎	◎	
	ベース				
	高所				
かつお節					全く使用せず
こうや豆腐	高所	J	◎	◎	戻りは良い方だった
いか塩辛	キャラバン	J	◎	◎	ビン入
	ベース				
	高所				
梅ごのみ	〃	J	◎	○	ビン入
のり佃煮	キャラバン	J	◎	◎	小パック入
	高所				
らっきょう	高所	J	◎	◎	ビン入
コンビーフ	キャラバン	J	◎	◎	缶詰
	ベース				
ベーコン	高所	J	◎	◎	真空パック入、いたまずおいしかった
	ベース				
コーヒー	高所	J	◎	◎	ネスカフェ
	ベース				
ココア	キャバン	J	◎	◎	
	ベース高所				
紅茶　ダスト	キャラバン	J	○	○	
	ベース				
ティーパック	ベース	N	◎	◎	
	高所				
ほうじ茶	キャラバン	N	◎	◎	
	ベース				

緑茶	キャラバン	N	◎	◎	
パック入	ベース	N	◎	○	パック入は便利
	高所				
麦茶　パック入	高所	N	◎	○	〃
コンデンスミルク	高所	N	◎	◎	オランダ製、缶詰
スキムミルク	キャラバン ベース	N	◎	◎	ピンからキリまである
ハニー	キャラバン ベース	N	◎	◎	保管しにくい
ジャム　ストロベリー	キャバン	N	○	○	
アップル	ベース	N	○	○	
マンゴー	高所	N	○	○	
パイン	〃	N	◎	○	
アプリコット	〃	N	○	○	
ピーナッツバター	キャラバン ベース高所	J	○		
レーズン	〃	J	○	○	枝つきでとるのが面倒
ピーナッツ	〃	J	◎	◎	量が多すぎた、塩味
カシューナッツ	キャラバン ベース 高所	J	○	○	高所へ多く持って行き過ぎた
アーモンド	〃		○	○	〃
ビスケット　グルコース	キャラバン 高所	J	○	○	行動食　量が不足した
塩味	〃	J	○	○	〃
粉末ジュース各種	高所 ベース	J	◎	◎	大好評
昆布茶	キャラバン ベース 高所	J	◎	◎	
うめ昆布茶	〃	J	◎	◎	
はちみつチューブ入	高所	J	○	○	
レモンティー　パウダー	〃	J	◎	◎	高価だが便利
ミルクティー　パウダー	〃	J	◎	◎	
梅ぼし純	〃	J	◎	○	
ザミルク	〃	J	◎	△	ピンチフート
ビンズレモン	〃	J	◎	◎	
チーズ（ベビーサイズ）	〃	J	◎	◎	
チョコレート	〃	J	◎	◎	
ようかん	キャラバン ベース 高所	J	○	◎	
ゼリーの素	キャラバン ベース	J	◎	◎	
ゼリーエース	ベース	J	◎	◎	
プリンの素	キャラバン ベース	J	◎	◎	
さらしあん	ベース	J	○	○	
ゆであずき缶	ベース 高所	J	◎	◎	
都コンブ	キャラバン ベース 高所	J	◎	◎	行動食のお供
あられ各種	キャラバン ベース 高所	J	◎	◎	いつでも食べられる
さきイカ	〃	J	◎	◎	
カンロタラ	高所	J	○	○	沈澱食にも利用
貝珍味	〃	J	◎	◎	

カッパエビセン	ベース 高所	J	◎	◎	
酒（アルミカップ）	ベース	J	◎	◎	
魚缶　サーモン	キャラバン ベース	N	○	○	
ツナ	高所	N	○	○	
マーシャル	〃	N	○	○	
フルーツ缶　パイン	キャラバン	N	○	◎	
白桃	ベース高所	J	◎	◎	大好評
ミカン	高所	J	◎	◎	
トマトジュース	〃	J	◎	◎	
野菜ジュース	〃	J	◎	◎	
キャンディー	〃	ネ	○	○	ネビコ製
玉ねぎ（ビアジ）	キャラバン ベース	N	○	◎	紫色で小さい、涙がでなくてよい
ジャガイモ（アルー）	〃	N	○	○	小さい
人参（ガジャ）	〃	N	○	○	あまり大きくない
大根（ムーラ）	キャラバン	N	○	◎	
カリフラワー（カウリ）	〃	N	◎	◎	ネパールの物はとても大きい
キャベツ(バンダゴビー)キャラバン ベース	〃	N	○	○	
キュウリ（カーンクロ）	キャラバン	N	○	○	
レモン（カガチィ）	キャラバン ベース	N	○	◎	小さい物が多い、タトパニにはほかに大きいのがあった
ショーガ（アドジャ）	キャラバン ベース	N	○	○	
ニンニク（ラスン）	キャラバン ベース	N	○	○	
トマト（ゴールベラ）	キャラバン	N	○	○	小さい物が多い、すぐつぶれてだめになる
ピーマン	〃	N	○	○	
瓜類（イスクーヌ）	キャラバン ベース	N	○	○	
（パルシー）	キャラバン	N	○	○	南瓜のよう
（チチンロー）	〃	N	○	○	
玉子（フル）	〃	N	○	○	あまり大きくない
みかん（スンダラ）	〃	N	○	○	
りんご（シャウ）	〃	N	○	○	
なし（ナシュパティ）	〃	N	○	△	
にわとり	キャラバン	N	○	○	とにかく肉は貴重でおいしいもの
ひつじ	キャラバン ベース	N	○	○	〃

会　計　報　告

◎収　入	総　額	¥ 2,935,392＋U$	3,503
内　訳			
●隊員負担金（６名）		¥ 1,900,000	
●学生山岳会寄附		¥ 438,000＋U$	500
●学内寄附（職員，卒業生）		¥ 60,000	
●一般寄附，雑収入		¥ 29,601	
●HIMALAYA 研究会より借入れ		¥ 500,000	
●NAMPA 隊より引継ぎ		¥ 7,791	
◎支　出	総　額	¥ 3,227,217	
内　訳			
●国内費	小計	¥ 1,312,523	
装　備　費		¥ 163,000	
食　料　費		¥ 140,000	
医　薬　費		¥ 4,632	
梱包輸送費		¥ 17,860	
保　険　料		¥ 73,369	
通信事務費		¥ 83,875	
航空　運賃		¥ 504,000	
隊荷空輸費		¥ 325,665	
●国外費	小計	¥ 1,914,694	
登　山　料		¥ 161,189	
人　件　費		¥ 602,230	
滞　在　費		¥ 112,230	
キャラバン費		¥ 86,694	
現地装備費		¥ 331,976	
現地食糧費		¥ 197,618	
輸　送　費		¥ 161,562	
通信事務費		¥ 11,076	
関　　税		¥ 74,575	
保　険　料		¥ 75,634	
エージェント手数料		¥ 100,000	
◎差引残金		¥ 377,640	

※　U$ 500分については　186.98／U$
　　U$ 3003分については　191.80／U$
　　又，16.8円／1 RS にて換算

遠征隊に後援・援助をいただいた方々

今遠征には以下の方々の暖かいご後援、ご援助をいただきました。ここにご芳名を記して、隊員、実行委員の心からのお礼にかえさせていただきます。

（アイウエオ順、敬称略）

㈱塩谷商店
信濃屋海苔店
昭和包装工業㈱松本工場
信英通信工業㈱
信州大学医学部順応生理学教室
信州大学学生部
信州大学ソバ学術調査隊（氏原暉男）
信州ハム㈱
鈴木　孝司
関根　倫雄
園田　公作
高橋　　照
高久　幸雄
田口　直人
竹新製菓 松本出張所
田中　英介
タムラカメラ
出町　　恵
アルパインツアーサービス
エクスペディションサービス
㈱　遠　兵
大野　幸雄
小沢屋機械商店
小野電気商会㈱
外務省情報文化局
柏木　初郎
加藤　静一（学長）
川越印刷㈱
川崎航空サービス㈱
川鉄商事㈱信州大学ＯＢ会
㈱　協　和
協和鉄筋㈱
小林　正明
五竜遠見開発㈱
佐藤　敏雄
佐山スポーツ

ブンリンスポーツ

堀内　照夫

本郷　晴好

松本鑿泉工業㈱

松本登高会

㈱松本鉄工所

宮坂醸造㈱

矢崎　幹明

山浦　一男

山我富士雄

山幸（雨宮節）

ヤマトヤ運動具用品店

山之内製薬㈱

モハン・シン・トラチャン（ツクチェ・ピーク・レスト・ハウス）

㈱百瀬石油

ランジャン・バタチャリヤー（エキスプレス・ハウス）

若島　郁夫

東　レ　㈱

㈱長野給食品

長野県山岳協会

長野県山岳協会中信支部
チューレンヒマール学術登山隊

長野フジカラー㈱

名古屋山岳会

名古屋大学山岳会

仁藤　清司

日本工営㈱カトマンズ事務所

日本山岳協会

日本山岳会 信濃支部

日本大使館（在ネパール）

ネパール政府観光省

浜　　元洋

㈲日高食品工業所

富士火災海上保険㈱

冨士川機械㈱松本出張所

編集後記

未知を求めてネパール・ヒマラヤへ遠征した時から、早くも六年の歳月が過ぎ去ってしまいました。ジェティ・バフラニ（春）、ニルギリ南峰（秋）連続初登頂という輝かしい成果をあげた隊員達も卒業や仕事の都合で松本を、信州を去っていきました。

報告書作成については早くから企画されていましたが牛歩、いや鍋牛の歩むがごとく、仲々進展せず、どういう風のふきまわしか松本近在に住む私に編集の大役がまわってきてしまいました。重い腰を上げ、不足の原稿を集め、図画のトレース、写真の選定、校正作業、そしてたび重なる編集打合わせを経て、やっとのことで発刊にこぎつけることが出来ました。

この間、信大ではネパール・ヒマラヤのガネッシュ・ヒマールⅢ峰、アンナプルナⅡ峰、フルーテッド・ピークへ計四隊の遠征隊を送り出しました。これらの遠征隊は登頂こそ出来ませんでしたが七八年の遠征の経験をもとに企画され実行されたもので、本遠征の以後の遠征に与えた影響は大なるものがあったと確信している次第です。

私にとって、このような報告書の編集、出版というような仕事は初めて手がける仕事であり、不慣れなため満足いくものではありませんが、「未知へのあこがれ」、そして未知へ向かっていく「情熱」というものを感じとっていただければ幸いです。

この報告書をまとめるまでには多くの人々の御理解御援助とはげましをいただきました。

遠征の計画立案から実行にあたっては福与邦夫委員長（当時、現長野県山岳総合センター主事）をはじめとする実行委員会のみなさん、終始励ましの言葉をいただきまた御指導をいただいた信州大学理学部の山田哲雄先生、心の内では大いに心配しながらも笑顔で送り出していただいた隊員の家族のみなさん、そして私たちの好機をよく御理解いただいた長野県山岳協会の方々に心から感謝いたします。

また、乏しい財政状況の下で多大な御援助をいただいた皆様に心から御礼申しあげます。

前信州大学長、加藤静一先生には御多忙のなかを序文をいただきました。厚く御礼申し上げます。

出版に際しては不慣れな者の無理難題を快く聞いて下さり、大いにお骨折りいただいた株式会社銀河書房の滝沢知寛氏、沓掛貴美子氏に厚く御礼申し上げます。

最後に、アンナプルナII峰に眠る私の同期生の故佐藤正敏君、アンナプルナII峰遠征隊副隊長で富士山に逝った故片岡格氏、ガネッシュ・ヒマールIII峰遠征隊員でグランドジョラスに逝った故福島渉君、そして私達にヒマラヤへの夢を与えて下さったが、御自分はヒマラヤを見ることなく、本書の発刊を目前に本年二月に急逝された故窪田文夫氏に深く哀悼の意を表するとともこの報告書を捧げます。

一九八四年七月

井関　芳郎

NEPAL HIMALAYA EXPEDITION 1978

（非売品）

発行年月日	昭和59年 9 月10日
編　　集	信州大学山岳会海外登山研究会
発　　行	信州大学山岳会
	信州大学学士山岳会
編集協力	（株）銀 河 書 房
	〒380　長野市三輪6—17—6 ☎ 0262—35—6271
事 務 局	信州大学学士山岳会事務局
	〒396　長野県上伊那郡南箕輪村8304 信州大学農学部砂防工学研究室気付 ☎ 02657—2—5255　内線451

©1984　落丁、乱丁はお取りかえいたします。